早稲田大学審査学位論文

博士（人間科学）

極東生まれタタール移民 2 世の帰属意識

—「テュルク・ムスリムの国トルコ」は唯一の「故郷」なのか—

Senses of Belonging in Second Generation Tatar Migrants Born in the Far East: Is 'Turkic Muslim Turkey' Their Only 'Home'?

２０２０年１月

早稲田大学大学院　人間科学研究科

沼田　彩誉子

NUMATA, Sayoko

研究指導担当教員：　店田　廣文　教授

目次

はじめに 1
1 章　極東からの移住 17
1-1　第二次世界大戦終結前のトルコ・アメリカ移住 17
1-2　第二次世界大戦後のトルコ・アメリカ移住 19
1-3　トルコ定住とアメリカ再移住 30
2 章　「テュルク・ムスリムの国トルコ」というモデル・ストーリー 35
2-1　モデル・ストーリーの内容 35
2-2　モデル・ストーリーとの距離感 38
3 章　朝鮮半島および旧満洲生まれのタタール移民 2 世の語り 43
3-1　「私はタタール人で、でもトルコ人でもある」―ラヒレ・アギ 43
3-2　「まあいろんな苦労しましたよ。どうしてトルコに来たのかも分かんないし」―OM.. 48
3-3　「つまり、3 つ祖国があるということになりますね」―ラヴィレ・イディルレル 56
4 章　日本生まれタタール移民 2 世の語り 65
4-1　「日本で習ったことをトルコで使って、発展しました」―ラヴィル・アギシ 65
4-2　「総合的に言って、我々はインターナショナル」―ダイヤン・サファ 73
4-3　「私たちは私たち。それだけ」―ナイレ・クデキ 83
5 章　タタール移民の変化する「故郷」 91
5-1　タタール移民の誕生 91
5-2　新たな「故郷」トルコの創出 92
5-3　極東出身タタール移民という拠りどころ 92
5-4　先祖の「故郷」 94
5-5　「ギョチメンリック」―移民であること 96
おわりに 98
謝辞 100
参考・引用文献 101
録音を伴うインタビューの協力者一覧 111

図 1　移住経路と時期 19

表 1　語りの文脈 11
表 2　調査地と時期 14
表 3　自由移民と定住移民の違い 21

資料 1　ルキヤ・サファのペレメチ調理風景 16
資料 2　香港からイスタンブルに到着したタタール移民たち 23

資料 3　バトゥマン号全景 26
資料 4　トルコに到着したバトゥマン号とタタール移民たち 27
資料 5　アンカラの「ゲジェ（ゆうべ）」にてダンスを披露する 2 世たち 46
資料 6　『蒙疆新聞』（1940 年発行） 61
資料 7　カルガンでの「宮崎夫人」による個人授業 62
資料 8　「ハルビンの私たちの家 1933～1936」 64
資料 9　サヌキ丸にて神戸からイスタンブルへ 87
資料 10　「カザン文化互助協会」50 周年記念式典記念品 96

はじめに

研究背景—なぜ今タタール移民なのか

「イスタンブルのカフェでチャイを飲みながら、東京のお豆腐屋さんや紙芝居やアイスキャンデーの話をする」［沼田 2015：163］。これが、トルコでの長期調査から帰国する直前、筆者の脳裏に浮かぶタタール移民との思い出の一風景だった。移住から半世紀以上が過ぎても、旧満洲、朝鮮半島、日本は、彼らの記憶のなかで存在感を放っていた。生まれ育った場所や、それらに根差した経験は、移住後の彼らの人生においてどのような意味をもったのだろうか。これが、本研究を貫く疑問である。

より良い（もしくは、少しはまともな）生活や可能性を求め、あるいは迫害や戦争、災害を逃れて新天地を目指す行為は、常に人間の精神に息づいてきた。しかしながら 2019 年現在、難民、移民をめぐる議論は冷静さを失い、人命や人権よりも政治的思惑が優先されていると言わざるを得ないだろう。「ゼロ・トレランス」政策では、移民となった事情は鑑みられず、イギリスでは国内の失業問題を EU と移民とに結びつけるという詭弁が、ブレグジットという事態を引き超す。難民が文字通り命がけで目指すヨーロッパでは、人道的危機が地中海を覆うという非常事態にあって、受け入れよりも拒絶の姿勢が顕著である。第二次世界大戦直後に作られた難民制度は機能せず［Betts and Collier 2018］、身の安全を求める人びとは資源を蝕む厄介者として見られている。

ここで言いたいのは、すべての移民、難民が善良な被害者だということではない。各国が抱える問題と、それに対する不満の矛先が、非論理的な形で移動する人びとに向けられ、冷静な議論を欠いていることこそが危ういのである。移住の動機が何であれ、人の移動がなくなることはない。気候変動による難民の発生なども危惧されており、いつだれが移動の当事者になるかわからない。そもそも移動自体は「悪」ではなく、権利である。これは、今後も「社会は疑いなく、移民の統合という試練に取り組み続ける」［Koser 2016：108］ことを意味する。言語や宗教をはじめとし、異なる背景をもつ人びとが同じ場所で共存していく道を探ることは、我々が世界各地で直面している課題であり、日本社会[1]も、海外で暮らす「日本人」（日本国籍保有者に限らず、日本に根差した経験をもつ人びと）も、その当事者である。

ホスト国の態度は、統合、同化、排除と多様だが、いかなる政策を実施したところで、その成否は対象となる移民､難民との相互行為の結果に他ならない｡国民国家としての政策だけでなく、移動する人びとの経験が議論されるべきことは、明らかである。そこで本研究では､「タタール移民」を取り上げ、2 ヶ国、2 地域間にとどまらない移動を行う人びとの帰属意識について考えたい。本研究では、英語の senses of belonging の訳語として、帰属意識という表現を用いている。そのため、組織の一員として帰属するという日本語がもつ意味合いよりも、愛着や安らぎ、懐かしさといった感情を指している｡「故郷」は、そうした感情の対象となる場所であり、ひとつに限定されるとは限らない。

本研究においてタタール移民とは、ヴォルガ・ウラル地域を出身地とするテュルク・ムスリム

---

[1] 日本社会の当事者意識がどれほどのものであっても、「日本はすでに事実上の移民国家であり」、「にもかかわらず、欧米諸国にあるような移民の統合政策が欠如していることがしばしば指摘されてきた」ことは無視できない［昔農 2017：25］。また、看過されがちな日本国内の人の移動についても、近年では例えば東日本大震災（2011 年）、熊本地震（2016 年）、西日本豪雨災害（2018 年）、北海道地震（2018 年）による国内避難民（IDP）の存在を忘れてはならない。

（テュルク系イスラーム教徒）[2]のうち、1917 年ロシア革命を最大の契機として極東各地へ逃れ、ほとんどは無国籍のまま第二次世界大戦という時代を生き延び、トルコやアメリカへと移住していった人びととその子孫を指す。トルコではクリミア半島に起源もつクリミア・タタール人が広く認識されているが、本研究が対象とするのは、トルコではしばしばカザン・タタール人と呼ばれるヴォルガ・ウラル地域出身の人びとであり、なかでも極東につながりをもつ人びとに着目する。

旧満洲、朝鮮半島、日本に誕生したコミュニティは、実際にはタタール、バシコルト（バシキール）など、言語、文化的に近しい関係にあるものの、今日では異なる民族とされる人びとによって形成されていた。デュンダルは、「中国、日本、朝鮮半島のコミュニティの中には、ミシェル、バシコルト、ウズベク、ウィグルに加え、アゼルバイジャン・トルコ人」や「アナトリア出身のトルコ人までいた。しかし、東アジアにおける共同体は、タタールかバシコルトかという問題を追及せず、民族の違いを気にかけずに親しくなり、テュルク・タタールの名の元にまとまった」とする［Dündar 2014：173］。彼らはマイノリティとして非イスラーム社会で宗教や言語を守るため、違いよりも、テュルク・ムスリムという紐帯にもとづき、まとまりを保つことを重視した。また、「民族という枠組みが明確になったのはソ連期であり」、国勢調査を通じて形成、定着していったことを考えると［櫻間 2011：35］、それ以前にロシアを離れたタタール移民が有する民族意識が、今日に比較して希薄であっただろうことも加味すべきである。タタルスタン共和国とバシコルトスタン共和国という確固たる線引きが存在する 2010 年代においても、筆者が出会った人びとはタタールと自称することから、本研究ではタタール移民との呼称を採用した。

ロシアから極東へと渡った人びとを 1 世とするなら、本研究の主役は 1920 年代後半～1950 年代初頭の日本、旧満州、朝鮮半島を出生地とする子どもたち、すなわち 2 世であり、彼らの語りを主軸に分析を行う。極東生まれのタタール移民 2 世の移住経験は、ロシア、極東、トルコ、ア

---

[2] 小松は、「英語で言えば Turkic にあたり、テュルク系の民族や言語の総称を意味」するものとして、「テュルク」を使用している。そして、「『トルコ系』という表現」については、「現在のトルコ共和国やトルコ語、トルコ人（Turkish）のニュアンスが強くなるので、ここでは使わない」とする［小松編著 2016：6］。また坂本は、「トルコ共和国に住んでいる人たちは自分たちをテュルクと称し」ているが、「このテュルクという言葉はふつう、以上のような意味とは別にさらにもう少し幅の広い意味をもっている。それは、アナトリアのトルコ人も含めて現在、ユーラシアの各地に広く分布し、生活している同じような人たちを総称していくときの使い方である。これらの人たちは、実際にはトルコ人、アゼルバイジヤン人、トルクメン人、ウズベク人、カザフ人、キルギス人、ウイグル人など個別の集団名で呼ばれるが、総称していくときにはテュルクの名前があてられている」［坂本 2014：16］とする。さらに新井も「トルコ語で『トルコ人』は Türk で、その意味するところは広汎かつ曖昧である。とくに、トルコ共和国では、汎テュルク的心情に裏打ちされて、広い意味の『テュルク』もすべて同じ Türk で表現することが多いため、『トルコ人』の意味はいっそう曖昧になる」と指摘する［新井 2016a：150］。本研究では小松の定義にならい、引用を除いてテュルク系民族（Turkic）をテュルクと呼び、トルコ共和国トルコ人（Turkish）と区別する。ただし坂本が指摘するように、トルコ語ではテュルク系民族もトルコ共和国トルコ人も区別なくテュルク（Türk）と呼ぶため、翻訳には注意が要される。本研究が取り上げるタタール人は、テュルク系の言語を話すテュルク系民族であり、総称としてのテュルクに含まれると同時に、トルコ国籍を取得した者は、トルコ共和国トルコ人としてのテュルクにも該当する。したがってトルコ語の語りを翻訳、引用する際には、可能な限りテュルクの意味するところを明示する。

メリカというグローバルな広がりとつながりをもつ。彼らは世界規模で進む現代の移民現象に共鳴する稀有な主体であり、多様な課題の先行例となり得る経験を自分たちの物語として直接語ることができる、最後の世代である。加えて、今日、非イスラーム社会におけるムスリムの存在に関して、彼らの統合やイスラモフォビアの問題など、議論が途切れることはない[3]。2016 年末現在、推計 17 万の滞日ムスリム人口のなかで、国籍別では最多の日本人ムスリム 4 万のうち、約 2 万 5 千は子どもや若者である。彼らは「第 2 世代をはじめとして『外国につながりを有する』ムスリムであ」り、「日本と外国の文化、イスラームの価値や文化を伏せて持つハイブリッドなムスリムとして橋渡し型の社会関係資本形成の潜在的可能性をもつ人々」といえる［店田 2018：91-92］。日本人対ムスリムではなく、複数の背景をもちながら日本社会で暮らすムスリムという点で、タタール移民 2 世は日本国籍こそもたなかったが[4]、現代日本のムスリム社会、さらには非イスラーム社会に暮らすムスリムの前身的存在でもある。かくして、人の移動と向き合うことがより一層の重要性を増すなかで、約 100 年前のロシア革命を機とするタタール移民の歴史的経験は、現代的な意義を帯びてくるのである。

先行研究

初めに、先行研究にもとづきながら、タタール移民の移住史を概観しておこう。本研究は極東を経由しトルコやアメリカへ渡った人びとに着目しているが、タタール人の移動はそれだけにとどまらない。櫻間・中村・菱山は、ロシア連邦外に暮らすタタール人は「『タタール・ディアスポラ』と総称され、タタールスタン政府にとっても大きな関心ごと」だという。そして「代表的なタタール・ディアスポラ」として、日本と北米に加え、中国に 5000 人弱、フィンランドに約 1000 人、カザフスタンとウズベキスタンに各々約 20 万人が暮らすと指摘している。その来歴に関し、まず中国については、「15 世紀前後には現在の新疆で活躍したタタール商人がいた」ようだが、今日の中国に暮らす「タタール族」の大多数は、19 世紀初頭の移住者の子孫である。また、フィンランドには、同国がロシア帝国の自治大公国であった時期に商機を得ようとサンクトペテルブルク経由で移住したタタール人商人がおり、その子孫が暮らす。中央アジアには、14 世紀頃タタール人商人が現れ、18 世紀から 19 世紀には商人や留学生が数多く流入した。今日では多様な時代の移住者の子孫が居住している［櫻間他 2017：154-157］。

また、こうした「タタール・ディアスポラ」の 1970 年代における広まりの一部が見て取れる

---

[3] ただし、ムスリムが多数派を占めるホスト社会であっても、問題がないとは決して言えない。トルコはシリア難民の主要な避難先であるが、彼らを取り巻く環境は、依然として厳しい。筆者がトルコに滞在した 2011 年から 2015 年の間、日常生活におけるシリア難民の存在感は増す一方だった。イスタンブルの路上で、シリアから逃れてきたとメモを見せつつ物乞いをする者を見かけることは珍しくなく、地元のトルコ人の間には、彼らに同情を寄せる者、表立って嫌悪感は示さないが警戒する者、治安悪化を難民流入と結びつけ排除の姿勢を露にする者など、多様な反応が見受けられた。シリア難民を受け入れたまではよいが、その後のトルコ政府の対応はずさんであり、難民の処遇、国民の感情の双方に混乱を招いているというのが筆者の受けた印象であった。その後もはかばかしい改善は見られず、例えば、2019 年 5 月に発行されたトルコ語月刊誌『Birikim』361 号は、「難民、ヘイトスピーチ」と題する特集を組み、今日のトルコにおける難民の窮状を取り上げている。

[4] タタール移民と日本国籍の関係については、1 章 1 節、4 章 2 節で扱う。長く日本に暮らす者、日本人女性を母にもつ者など、後に日本国籍を取得した者も一部存在する。

のが、『カザン』（Kazan）誌の販売場所である。本誌は、かつてイスタンブルに存在したタタール移民協会である「カザン・トルコ人文化互助協会」（Kazan Türkleri Kültür ve Yardımlaşma Derneği）によって、1970～80 年の間に出版されたトルコ語季刊誌であり、極東からトルコに移住したタタール移民のコミュニティに関するニュースや、タタールの歴史、文化、著名人を扱う記事、タタール料理のレシピなどが掲載された。ソムンジュオウルは、全号にわたって記事のタイトルと著者名をリスト化しつつ、本誌が当時の政治的な出来事にはほとんど触れず、若い世代へのタタール文化の継承を目的としたことを指摘している［Somuncuoğlu 2009］。販売場所を見てみれば、1971 年発行 3 号には、イスタンブル、アンカラ、ヘルシンキ、東京、サンフランシスコ、ニューヨーク各地の協会と住所、およびミュンヘンの個人宅が記載されている。また、実質的な最終号となった 1980 年発行 23 号には、上記に加えて、シドニーの個人宅と、クリミア・タタール人を中心とするタタール移民の集住地であるトルコのエスキシェヒルの書店で、本誌が取り扱われていたことがわかる。

さて、櫻間らの記述からは、商人としての移動が、広範囲にわたるタタール人の移動の根幹をなしていることがわかるが、極東への移住の源流も同様である。帝政ロシア領内ヴォルガ・ウラル地域に暮らしていたタタール人が、18 世紀半ば以降ロシアと中央アジアとを結び付けてきたのは、彼らがテュルク系言語を話すムスリムという特徴を生かし、商業の担い手として手腕を発揮したからに他ならない［小松 1996：120-121；長縄 2016：135；松長 2009：4］。そして、19 世紀末にシベリア鉄道、東清鉄道が開通すると、タタール人商人たちは極東方面へ進出し、ロシアと旧満洲を行き来するようになった［松長 2009：5］。しかし、1917 年にロシア革命が勃発し、混乱が決定的なものになると、生命の危機を脱し、宗教を守り、生活の糧を得て子どもたちを教育するに足る地を模索して、旧満洲、朝鮮半島、日本に移り住む者が現れる。また、白軍に徴集されて中国や朝鮮半島に亡命を余儀なくされた者や、1920 年代初頭のヴォルガ・ウラル地域における飢饉による避難民も出てきた［鴨澤 1982：40；Tahir 1970：39；1971：7；村知 2006］。こうして、本研究が対象とするタタール移民が誕生したのである。

極東に移住したタタール移民に関し、小松香織、小松久男によって、アブデュルレシト・イブラヒム著『イスラム世界』の日本該当部分が翻訳されたのを皮切りに［イブラヒム 1991］、1990 年代以降、本格的な研究がなされてきた。Dündar［2008］、Esenbel, Inaba.ed.［2003］、福田［2011；2012］、池井・坂本編［1999］、鴨澤［1982；1983］、小松［2008］、Misawa ed.［2012；2014］、西山［2006a；2006b］、松長［1999；2008；2009］、坂本編著［2008］、オスマノヴァ［2006］、Usmanova［2007］、吉田［2014］等は、イブラヒム、アブデュルハイ・クルバンガリー、アヤズ・イスハキーといった指導者たちの活動や、戦前・戦中期における極東各地のコミュニティの様相等を扱った。タタール移民はハルビン、ハイラル、奉天、京城、名古屋、神戸、東京等を生活の拠点として、生地や既製服の商売を生業としつつ、教育や礼拝、集会、タタール語出版物印刷のための施設を設けた。1 世はこうして、故郷から離れた場所で生まれた子どもたち、すなわち本研究が着目する 2 世にイスラームの知識を与え、タタール語の読み書きを学ばせ、ムスリムとして、タタール人としての自覚をもたせた。極東各地の集住地は孤立して存在していたのではなく、商売、出版物、結婚、教育などを通じた往来があり、故郷を離れながらも、極東全体で宗教や言語が保持された。

タタール移民の人数を示す正確な資料はないが、「［太平洋戦争］開戦直前に駐日トルコ大使館に満洲在住 600 名、日本在住 264 名がトルコ国籍取得の申請をした記録が残っており、これが実

数と大きく変わらないのではないかと目され」ている［三沢 2016：343］。タタール移民の国籍取得運動については、1 章で扱う。朝鮮半島に目を移せば、1920 年、「600 名からなるトルコ人［タタール人］のグループ」が日本へ避難する際、200 名近い人びとが朝鮮半島に残って住み着き、関東大震災の際には被災したタタール人の一部が、同胞の援助によって、朝鮮半島で暮らし始めたとする指摘がある［Lee 1988：107］。しかしながら鴨澤が、主に 1930 年代のタタール移民の様相として、「基地」の役割を果たす旧満洲や朝鮮半島の家族の元で夏の間は休養し、「いわば橋頭堡的に位置づけられていた」日本で再び行商を行ったこと、彼らが「故郷喪失者であり、かつまたフットルーズな行商人として、広く各地に『軽く』接触していた」と述べるように［鴨澤 1983：244-250］、極東内部での移動があったことを加味すれば、やはりいずれの人数も可変性を含むことを念頭に置くべきだろう。

三沢が指摘するように、「タタール人が日本へと移住し、日本各地に共同体を形成するに至った経緯は、戦前日本の大陸政策における回教（イスラーム）工作に深く」関係している［三沢 2016：343］。日本の「回教工作」は、防共政策や大陸進出政策遂行にあたり、国内外の「回教徒」（イスラーム教徒）を利用しようとする独善的なものであった。当時の日本では最多数の「回教徒」であったタタール移民の行動は、『外事警察概況』をはじめとする数々の公文書に逐一記録されており、日常を送ろうとする多くのタタール移民の意志とは別に、彼らが常に監視され、政治的な存在として扱われてきたことがうかがえる。たとえば、日本の回教政策が「重要な画期を迎えた年」［小松 2008：158］である 1938 年には、『アサヒグラフ』757 号において、「日本を母として」と題し、東京回教学校の様子が特集されている。そこでは、授業や食事の風景に加え、ヘッドスカーフを被った女生徒たちが礼拝を行う姿が掲載されており、日本の庇護のもと、「回教徒」の子どもたちが「真の日本精神と文化を理解して他日、東洋に波打つ回教徒の指導者たらんと真摯な希望に燃えている」かのごとき演出がなされている［『アサヒグラフ』1938 年 5 月 11 日：14-15］。さらに、早稲田大学に保管される『大日本回教協会寄託資料（イスラム文庫）』にタタール移民に関する文書・写真資料が所蔵されていることも、彼らと国策の強い関係を示している[5]。そのため一連の研究では、主として、イスラム文庫や内務省警保局『外事警察概況』、外務省外交史料館所蔵史料を中心とする写真、文字史料をもとに、戦前日本の「回教工作」の実施対象としてのタタール移民について、客観的な実態解明が目指されてきたといえよう。

第二次世界大戦という厳しい時代を無国籍のまま極東で過ごしたタタール移民の多くは、戦後、トルコやアメリカ、一部はオーストラリアやカナダへと移住していった。これら再移住先では国籍を取得し、3 世以降の若い世代も誕生した。またタタール語の保持について、3 世以降の子どもたちとタタール語を話すか、居住国の言語を話すかは、家庭ごとの判断によった。ただし、2 世同士であってもタタール語ではなくトルコ語で会話することが多々見られ、概して、ホスト社会の言語であるトルコ語や英語への同化が進んでいる。こうした状況を鑑みて、タタール移民は定住の地を見つけたといえよう。極東からアンカラに移住したタタール移民によって設立された「カザン文化・互助協会」（Kazan Kültür ve Yardımlaşma Derneği）も、2015 年に 50 周年を迎えた。

以上みてきたように、帝政ロシア時代に始まった移動は、極東を経由しトルコやアメリカにま

[5] イスラム文庫の詳細については、店田［2006］、Tanada［2013］を参照。イスラム文庫に収蔵される写真資料を電子化した CD-ROM 版資料集である日本学術振興会…［2006］を参照。

で広まっていった。しかしながら、極東を舞台とした研究の厚みに対し、戦後から今日に至るタタール移民の経験については、彼らの多くがトルコやアメリカに渡ったことが言及されるに過ぎず、特に極東を離れた後の経験について十分な検討がなされてこなかった。先行研究で明らかにされたタタール移民像は、20 世紀前半の極東、すなわちタタール移民の移住史における経由地を背景とするものであり、異なる視角から多様な解釈の余地が残されている。

近年、タタール移民の戦後に対する関心は高まりつつあり、三沢は、「現在とのつながりを考えるならば戦後、とりわけ朝鮮戦争後に在日タタール人の多くがトルコないしはアメリカへの再移住した状況、さらには再移住を望まず日本に留まることを選択した状況を理解することが必要であると」の認識のもと、「1950 年代の在日タタール人の状況」を伝えるものとして、トルコの競売で入手した「５枚の写真とその裏書」を掲載する［三沢 2014：224］。また福田は、昭和期の「日本語で書かれた文学作品等を取り上げ、在日外国人ムスリムが作家その他の民間人によってどのように表象されてきたかを例示し考察する」［福田 2016：91］一連の研究を行った［福田 2016；2017a；2017b］。さらに赤坂は、日本プロレス界や戦後昭和期の映画・テレビで活躍し、あるいは医師となった「在日トルコ・タタール人の戦後」を紹介した［赤坂 2016］。最後に沼田は、トルコ・アメリカ移住者への聞き取りを実施している［Numata 2012；2018；沼田 2014；2019］。以上のように、関連する論考が徐々に蓄積されてはいるものの、更なる研究の進展が望まれる。

本研究は、タタール移民を世界規模で進む現代の移民現象に共鳴する主体として捉えるものである。移民研究の対象としてタタール移民を取り上げるにあたり、これまでの研究で不足しているのは、当事者の視点である。奉天（現瀋陽）で発行されたタタール語新聞『ミッリー・バイラク』（民族の旗）を扱った Usmanova［2007］は、コミュニティの内部に立った分析である。しかしながら、1935 年～1945 年という当該紙の刊行時期を鑑みて、当局による検閲や、移民側の配慮による記述内容への影響は計り知れず、タタール移民の内的な世界がどれほど映し出されているかという点には、留意すべきだろう。

「一般の」タタール移民について最も詳細に扱っているのは、鴨澤である。彼は 1970 年代末から 1980 年代初頭に、「渡日 1 世の人々が全国で五指にみたなくなってしまった今、たとえかなり不備な記録ではあっても」発表し、補足、修正すべきとして［鴨澤 1982：27-28］、1 世、2 世合わせて 6 名を対象とした聞き取りや座談会を実施しており、論文自体が貴重な記録となっている。このようにインタビューと文字史料をもとにタタール移民の国籍や移住を論じた鴨澤［1982；1983］や、戦時期の経験を一部引用したデュンダル［2012］等の研究を除き、極東での生活、トルコやアメリカへの移住経緯、その後の適応を含む定住過程、一連の経験に対する記憶や思い、アイデンティティに関し、タタール移民本人へのアプローチが十分になされてきたとは言えない。トルコ、アメリカにおいても世代交代が進むなか、筆者が海外調査を開始した 2011 年時点で、2 世への聞き取りや史資料収集はすでに喫緊の課題であった。

「帝政ロシアの国籍を 10 月革命後に喪失して以来」無国籍となり［鴨澤 1983：251］、戻るべき故郷はソ連の支配下に置かれるという状況で、第二次世界大戦やその後の東西冷戦という激動の時代を切り抜け、トルコやアメリカでの安定した暮らしを子孫に残したタタール移民には、時に主体的で、時に従属的な、様々な姿を見いだせる。移動する人びとは「マイノリティや被抑圧者としてのみ存在してきたわけではない。かといって、彼らの主体性を強調するあまり、過度に能動的な人びとであると過大評価されるべきでもない」という大川［2016：535］の指摘は、タタール移民にも当てはまるものである。

研究目的

移住を繰り返したタタール移民には、帰属意識をもち得る場所、すなわち「故郷」と呼び得る場所が複数ある。先祖の出身地、各地の移民社会、生まれた場所、育った場所、移住先、移住先候補のような場所は、2 世がこれまでの経験を振り返る際、どのように参照されているのだろうか。本研究の目的はまず、移住経験のなかでも移住理由とトルコ社会への適応に関わる個々人の語りを取り上げ、一連の場所に対する解釈を明らかにすることである。そのうえで、出身国から受入国というような 2 ヶ国、2 地域間にとどまらない移動を行う人びとの「故郷」について、トルコでの生活経験をもつタタール移民の事例を通じて考察することを第二の目的とする。なお、タタール移民の移住先としてアメリカやオーストラリア、カナダを無視することはできないが、本研究では長期に渡って調査を行ったトルコに、比重を置くこととしたい。

本研究では、極東生まれの人びとを 2 世と呼ぶ。ただし 2 世と一口に言っても、出生年や育った場所、移住時の年齢による歴史的社会的背景との関わりのなかで、経験を見ていく必要がある。また川野によれば、「移民後世代とは、親に同行して移住してきた子供世代（1.5 世と呼ばれる）および移住後に移住先で生まれた 2 世またはそれ以降の世代を指」す［川野 2006 : 37］。したがってトルコへの移住を基点にすると、本研究の主役たちをトルコへの移民 1 世、幼少であれば 1.5 世と定義することも可能である。以上のような相違を認めつつ、なおも 2 世と総称するのは、これまで主たる研究対象とされてきたヴォルガ・ウラル地域を直接の出身とする 1 世とは異なって、出生地、あるいは生まれ育った場所が極東であり、ソ連崩壊まで先祖の出身地を見る機会がなかったという特徴を、重視したからである。

タタール移民 2 世が民族的出自とは異なる移住先で生まれ育ったこと自体は、ほかの多くの移民 2 世と同様であるが、第三国へと移住している点は留意すべきである。このとき、ホスト社会を複数もつという点で類似するのが、帰還移民である。大川は、「帰還移民は集団として，移民先と帰還先の 2 カ所をホスト社会としてもつことから，通常の移民と異なり，2 度の適応を経験していることになる。移民先とは異なる適応を本国で経験することは想像に難くない」［大川 2006 : 59-60］と述べている。ただしここでも、1 世の出身地に戻っているわけではない点は、タタール移民 2 世の特徴といえよう。むろん、「移住先で数世代経たあとの『帰還』であれば、移動する当事者からみるとそれは厳密な意味での帰還ではない。彼／彼女にとってみれば単なる移住である」［大川 2016 : 538］。しかしなお、帰還先が先祖の出身地ではないタタール移民を、帰還移民と同一視することはできない。

タタール移民 2 世が複数の帰属先候補をもつに至ったのは、彼らの難民としての性格によるところが大きい。鴨澤が 1981 年に実施した座談会では、1920 年代に来日したタタール移民たちは「満洲に来たとき同様、日本に来るときも、住みつく気はなく、動乱が終わればまた故国に帰るという気だった」とする発言がなされている［鴨澤 1983 : 233］。しかし実際には「故国」はソ連となり、中国では国共内戦と中国共産党の勝利、朝鮮半島では朝鮮戦争勃発という新たな変動に直面したタタール移民は、共産主義勢力から距離を取り、トルコやアメリカへと渡っていった。これを難民の「いわゆる恒久的解決」に当てはめてみると、第一の本国への帰還、第二の避難先への統合は叶わず、第三の解決策である第三国への定住が、唯一現実的な選択肢であったとみることができる［Koser 2016 : 73-74 ; Betts and Collier 2018 : 7-8］。後述するように、彼らは制度上「自由移民」というカテゴリーでトルコに移住し、語りにおいても「自由移民としてトルコに来た」と表現する。しかし、中国から移住したタタール移民の中に国際難民機構の支援を受け

た者がいるように、国際的な基準において難民と定義づけられる状態にあったのである。戦後日本に暮らしていたタタール移民の状況は、ほかの 2 地域に比べれば緊急の度合いは低く、東京と神戸に残ることを選ぶ人びとも少なくなかった。そのため、彼らの移住理由をより詳細にみていく必要があるものの、先祖の「故国」に帰れないという点では共通している。

移住という経験はそもそも、移動それ自体に終わらない。この点に関して、大門の指摘は重要である。彼は岩手県和賀町の女性たちに聞き取りを行い、彼女たちにとって「くりかえしもどるべき時代」である戦前・戦時は、「それぞれの人の戦前・戦時・戦後の経験のなかでつながり合っており、反劉されたり、間い直されたりしているのではないか」［大門 2017 : 177-178］と示唆した。移民の経験もまた、移住前、移住時、移住後の経験のつながりのなかで理解されるべきだろう。こうした経験の接合性をふまえたうえで、語りを分析する際の主軸を移住理由と適応に置くのは、移住時の期待と現実のギャップや、定住あるいは再移住を決意する過程において、帰属先となり得る複数の場所の関係性や優位性がより明確になると考えたためである。

民族集団としてのタタール移民をみたとき、居住環境、教育、就業、国籍といった政治的経済的適応は果たされ、ホスト社会との間に政治的、民族的な問題があるわけでもない。しかし本研究におけるトルコ社会への適応とは、政治的経済的適応だけでなく、社会的文化的適応を通じてトルコ社会で生きていくことを肯定的に捉えていることと定義する。端的に言えば、経済的には暮らしていけるようになっても、気持ちはまた別の問題ということであり、集団のアイデンティティよりも個人の解釈に重点を置く本研究にとって、社会的文化的適応は、表面的には適応できているようにみえる人びとの心情に近づくための切り口となる。

タタール移民が帰属意識をもち得る場所、すなわち彼らの「故郷」を扱ううえで、本研究における移動する人びと、国民国家、故郷の捉え方を確認しておきたい。伊豫谷は、「総力戦として展開された 2 度の世界大戦」を経て、国民国家は「要塞化し、国境を越える移動が特別」視されるようになったという。そのため、移動は正常な状態からの逸脱と捉えられ、「移動した人たちが『戻るべき場所』あるいは『本来いるべき場所』が、暗黙のうちに想定されて」きた。「人びとが生まれ育った地に愛着を感じるのは、そして慣れ親しんだ風景や馴染みの人びとに安らぎを覚えるのは当然であろう。しかし、そこから離れて生活をするようになるにしたがって、『故郷（古里）』が創られ、『母国』が生まれる」のは、「国民国家の想像であり創造」なのである［伊豫谷 2014 : 5-26］。したがって、例えば作家のタイエ・セラシが、ローマとニューヨーク、アクラを地元とする自身を振り返りながら主張したように、複数の地域に根差した経験こそが個々の人生を形作っており、個人のアイデンティティを国民国家に求める「ナショナル・アイデンティティの神話」や、人間の経験という現実よりも国籍を重視する罠に嵌まってはならない［Selasi 2014］。

伊豫谷［2007 ; 2014］の「移動から場所を問う」という方法論から着想を得て、移民研究における既存概念である「帰還」や「故郷」を批判的に検討したのが、『文化人類学』80(4)号での大川らによる特集「帰還現象から移民研究の諸概念を問い直す」である。特集では故郷を、国家や地域のような特定の土地や民族、「感傷的な情念を抱く対象」、本来の居場所、帰還先、民族的出自の起源といった所与のものとして設定するのではなく、移動やホスト社会との接触によって創出、非構築、解体、改変されるものだと捉え、帰還した人びとが「さまざまな共同性を希求・創出するだけでなく、それらを希薄化・解体したり、よりよい生活環境を柔軟に追求したりする」営みの過程を明らかにした［大川 2016 : 534-548］。また同特集において飯島は、帰還現象を扱う研究では未だに「ひとつのディアスポラが経験する帰還パターンはひとつに限定され」、「故郷の所在

も単一の場に規定されがちである」点を批判した。そして、戦前フィリピンに形成された日本人移民社会をルーツとする「フィリピン日系ディアスポラ」の 2 世を対象に、「同世代が経験した異なる時代・背景の帰還現象」と、それに絡み合う故郷認識について検証し、故郷認識の揺らぎとともに、帰還経験が「ディアスポラの『故郷』の存在自体に大きな問いを投げかけている」ことを指摘した［飯島 2016：592-614］。

日本の「ニューカマーの子どもたちの今」を理解しようとする渋谷もまた、「どこから来たのか（ルーツ）を問うだけではなく、どのようにして今に至っているのか（ルート）をまなざす」という「視点の転換」を提案する。アイデンティティを、「固定的な過去を発見することによって達成するのではなく、過去を語り直すことによって自らを位置づけていく動態」としてとらえ［渋谷 2013：2］、本質的な「タタール人」像を求めるのではなく、語りを通じて彼らの解釈に迫ることが必要だろう。

移動する人びとの理解を目指すとき、ややもすれば国民国家に代表されるようなひとつの故郷への重点的な帰属を期待しがちだが、それは幻想に過ぎない。このことは、移動を繰り返し、複数の場所に根差した経験を有するタタール移民に、より一層当てはまる。先祖の出身地、移民社会、生まれた場所、育った場所、移住先、移住先候補という複数の場所が、一人の人間の記憶と生活世界に混在する。それらは、食事や言語、信仰、労働、人づきあい、教育、余暇などの日常的実践と、精神面の双方にとっての帰属先候補となり得るし、あるいは、いずれの場所にも共同性を見いださないこともあるだろう。小説家ヘンリー・ミラーの言葉にあるように、「人の目的地は場所ではない。新しい物事の見方である」。タタール移民の語りをひとつの故郷に収斂されるものとして自明視するのではなく、複数の場所に根差す経験の解釈の様相と、その結果獲得された物事の見方こそ、本研究が解明を目指す対象である。

研究方法

ライフヒストリーかライフストーリーかオーラルヒストリーか

本研究では、前身の「回教工作」研究史を踏まえつつも、オーラルヒストリー論やライフストーリー論として発展してきた社会学的方法論に依拠して、インタビュー・データを中心に分析を行う。ライフヒストリー、ライフストーリーおよびオーラルヒストリーは、いずれも類似の概念であるが、用語としては、一貫してオーラルヒストリーを用いる。ではなぜオーラルヒストリーを採用するのか、各々の定義を確認しつつ、述べていこう。

この 3 つの概念は、人々にインタビューを行い、語りを収集する点では共通している。しかし、ライフヒストリーでは「描かれる人生が主に時系列的に編成され」るのに対し［桜井 2012：9］、ライフストーリーでは、オーラリティに基礎を置き、語られる内容だけではなく語り方にも注意を向ける。例えば、語り手と聞き手相互の対話という、調査過程へのまなざしが指摘できる。オーラルヒストリーの場合、「オーラルヒストリーを出来事の経験から歴史的事実を明らかにしようとする『証言』とほぼ同一視する」のではなく、「むしろオーラルヒストリーは、ライフストーリーのなかで特定の歴史と交差する個人的経験の語りのことだと」とらえる［桜井 2014：41］。

インタビューでは「あなたの人生について教えてください」と語り手に尋ねているが、筆者自身の立場として、トルコ・アメリカへの移住をタタール移民史にとっての岐路とし、移住の動機や適応を重視している。すなわち「とくにライフストーリーにおける個人と歴史が交錯する経験

の語りに大きな意義を見いだしている」［桜井 2012：12］オーラルヒストリーの特徴に合致することから、本研究ではオーラルヒストリーの用語を採用した。繰り返しになるが、本研究におけるオーラルヒストリーとは、語りを歴史的な証言として断片化したり、素材としてのオーラルヒストリーを「通常の歴史の時間軸の枠組み」に「埋め戻す」［桜井 2014：41］ことを意味せず、「語り手の一生を聞き取りその生活史の文脈から語られたストーリーを解釈すること」［蘭 2015：222］を目指すものでる。分析においては、「オーラルヒストリーはライフストーリーの下位概念にあた」り、オーラルヒストリーも「現在の『構築物』である」［桜井 2014：41］ことから、桜井厚がライフストーリー論として発展させてきた方法論［桜井 2002；2012；2014］を活用できると判断した。

文脈

タタール移民の移動は、帝政ロシア時代に始まり、極東を経由してトルコやアメリカに至る広がりをもつ。したがって彼らの経験は、複数の国や社会、各地で形成されたタタール移民コミュニティなど、様々な場所を舞台としており、当該地域の情勢や時代的規定性、移住制度等と深く結びついている。このような経験に影響を及ぼす背景、すなわち文脈の重要性は、インタビューの場で語るという行為においても確認できる。桜井は、「出来事や自分の経験について物語ろうとするとき、人は直接的にせよ間接的にせよ、自己を語る」［桜井 2012：38］という。移住から 60 年前後が過ぎたインタビューの場で生み出される、この自己についての語りを通して、タタール移民個々人の体験は歴史的・社会的文脈と結びつき、彼らのトルコ移住という経験が形成されていく。先に、本研究では移住理由と適応の語りに重点を置くが、その経験は移住前、移住時、移住後の経験のつながりのなかで理解されるべきだと述べた。言い換えれば、トルコ移住の体験は、それ自体だけではなく、極東での生活と移住後の生活を通じて経験化され、極東での生活水準は、移住後の生活に対する強力な評価基準のひとつとなり得るのである。このように個人的な語りは、様々な文脈に位置づけながら解釈する必要がある。

桜井によれば、語りを位置づけるべき文脈には大別して、「語りが産出されるインタビュー過程そのものと語られたストーリーに込められた文脈の二つがあ」る［桜井 2014：42］。

> 前者［語りが産出されるインタビュー過程そのもの］は、調査者の構えや発話過程におけるインタビューの相互行為を基礎にした「相互行為的文脈」である。ここでは「自己言及的」記述が一般的である。後者［語られたストーリーに込められた文脈］は、語りに含まれる慣習的用語法やモデルストーリー、マスター・ナラティブなどに表される個人の経験とコミュニティや社会の文化や歴史との関係を示す「社会的文脈」である。この「社会的文脈」には「ライフヒストリー的文脈」とでもよべる調査協力者自身のライフヒストリーが中心的要素となる。前者は語りの「プロセス（過程）に関する文脈」のことであり、後者は語りの「コンテンツ（内容） に関する文脈」であるともいえるだろう［桜井 2014：42］。

「表 1　語りの文脈」は、以上の内容と、それに続いて示された具体例（語り手が沈黙した場合の文脈）をまとめたものである。本研究では、これを基盤としつつ、タタール移民の語りにはいかなる文脈が考えられるかを検討しつつ、解釈・分析を行う。

表 1　語りの文脈

文脈		具体例（沈黙）	
語りが産出されるインタビュー過程そのもの（語りの「プロセス（過程）に関する文脈」）	調査者の構えや発話過程におけるインタビューの相互行為を基礎にした「相互行為的文脈」である。 「自己言及的」記述が一般的。	①調査者の「構え」	聞き手の枠組み（仮説）にそって語られないために調査者が聞く耳をもたない。アカディミズムにおける先行研究や文献資料と関連する「上からの歴史」および「政治的」過程が語られない。
		②非対称性	調査協力者がどのように調査者属性をカテゴリー化しているかによって、その社会的地位の非対称性が際立てば語りたくない、語らないことがある。 出会いからインタビューのやりとりで「警察の尋問」のような権力の非対称が生じると調査協力者が語りたくない状況を生み出す。
語られたストーリーに込められた文脈（語りの「コンテンツ（内容）に関する文脈」）	語りに含まれる慣習的用語法やモデルストーリー、マスター・ナラティブなどに表される個人の経験とコミュニティや社会の文化や歴史との関係を示す「社会的文脈」である。 「ライフヒストリー的文脈」とでもよべる調査協力者自身のライフヒストリーが中心的要素。	③トラウマ的経験	ホロコーストや震災被害の衝撃が強くて語れない。
		④調査協力者のライフストーリーの一貫性	過去の経験と現在の経験に大きなギャップがあるとき、自己のアイデンティティ（自己の一貫性）を保持するために過去の経験を語りたがらない。
		⑤コミュニティの語りの様式	モデル・ストーリーが語りを促すこともあるが、モデル・ストーリーと異なる語りは語られにくい。
		⑥公開や読者	どのような形態で公開されるのか、どのような読者が想定されているかという調査協力者の認識によって、語ってよいものと語られないものがある。

出典：桜井［2014：42-43］を元に、筆者作成。

移住段階と適応

移住には、ある程度共通する段階がある。マージョリー・ハーパーは 20 世紀に世界各地へ移住したスコットランド移民に聞き取りを行い、「移民研究ではお馴染みのテーマのパターン」に乗っ取って、章を展開した［Harper 2018：22］。それによれば、移民は、ルーツを引き抜く決意をし（2 章）、説得とプロパガンダを経て（3 章）、出発・旅・到着という一連の移動を実現させ（4 章）、時には期待と異なる印象を受けたり経験を積んだりしながら新生活を築き（5 章）、そのうえでアイデンティティを保留、再構成あるいは放棄していき（6 章）、出身国へ帰還した場合は、再定住と再接続の問題に向き合うのである（7 章）。ハーパーは、移住理由を 2 章で取り上げ、適応については、5 章で新しく到着した移民の第一印象と、新しい土地で暮らし、働くことに関連する実際的な適応について扱い、6 章でアイデンティティや順応といった、内省や回顧的な解釈のより大きな範囲に関わる概念に関して評価を試みている［Harper 2018：156-157］。

> 移住当時、多くの移民は新生活を送るのに忙しく、より広範な文化的、精神的文脈をじっくり考えるような時間はなかった。したがって、彼らのアイデンティティに関する考察は、主として、その後の経験や環境に照らして生み出されたナラティヴの一部として、後になってから明示される傾向がある。古い生活を清算し、不慣れな環境に根を下ろすことによるストレスを過少評価してきた者は、少なからぬ時が経ってから、ようやく彼ら自身の困難について語ることができるようになるのだろう［Harper 2018：157］。

ハーパーはこのように、「より広範な文化的、精神的文脈」における適応が俎上に載せられるのは、生活の基盤を作るのに手一杯な移住当時ではなく、移住後「少なからぬ時が経ってから」であることが多いとする。本研究が定義するトルコ社会への適応とは、居住環境、教育、就業、国

籍といった政治的経済的適応だけでなく、社会的文化的適応を通じてトルコ社会で生きていくことを肯定的に捉えていることを指す。したがって、移住から 60 年前後が経っているからこそ、「その後の経験や環境に照らして生み出されたナラティヴの一部として」表される適応の様相に、光をあてることができるだろう。

ここで留意しなければならないのは、タタール移民の難民としての性格を、どのように分析枠組みに組み込むかという点である。まず、難民の場合の移住段階を確認しておこう。難民にとって最初に問題となるのは、受け入れ先の確保である。このとき、難民と移民の違いに関して、「難民は移民ではない。難民は故郷を離れることを、選んだのではない。彼らの故郷が、安全ではなくなったのだ」というベッツとコリアーの指摘は重要である［Betts and Collier 2018：122］[6]。すでに、難民の「いわゆる恒久的解決」として言及したように、彼らが望んで故郷を離れたのではない以上、慣習的な難民解決の第一は、本国への帰還であった。しかしこれには紛争終結か政治変化という条件が伴い、実現できない場合、第二の解決策は避難先への統合、第三の解決策は第三国への定住となる［Koser 2016：73-74；Betts and Collier 2018：7-8］[7]。

タタール移民と同時期の 1950 年代にトルコへ移住した新疆出身のカザフ難民の場合、本国帰還、避難先への統合のいずれもが叶わず、定住先としてトルコを選んだ。カザフ難民の民族誌的研究を行った人類学者イングヴァル・スヴァンベルグは、彼らの移住段階と適応について、次のように述べている。

> 経済的適応は、受入国での居住環境と経済への適応を意味する。難民キャンプや一時的滞在ののち、難民にとってまず解決しなければならない問題は、住む場所を探すことである。最良なのは故郷に帰ることで、そうすれば適応の問題はあまりおこらない。多くのカザフ人はパキスタンとカシミールにいるあいだ、新疆に戻ることを望み続けていたが、到底不可能だった。難民にとって次の選択肢は、最初に亡命を求めた場所に留まることである。カザフ人の一部はこの道を考えたが、様々な理由で実現しなかった。3 つ目の選択肢は、彼らを受け入れる意思のあるほかの国に定住する権利を得ることで、カザフ人はトルコ定住を選択した。［略］亡命し、住居問題を解決した難民は、次に、新たな国への経済的適応を通じて食料供給の問題に取り組まなければならない。［略］戦後に難民を受け入れた国の多くは、特徴として、労働力への大きな需要を有している。難民の言語知識の欠如は、彼らをもともとの教

---

[6] ただし、移民と難民の区別の恣意性も看過してはならない。南川によれば、難民危機時代の移民研究は、「『移民』とは誰か、『難民』とは誰かということが自明ではなく、言説闘争の最前線になっている」ことに自覚的でなければならない。移民か難民かという「境界線は、難民条約の解釈、受入国の移民政策の基本方針、国際政治上の位置などに応じて、恣意的に決定される」ものであり、「自発的な移動を前提として難民を例外的とする既存の枠組では、現代の国境を越える人々が置かれた文脈と、移動の社会的意味を問う上での有効な分析の枠組を提供することが難しい。［略］人の移動を生み出す複合的な要因を解析し、移動を規定する多層的で構造的な条件を明らかにしたうえで、移動者が自ら世界を切り開こうとする主体性を描き出すこと、その先に移民や難民と呼ばれる人々の実践を位置づけることが必要になる」のである［南川 2017：3-4］。

[7] これら 3 つの「いわゆる恒久的解決」のいずれもが、シリア難民をはじめとする 2010 年代の難民を救う機能を果たせていないことが、指摘されている［Koser 2016：73-74；Betts and Collier 2018：7-8］。

育レベルやかつての地位よりもはるかに低い仕事に就かせることが多い。しかしまた、開発可能な知識を有していることで、新たな市場を発展させられることもあることは、言及しておくべきだろう。カザフ人は伝統的知識を活用することで、トルコの経済システムにおいて自身のニッチェを確立し、かつてイスタンブルのユダヤ人マイノリティやいくつかのキリスト教徒のグループが担っていた役割を引き受けるようになった。当局が関心を寄せる範囲として、難民問題は通常、滞在許可と、居住および収入の問題が解決したところで、解消したとされる。しかし、難民自身にとって、社会的適応と受入国への文化変容という骨の折れる時間がまだ残っている。適応に関わるこうした問題は、時に何世代にもわたって解決しないこともある［Svanberg 1989：25-26］。

このように、難民の場合は、選択肢がほとんど存在しないなかで、状況に応じて定住先を決めなければならない。しかしその後の段階は、先に見た移民の場合と共通している。重要なのは、安全を求めて出身地から離れざるを得なかったこと、その後の選択肢が非常に限られていることが、移住理由や適応にどのような影響を及ぼしているかに留意することであり、文脈のひとつとして検討する。

調査内容

筆者は2010年より、東京、神戸、イスタンブル、アンカラ、サンフランシスコ・ベイエリア、ニューヨークを中心に、フィールド・ワークを実施してきた。調査地と時期の詳細は、表2の通りである。極東生まれのタタール移民2世を主とする約75名の関係者とコンタクトを取り、うち41名（女性19名、男性22名）については同意を得てインタビューの録音を行った。録音を伴うインタビュー協力者の属性、インタビューでの使用言語、極東における居住地、移住先は、巻末の一覧を参照されたい。世代交代が進むなか、限られた機会を最大限に生かすため、インタビュー協力者は芋づる式に探し、協力への了承を得られた場合は自宅等に伺うという姿勢をとった。インタビューを依頼する際には、「あなた自身の経験や人生を聞かせてほしい」と強調しつつ、筆者が日本からきた学生で、タタール移民の歴史に興味があり、政治的な観点ではなく、人々の語りから直接の経験や人生を通じて学びたい、それを最終的には博士論文や本として出版したい、という旨を伝えた。

インタビューのほとんどは対面で実施し、1名のみ、速やかな訪問が叶わなかったため、電話でのインタビューとなった。また3名は、対面でのインタビューを経たのちに、スカイプと電話を使用して追加の情報を得た。ほかにも、メールで補足情報を得ることがあった。ほとんどのインタビューは一対一で行ったが、夫妻、姉妹、母と息子が同席したインタビューもある。インタビュー実施場所は、協力者の自宅が最も多く、代表的なタタール料理のひとつであるペレメチ（資料1）と、「タタール式」で飲むチャイ（紅茶）[8]を始め、必ずと言っていいほど茶菓子や手料理でもてなしを受けた。また、カフェで茶を飲みながら、あるいはレストランで食事をご馳走になりながら行われることもあった。1名は、キャンピングカーで黒海地方を旅しながらのインタビュ

[8] トルコでは一般的に、チャイダンルック（2段式のチャイ用ヤカン）を用いて、茶葉を煮出したものに沸騰した湯を足し、砂糖を入れるか、そのままで飲む。トルコのタタール移民の家庭では、チャイダンルックを用いた作り方は同じだが、飲む直前に牛乳を入れるところに特徴がある。

ーとなった。インタビューの長さは多岐に渡り、30 分程の短時間で終了することもあれば、3 時間から終日に及ぶこともあった。本研究が主たる対象とした 2 世の母語は、タタール語である。また個人差はあるものの、ホスト社会の言語である日本語やトルコ語、英語等を流暢に話す。したがって、インタビューの使用言語は、極東での暮らしが長い場合は日本語、トルコ語、幼少期に移住した場合はトルコ語が中心となった。1 名は、英語が中心となった。単語をきっかけに発話の途中で言語が変わることもあれば、新たなテーマに移る際に言語を変更するなど、複数の言語を行き来した。氏名記載については、イニシャルでの掲載希望者が 1 名、仮名希望者が 1 名、それ以外は本名での掲載に同意を得た。個別の協力者に言及する際、原則として初出時にフルネームを、2 回目以降は姓を省き名のみを記載する。

表 2　調査地と時期

国	都市	時期
トルコ共和国	イスタンブル	2011年9月～2015年12月
	アンカラ	2011年10月、11月、2012年12月、2013年2月、2015年11月
	キュタヒヤ	2012年5月
	コンヤ	2012年5月
	黒海地方	2012年7月
	イズミル	2013年5月、2014年7月
	フォチャ	2013年5月
	ディディム	2013年6月
	エスキシェヒル	2013年10月
	ディキリ	2014年5月
アメリカ合衆国	サンフランシスコ・ベイエリア	2012年4月
	ニューヨーク	2017年3月
日本	東京	2010年～断続的に現在まで
	神戸	2016年12月、2017年3月
バシコルトスタン共和国	ウファ	2014年10月
タタルスタン共和国	カザン	2016年8月
イギリス	ロンドン	2018年8月～2019年6月 （移民関係英語文献調査）

出典：筆者作成。

インタビューに加え、大小様々な集いへ参加した。日常的な集まり、年次旅行、アンカラのタタール移民協会「カザン文化・互助協会」の食事会や設立 50 周年記念式典、タタール人やバシコルト人の伝統的な「刈り入れ前の祭」［野田 2016：161］であるサバントゥイ、宗教的な祭であるバイラムでの個人宅での集まりなどを通じ、文化的・宗教的実践に関する知見を得た。改まったインタビューだけでなく、こうした集まりでの雑談から学ぶことは、非常に多かった。

また一連の調査の過程で、個人所蔵の写真、アルバム、手紙、教科書、渡航証明書等とそれら史資料に関する情報を入手するとともに、東京回教学校十周年記念写真帳［Basic Studies…ed. 2011］やアルバム［Misawa ed. 2014］に登場する人物の特定作業を行い、インタビューにおける補完資料としても活用した[9]。移住傾向を把握するため、早稲田大学『大日本回教協会寄託資料

[9] タタール移民の写真資料の発掘に関しては、Dündar［2008］、Misawa ed.［2012；2014］、

（イスラム文庫）』所蔵のタタール移民名簿［中亜問題研究会[10]1943a；1943b］をもとに、名簿が作成された 1940 年代初頭に東京や神戸に暮らした人々の、最終的な居住地等の特定作業も行った［Numata 2018：93］。移民自身の手による出版物として、イスタンブルの「カザン・トルコ人文化互助協会」出版のトルコ語季刊誌『カザン』［1970～1980］、自伝・伝記として İdiller［2000］、Agi［2009］、Bacon［2010］[11]、Kurban［2012］、Ahtam［2014］[12]、Devlet, G.［2014］[13]を収集した。自伝の著者のうちラヴィレ・イディルレル［İdiller 2000］、ソフィヤ・クルバン［Kurban 2012］には、インタビューを実施することができた。トルコの首相府共和国文書館やアタテュルク図書館においては、主たる移住が実施された 1950 年代について、移民受け入れや国籍付与に関する文書および『イェニ・サバ』（Yeni Sabah）紙、『ヒュッリイェト』（Hürriyet）紙の記事を収集した。神戸市文書館でも、神戸における居住地や墓地に関する史資料調査を行った[14]。

以上が調査の実施内容であるが、イスタンブルを拠点とし、4 年に渡って滞在したトルコでは、時としてインタビュー協力者と調査者という関係を越えて、目をかけてもらうことがあった。それは例えば、学生である筆者の食事や健康、居住環境、安全など日々の生活への配慮にあらわれるものだった。また、当初は「ジャポン・クズ」（日本人の女の子）、その後は「クズムズ」（私たちの娘）あるいは「クズム」（私の娘）と呼ばれることで、無意識のうちにトルコ社会やタタール移民社会の女性規範を気に掛けるようになったのも、長期滞在が筆者にもたらした影響だった。「私たち／私の娘」という表現はトルコで頻繁に用いられ、日本語の響きが与えるほどの重みはない。それでもなお、文脈によっては、発言者の名誉を傷つけない行動を取ることが求められる。バイラムの際に「クズム」として、あるいは「エヴ・クズ」（その家の娘）として訪問者をもてなすとき、結婚の報告をするとき、筆者の立場は「みる側」よりも、「みられる側」に近いものだった。本研究がもとづくインタビュー・データは、このような筆者自身の経験のなかで、収集されたものである。

三沢［2014］などを参照。

[10] 中央アジア研究会（後に中亜問題研究会）は、東京、神戸、名古屋在住のタタール移民に関する調査を行っており、報告書がイスラム文庫に所蔵されている。本研究会について、趣意書では「日支事変を契機として勃興せる興亜の大理想実現の為に近き将来に於て中央アジアの問題は必ずや重大なる意義をもつに至る」はずであり、「国家経綸の遂行的見地より専門家に属し、中亜の政治経済文化等諸般に渉つて調査と研鑽を遂げ、国策の一助たらしめたいと念願し」、創立したとある［中央アジア研究会 1939］。同研究会は、1939 年から 40 年にかけて「一連の啓蒙宣伝的な『中央アジア叢書』を刊行」した［西山 2006b：106］。

[11] 本書は、大阪大学の福田義昭先生にご教示頂いた。第二次世界大戦下の神戸で出会った、熊本生まれのタタール移民の女性と、コロラド出身で戦争捕虜となったアメリカ人男性の物語が、彼らの息子の手によって記されている。

[12] 本書は、娘の立場から今は亡き母に想いを寄せつつ、家族や友人、親戚の辿った歴史を記した私家版の伝記である。

[13] 本書は、妻のベリル・デヴレトによるナーディル・デヴレトの伝記である。トルコにおけるタタール移民の組織に関する部分は、ナーディルが執筆している。

[14] 神戸市文書館における調査（2016 年 12 月、2017 年 3 月）では、館長の松本正三氏をはじめ、スタッフの方々にご助力頂いた。

資料 1　ルキヤ・サファのペレメチ調理風景

出典：サンフランシスコ・ベイエリアにて筆者撮影（2012 年 4 月 28 日）

論文の構成

1 章では、国籍取得や制度的側面に重点をおきつつ、極東からトルコ、アメリカへの移住の全体像を把握する。2 章では、タタール移民のトルコ移住に関する主要な語り口である「テュルク・ムスリムの国トルコ」というモデル・ストーリーについて、その内容と、実際の語りでみられる距離感を取り上げる。3 章では朝鮮半島および旧満洲生まれの 2 世、4 章では日本生まれの 2 世を対象としつつ、移住経験のなかでも移住理由とトルコ社会への適応に関わる個々人の語りにおいて、複数の場所がどのように解釈されているかを分析する。5 章では、複数の語りを包括的に見直しながら、置かれた状況に呼応して「故郷」が生み出されていく様相をたどる。

付記

引用文中の表記について、以下の点をことわっておく。

- 新聞からの引用など、現在では不適切な表現がみられるが、彼らが生きた世界の情景を理解するため、史料としてそのまま残した。
- 原則として、カタカナはそのまま引用し、旧字体は新字体に改めた。
- 誤字、誤植はそのまま引用した。
- 論文などの引用文中、（　）内は原文にある補足、［　］内は筆者による補足を示す。
- トランスクリプションの表記記号は、桜井［2002：177-180］に基づく。

1 章　極東からの移住

1-1　第二次世界大戦終結前のトルコ・アメリカ移住

極東各地のタタール移民コミュニティが縮小、あるいは消滅するのは第二次世界大戦後のことであるが、より早い段階で極東を離れた者も存在する。例えば、日本からサンフランシスコ・ベイエリアへの恐らく最初の移住は、羅紗行商人として働いていたタタール移民の一部が関東大震災で被災し、アメリカ大使館の援助を得て渡米した 1923 年までさかのぼることができる［『東京朝日新聞』1923 年 9 月 27 日］。これが、のちにサンフランシスコ・ベイエリアに形成されるコミュニティの下地となった。インタビュー協力者のダイヤン・サファ（4 章 2 節）は、震災後に渡米したタタール移民のひとりを、1965 年に訪問している［Numata 2012 : 134］。またトルコにも、戦前からの移住者が存在した。筆者の調査では、ハルビン生まれのラヴィレ・イディルレル（3 章 3 節）と一家が 1940 年、神戸のガファル家の子どもたちが 1938 年、夫婦が 1939 年、そして東京のスッドゥク家が一家で 1940 年に、イスタンブルへ渡ったことが判明している。イディルレル家とは異なり、ガファル家とスッドゥク家については、どちらも移住の当事者は亡くなっており、トルコで生まれた孫やひ孫から資料および情報提供を得た。そのため、ガファル家の「地震への恐怖」や、スッドゥク家の「娘たちの結婚相手を探す」といった移住理由は、彼女たちが伝え聞いた記憶と推測を頼りに筆者に語った内容であり、断定することはできない。しかし、家族の来歴に関心を寄せ、写真や私文書を保管する彼女たちは、戦前の移住を記憶する移民後世代として、貴重な存在である。

このような第二次世界大戦終結前の移住と関連して、同時期の国籍取得の問題をみておく必要がある。ロシア革命後も、当初日本政府はソビエト政権を承認しなかったため、旧ロシア帝国の大使館などの機関が機能していた。しかし、日ソ国交が樹立された 1925 年 1 月 25 日以降、タタール人も白系ロシア人も、名実ともに無国籍者として扱われることとなった［渡辺 2006 : 202］。したがって「どこの国籍をどのように取得するかは不断の問題」となった［鴨澤 1982 : 45］。鴨澤は、その後取得したのは「トルコ共和国の国籍とソビエト連邦の国籍が主」であるが、「大部分の在日タタール人は、日本以外の東アジア在住のタタール人とともに、無国籍のまま推移した」とみている［鴨澤 1983 : 251］。

では実際には、どれほどのソ連国籍取得者がいたのだろうか。鴨澤は、外交史料館所蔵の 1927 年 12 月 2 日付「外秘第 2992 号」に、ソ連国籍を取得あるいは出願した在京タタール移民計 31 名の名前が掲載されていることを指摘する［鴨澤 1983 : 251-253］。また『自警』誌では、1938 年 8 月 31 日の時点で東京府在住の「トルコ、タタール系」ムスリム 47 世帯 150 名のうち、8 世帯 24 名がソ連国籍保有者とされている［田中 1939 : 23］。しかしながら、鴨沢が引用した文書に記載された全ての人びとが、ソ連国籍取得者、または出願者である可能性は低い。取得者のひとりとして掲載されている「ガイナンサフエフ」［鴨澤 1983 : 252］は、東京モスクでムアッジンやイマームを務め、俳優「ロイ・ジェームス」（本名ハンナン・サファ）の父でもあるガイナン・サファだと考えられる。しかし、ガイナンの息子であるダイヤン・サファ、ラマザン・サファの両名によって、彼が実際にはソ連国籍を取得せず、トルコ国籍を取得したことを筆者は確認しており、終戦前のソ連国籍取得については、史料の再検討が必要だろう。いずれにせよ、松長が「極東のタタール人たちは、ロシア革命による避難民だったので、ソ連国籍を取得することは考えられなかった」［松長 2009 : 52］と指摘するように、タタール移民のなかでソ連国籍を取得しようとする者、あるいは取得した者がいたとしても、主流ではなかったといえる。

次に、トルコ国籍取得の動きをみれば、「トルコ族であるタタール人にとって、ソ連の領域外では唯一のトルコ族の国であるトルコ共和国の国籍を取得しようと望むことは、きわめて当然のことであ」り、1930 年代末頃からトルコ政府に働きかけていた。そして、おそらくはトルコ移住を条件として、「戦前でも個別的にはトルコ国籍が取得された」ようである［鴨澤 1983 : 258-261］。なお鴨澤は、トルコ移住を伴わない国籍取得の可能性を指摘している［鴨澤 1983 : 269-270］。この点について、筆者の調査の限りでは、トルコ到着後に国籍を取得した戦前の移住者はいるものの、東京、神戸、名古屋に暮らしながら国籍を取得したという者はいなかった。在日タタール移民全体に国籍が付与される 1953 年までは無国籍だったというのが、調査協力者に共通する認識であった。

ただし、「日本在住のままトルコ国籍の取得を積極的に希望する者は、いずれも汎トルコ主義的な民族主義の影響下にあることがみてとれる」という指摘は［鴨澤 1983 : 270］、戦前のタタール移民とトルコとの関わりを考える上で、示唆的である。1930 年代の東京のタタール移民社会は、クルバンガリーとイスハキーという 2 名の指導者的人物の反目から、分裂状態にあった。前者の支持者は東京回教団、後者はイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会の名のもとに結束し、教育も、宗教行事も、各々で行われていた。両者の顕著な違いのひとつは、トルコに対する態度である。「陸軍、国粋主義者団体、政治家等に人脈を構築し、在日タタール人の将来を日本に託そうと」する クルバンガリーに対して、 トルコに頼るべく、「その手段としてトルコ国籍を取得させようと」考えたのがイスハキーであった［松長 2009 : 16-17］。クルバンガリーは東京において強い影響力を有したが、極東全体ではイスハキーの存在感が勝っていた。したがって、イスハキーが 1936 年に極東を離れたのちも、トルコ国籍取得の動きは継続した。とはいえ、「トルコ政府は海外在住者のトルコ国籍申請に対して原則的に応じていなかった」ため、はかばかしい成果は得られていなかった［松長 2009 : 52］。

第二次大戦が勃発すると、このような状況に変化が訪れる。小野は、トルコ大使館は対ソ関係を危惧して情報収集を急ぎ、一方、タタール移民は国籍取得を望んでおり、双方の需要の一致が、国籍取得の簡易化という結果をもたらしたとする。この時期に行われたトルコへの移住は、イスハキー派のメディアであるタタール語新聞『ミッリー・バイラク』で取り上げられている。同紙によれば、日本、満洲、朝鮮などから 20 世帯 58 人以上の移住が確認され、1939 年～1941 年、とりわけ 1940 年前半に移住時期が集中している。1940 年後半になると、日満当局が転籍問題を察知、関与し始め、トルコ移住は 1941 年 2 月を最後に、同紙ではみられなくなった［小野 2017 : 237-240］。10 代前半だったラヴィレ・イディルレルは、情報収集を急ぐルコ大使館と直接かかわりを持ったわけではなく、移住当事者が亡くなったガファル家、スッドゥク家について詳細は不明であるが、彼らの移住と国籍取得はこうしたトルコ側の変化を受けて実現したといえよう。

なお、極東に暮らしながらトルコ国籍を取得することは、日満当局が干渉する前であっても、非常に困難だったとみられる。アンカラ大学教授のメルトハン・デュンダルは、戦後も東京に留まり、同地で亡くなったタタール移民であるテミムダル・ムヒトによる情報として、戦前の国籍取得の動きについて以下のように言及している。

> 1939 年東京のトルコ大使館に赴いたトルコ・タタール人は、トルコ国籍の取得を訴えた。しばらく後、大使館の高官と行った面談で駐在武官は彼らにこう言ったという。「皆さんのパスポートはすぐにでも与えることができる。しかし、戦争が始まった。敵味方はまだはっき

りとはわからない。もしトルコ共和国が日本側で参戦すれば、皆さんに問題はない。けれども、もしトルコがイギリス側で参戦すると、皆さんはきわめて困難な状況に陥るでしょう」と。トルコ政府は性急に行動しないことを決め、国籍取得は実現されなかったのである［デュンダル 2012：223］。

国籍を求めるタタール移民とトルコ政府関係者が 1939 年に行ったというやりとりを通じて垣間見えるのは、日本に暮らすタタール移民の戦時下での状況を憂慮するという体裁で、慎重に行動する在京トルコ大使館の姿である。第二次世界大戦へと向かうなかで、日本の国策やトルコの世界情勢における立ち位置に影響され、国籍という身分の保証をめぐるタタール移民の立場は、結局のところ脆弱だったと言わざるを得ない。それは、日本人女性を配偶者とした場合も変わらなかった。「戦前日本の国籍法では父親が日本人であれば日本国籍を保有することができた」［飯島 2011：10］が[15]、タタール移民の間に見られたのは、日本人女性とタタール移民男性の数組のカップルである。「東京イスラム教団員名簿（昭和十六年調査）」［1941］の国籍欄をみると、妻、あるいは母が日本国籍であっても、夫や子どもは無国籍と記されている。こうして、極東に暮らすタタール移民のほとんどは、無国籍のまま終戦を迎えた。

1-2　第二次世界大戦後のトルコ・アメリカ移住

タタール移民の戦後の移住で特徴的なのは、米軍関係者と結婚し渡米した者等を除き、まずはトルコへと移住することが主流であったこと、1960 年代に入るとそのままトルコに定住する者と、就業機会の減少やトルコ社会への適応の難しさなどを理由にアメリカを中心とする他国へ再移住する者に二分したことである［Numata 2012：135］。図 1 は、移住経路と時期を示している。テュルク・ムスリムという共通点をもつタタール移民とトルコの関係については次章で詳述し、本節では制度的側面を中心に、移住の経緯をみていきたい。

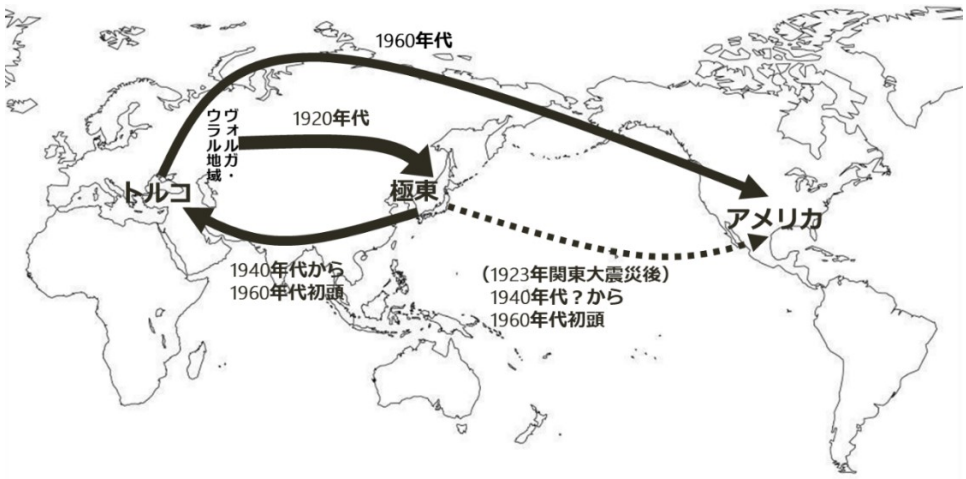


図 1　移住経路と時期

出典： Numata［2018：92］をもとに筆者修正。

[15] 日本国籍取得における父系優先血統主義の撤廃は、1984 年の国籍法改正を待たなければならなかった［佐々木 2004：222］。

第二次世界大戦が終結し、冷戦時代を迎えるなかで、極東各地のタタール移民を取り巻く環境は大きく変化した。第二次大戦の敗戦国日本は貧しさにあえぎ、朝鮮半島では 1950 年に朝鮮戦争が勃発する。中国大陸では国共内戦がおこり、1949 年に中華人民共和国が建国する。極東における共産主義、社会主義勢力の台頭は、ロシア革命の難民である 1 世の大多数に、ソ連支配下にある「故国」への帰郷ではなく、新天地への移住を決意させていく。現実問題として移住先の選択肢が限られるなかで、トルコがテュルク系の移民、難民に対して受け入れの門戸を開いたことは、トルコへの移住を後押しした。このような移動はタタール移民に限ったことではなく、同時期の 1950 年代には、ブルガリアのトルコ系住民やカザフ難民、ウィグル難民など、多くのテュルク系移民がトルコへ流入した。タタール移民も、この流れの中に位置づけられるのである。

旧満洲で暮らしていたタタール移民は、東京のトルコ大使館からビザを取得し、国際赤十字社や国際難民機関（IRO）[16]の援助を受けながら［松原 2011：337-340；松長 2009：61］、トルコへ渡った。ただし、遠隔地に住んでいたことなどから、国際的な支援機構の援助の対象とならず、自力で移住した者もいる。アンカラの首相府共和国文書館には、極東からトルコへの移住を希望するテュルク系諸民族受け入れに関する 1950 年 1 月 9 日付文書[17]と、それを受けて中国からの受け入れを決定する 1950 年 1 月 12 日付文書[18]が保存されている。前者によれば、文書作成時点で中国、フィリピン、日本に合計 400 名ほど、日本には 300 名ほど、そして IRO が関わる 65 名ほどが、トルコへの受入許可を求めて待機している。後者には、受け入れ条件について、以下のように記されている。

> 極東、特に中国における政治的混乱により、当地から自由移民としてトルコへの移住を希望する同胞の増加と、在外公館によるこれらの状況の調査から、移住の承認を妥当とする 1950 年 1 月 9 日付け 58215-10 号外務省文書による提案は、1950 年 1 月 12 日の閣議に諮られ、当地の同胞のうち、定住を希望しない者のトルコへの受け入れを承認することが決定した。

---

[16] 1947 年 8 月に正式発足した国際難民機関（IRO）は、1951 年 1 月からは国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）に業務を引き継いだ。前者は 1952 年 3 月には清算されたため、移住時期によっては後者がタタール移民を支援した可能性がある。しかし、1956 年に中国からトルコに渡った 2 世を含め、インタビュー協力者によって後者が言及されることはなかった。また旧満洲生まれのナーディル・デヴレトは、「記憶する限り、援助は IRO ではなく、National Catholic Welfare Conference によってもたらされた」という［Devlet, G. 2014：27］。筆者が実施したインタビューにおいても同様に、IRO ではないとの発言がなされた（2015 年 12 月 14 日、イスタンブル）。

[17] Uzak Doğu'dan serbest göçmen olarak gelmek isteyen soydaşlarımız hak., Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, 030-18-01-02. T.C., T.C. Dışişleri Bakanlığı 058215-10. 本文書および注 18 は、松原［2011：227-340］ですでに引用されている。本文書は、2015 年 12 月 16 日、2016 年 10 月 26 日時点で文書館での保存が確認できず、閲覧が叶わなかった。そのため、国立民族学博物館の松原正毅先生よりご提供賜った。

[18] Uzak Doğudan yurdumuza serbest göçmen olarak gelmek isteyen soydaşlarımızın iskan istememek kaydıyla yurdumuza kabulleri, Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, Fon Kodu: 30..18.1.2., Yer No: 121.98..4. 本文書および注 19 の収集に関しては、トルコ言語協会勤務のギュルゼミン・オズレンク氏の協力を賜った。

ここで強調されるのは、トルコ政府は彼らを「定住移民」としてではなく、「定住を希望しない者」、すなわち「自由移民として」受け入れる点である。日本在住のタタール移民に対しては、1953年にトルコ国籍が付与されたが、それ以前、あるいは中国、朝鮮半島から移住する場合も、「自由移民」（serbest göçmen）としての移住であれば、トルコに入国することが可能だった。

行政上トルコへの入移民は、経済的に自立するか親戚が保証人となる場合にのみ定住を許された自由移民、およびトルコ当局から援助を受けた「定住移民」（iskan göçmen）の2つに区分される［Svanberg 1989：21；76］。表3にまとめたように、「自発的な移住が前提となっている」自由移民と、「トルコでの生活に政府がある程度の保証をおこなう」定住移民とでは、「国境をこえてトルコにはいったときからの対応の手あつさ」が異なる。「自由移民の場合は、原則として最終的な居住地の確保もそれにいたるまでの生活維持も、すべて自力で対応しなければならない」のに対し、「定住移民においては、最終的な居住地が決定するまでのあいだ、必要な食と住の最低限の保証をトルコ政府がおこなう」うえ、「最終的な居住地の選定もトルコ政府の責任のもとにすすめられる」のである。両者ともにトルコ国籍を付与されるが、「入国と同時にではないが、入国後に短期間でトルコ国籍が取得できる」自由移民と、「トルコに入国すると同時に国籍があたえられる」定住移民の間には、やはり差がある［松原2011：388-389］。

表 3　自由移民と定住移民の違い

自由移民	定住移民
自発的な移住が前提	トルコ政府による生活保障
入国後に短期間で国籍取得可能	入国と同時に国籍付与
最終的な居住地の確保やそれに至るまでの生活維持は自力で対応	最終的な居住地決定までの最低限の生活、最終的な居住地の選定は、トルコ政府が保証
5年間の免税措置	5年間の免税措置、2年間の兵役免除
6年間の支払い猶予ののち、20年以内の返済という条件で、家、土地、ビジネスのための国からの融資を受ける権利を付与	定住地における家、土地、耕作地、農具類などの無償提供
語学教育や職業教育の機会提供なし	語学教育や職業教育の機会提供あり

出典：Svanberg［1989：21；76］および松原［2011：388-389］を元に、筆者作成。

自由移民として到着した人びとのトルコ国籍取得に関する文書も、同じく首相府共和国文書館に残されている。希望者の顔写真と情報が記された国籍申込書の束はいくつもあり、ここでは1953年9月4日に取りまとめられた書類一群をとりあげる。本史料からは、中国、ブルガリア、ユーゴスラビア、ギリシャ、インド（カシミール）、キプロスを出身地とする「70名の『テュルク民族』」が、単身、夫婦、あるいは家族ごとに国籍を申請していることがわかる。そのなかには、中国から来た無国籍のタタール移民と思われる20名が含まれ、うち1名の記載内容を例に挙げれば、「国籍：なし、民族：テュルク、母語：トルコ語、居住地：イスタンブル、出身地：中国ハルビン、居住形態：自由移民、生誕地：ロシア・ペンザ、ビザを発給したトルコ領事館：東京トルコ大使館領事部」と記されている[19]。

[19] 70 göçmen grubunun vatandaşlığa alınması, Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, Fon Kodu: 30..18.1.2., Yer No: 133.71..4.

共産主義勢力の台頭によって、IRO の援助を受けつつ中国からトルコに移住した人びとの様子は、1953 年 5〜6 歳のときに、ハルビンから一家でトルコへと移住したサディエ・キリシュ（トランスクリプション中 SK）と、彼女の夫で、1956 年 11 歳のときハイラルから一家でトルコに渡ったラウフ・キリシュ（RK）の語りが端的に表している。彼らの語りからはまた、ソ連の勧誘によって、トルコではなくソ連となった「祖国」を選びとったタタール移民の存在も、垣間見ることができる。アンカラの自宅で夫妻が同席したインタビューから、一部を引用する。

【訳文】

SK : [20]ラウフ、誰だったっけ、私たちに援助した機関は？

RK : IRO。［略］移民定住促進協会。

SK : 移民定住促進協会。でも私たち（タタール移民）は、自由移民。ここに来た時、トルコから援助を受けなかった。自分たちの力でここへ来た。自分たちの力で来たの。スーツケース、いくつかのものだけ持って、ここへ来た。そして、イスタンブルとアンカラに定住しました。

［略］

SK : ハルビンでの暮らしは良かった、悪くなかったわよ。私はそこで保育園に通ったの。［略］1953 年にはもう、ここ（トルコ）へ来た。自由移民として、援助協会（IRO）のあれで（援助を受けて）。たぶん、ロシアへ行くチャンスもあり得た。けれど、家族は、ムスリムの国へ、同じ言語、同じ宗教だとトルコへ来ることにしたの。［略］ハルビンを出てから、天津へ、香港から。香港には長居をしなかった。

＊ : 電車で来たのですか、船ですか。

SK : 天津までは電車で来て、天津から香港へは船で、それから飛行機でゼイティンブルヌ（イスタンブルの地区）、イスタンブルへ来ました。私たちは船で来なかったけれど、例えば夫は船で来たのよ。私たちはそう（飛行機）で。私たちは、香港でもそこまで待たなかった。2〜3 週間くらいかしら。あまり覚えていないけれど、それでも短い期間。3 ヶ月、4 カ月、6 ヵ月待った人たちもいたんだもの。

RK : そうですよ、例えば我々は 3 カ月待った。

＊ : そうなんですか！

RK : ええ。天津までは旅費などすべて、みんな自費で来ました。

＊ : 誰も援助しなかったんですね。

RK : でも、天津からあとだったかな、香港からあとは、この「移民援助協会」（IRO）がチケ

---

[20] 親族名称は、語り手からみた関係に基づく。トランスクリプションの表記記号は、桜井［2002 : 177-180］に依拠し、本研究では次のように記す。①重複発話は二重斜線（//）ではさんで挿入する。②発話の流れのなかでの沈黙、休止、途切れは、九括弧内にドット（・・）で示し、ドット 1 つは約一秒を目安とする。③読点（、）は、語句の断続を明らかにする息継ぎの箇所を示し、話者が交代するときでも、語りが途中ならば、句点でなく読点で終ることもある。④音声が聞き取りにくい場合、丸括弧のなかに聞き取れた音声を表記し、疑問符をつける。⑤インタビュー場面の状況や語り手の表情など、インタビュアーが気づいたことを（(　)）内に記述する。⑥方言や特殊な語彙の解説を二重ブラケットで挿入する。⑦発話では省略される助詞など、補うことで文脈が明確になる場合には丸括弧で挿入する。

ットを買ってくれました。例えば、トルコに行く船か飛行機があるとき、そのときまで待つわけですよ。彼ら（IRO）が手配してくれるので。飛行機や船のタイミングがあえば、IRO がチケットを買って、私たちに渡し、送り出してくれるんです。IRO の本拠地はスイスのはず、ロゴも黒の十字架。こうしてトルコへ来ました。なぜトルコへ来たのか、なぜ中国に留まらなかったのかとの、そもそものご質問ですよね？もはや中国政府も、ここに移動しなさい、でなければここへ行きなさいと、指示し始めました。なぜなら、そこ（中国）でも共産主義が始まったからです。毛（毛沢東）が政権を握って。したがって、外国人は中国国籍を取るか、でなければ、中国を離れなければならなかったのです。同じ頃、ロシア人たちも、ロシア領事も来て、集会を開き「あなたがたの元々の祖国はカザン、タタルスタン、ロシアにある。みなさんは全員、ロシアへ行きなさい。トルコに行って、何をするんですか」などと、自分たちの方に取り込もうとしました。もちろんロシアへ行く人もあらわれました。

＊：行った人もあらわれたんですね。

RK：ごく僅かだけれどね。ほとんどはトルコへ来て、一部はオーストラリアへ、一部はアメリカへ行きました。そういうことなんです。

（2012 年 12 月 18 日、トルコ語）

このように、香港を経由してトルコに到着したタタール移民の様子は、トルコの新聞でも紹介された。資料 2 は、「香港から昨日我が国に到着した移民たちが、イェシルキョイの税関で手続きを行っている」との一文とともに、1954 年 1 月 10 付『イェニ・サバ』紙に掲載された写真である[21]。

資料 2　香港からイスタンブルに到着したタタール移民たち

出典：*Yeni Sabah*（10 Jan. 1954）.

[21] この新聞は、旧満洲生まれのラヴザ・オルベイにアンカラの自宅で 2012 年 12 月 16 日にインタビューを実施した際、コピーの提供を受け、のちにアタテュルク図書館にて現物と発行年月日を確認した。紙面にタタール移民であることを示す文言はないが、写真に登場する人びとが複数のインタビュー協力者の関係者であることを特定した。

キリシュ夫妻が言及したように、極東からソ連に渡った人びとも存在した。ハルビンで生まれ育ったズィンヌル・ムハメドジャニは、インタビュー協力者のルキヤ・サファ（4 章 2 節）の父方の叔父であり、以下はルキヤによる情報である。

ルキヤの父は 5 人兄弟で、父アッバスは次男、ズィンヌルは五男であった。1946 年の春頃にやってきたソ連軍は、ズィンヌルを含む 10 代後半の白系ロシア人とタタール人の「男の子たち」20 名ほどに宣伝活動を行い、ソ連に連れて行ってしまった。突然姿を消した息子たちに何が起きたのか、数年後に手紙が届くまで、残された家族は知る由もなかった。ソ連で兵役を終えたズィンヌルは、居住地の希望を聞かれると、アッバスと四男のイドリスが住む日本と、自身の母が暮らすハルビンに最も近い場所としてサハリンを選び、そこで家族をもった。しかしながら、ズィンヌルとの再会は叶わぬまま、母は亡くなった。

ズィンヌルが極東に残した家族と会うことができたのは、アッバス一家が 1964 年にアメリカに移住したのちのことである。ズィンヌルがグループでヨーロッパ旅行に行くことを知ったアッバスと妻ラズィヤは、ユーゴスラヴィアを訪れ、滞在先のホテルもわからないまま、ズィンヌルを探し回った。広場のカフェには「あっちもこっちもロシア人が座っている」状態だったが、通りがかったグループのなかに、「私のお父さん（アッバス）にそっくりな顔を、お母さん（ラズィヤ）がみて、あれが絶対そうだ。大きな声で名前を『ズィンヌル』と叫んだ。向こうもさっと止まって、映画みたい。向こうが走ってくる。こっちが走ってくる。真ん中で会って」という、奇跡的な再会を果たした。その後、ソ連崩壊前の 1988 年に、サンフランシスコから初めてタタール移民のグループがカザンを訪れた際には、アッバスも参加し、同地でズィンヌルとの再びの対面となった。また、ズィンヌルは子どもを連れてアメリカを 2 度訪問し、ルキヤは、タタール語をほとんど解さないいとこにあたる彼らと、英露辞書を使いながら会話をした。ルキヤとスーパーを訪れたズィンヌルは、パン、肉、野菜が「ずらっと並んでいるのをみて、『どれ買ってもいいの？』」と初めて見る品ぞろえに驚き、目を輝かせたという（2012 年 5 月 2 日、日本語、サンフランシスコ・ベイエリア、自宅）。

戦前の在京タタール移民のソ連国籍取得について、鴨澤は「ソ連出先機関は若年層を中心に国籍取得の説得を試みたのであろうか」［鴨澤 1983：255］と推測しているが、ズィンヌルは、戦後、ソ連に勧誘された旧満洲の「若年層」のひとりである。同じ極東生まれのタタール移民であっても、ソ連に希望を抱いた 10 代の青年の選択が、アメリカに渡ったルキヤたちとは全く異なる一生を定めたことが、このエピソードからわかるだろう。

ここまで、旧満洲からの移住を見てきたが、朝鮮半島に暮らしていたタタール移民の場合はどうだろうか。彼らも同じように、東京トルコ大使館から書類を取得し、自由移民としてトルコに移住するという経路を辿った。ただし、朝鮮半島出身のインタビュー協力者たちからは、「旧満洲のタタール移民コミュニティに比べて小規模だったことが影響したのか、朝鮮半島のタタール移民は IRO などの援助を受けなかった」という旨の語りがなされた。彼らは自力で渡航したのである。以下は、英語で記された渡航証明（Travelling Certificate）である。史料提供者のイルハン・アキディルの母は、幼少期に朝鮮半島からトルコに移住した 2 世で、本史料の「娘」に該当する。

> 本証明は、1952 年 1 月 26 日付 2354/18 号通達および旅券法第 4 条に従い、在日本トルコ大使館領事部によって、ペンザ生まれ韓国プサン在住の〇〇氏、妻の〇〇夫人、娘の〇〇、母の〇〇に対し、自由移民としてトルコへの入国を許可するため、発行されたものである。

1953 年 8 月 10 日東京
東京トルコ大使館領事部一等書記官
有効期間 1955 年 6 月 17 日～7 月 17 日
［イルハン・アキディル提供、○○は筆者による伏せ字］

朝鮮半島からの移住の直接的な要因となった朝鮮戦争は、日本に暮らすタタール移民にとっても、大きな転機をもたらした。トルコは北大西洋条約機構（NATO）加入を目指し、自国軍を国連軍に派遣した。トルコ軍将兵は治療や休暇のために後方基地としての日本、特に東京を訪れ、タタール移民は彼らを見舞い、観光の手助けをし、会話を通じてトルコ語を学んだ。トルコ軍の将校と出会い、東京回教学校 2 階のサロンで式を挙げたのち、トルコへと移住する 2 世の女性も現れた［松長 2009：58；沼田 2014：229-228］。実質的には初めての、実体を伴うトルコ人との交流を経て、1953 年には、在日タタール移民に対してトルコ国籍が付与された。東京回教学校は東京トルコ人小学校となり、トルコ語教育が実施されるようになった[22]。トルコ政府からは、イスタンブルのシシュリー・メジディエキョユ第一小学校校長のスッドゥク・ウンガンという名の人物が派遣されることが、1954 年 12 月 25 日に決定した[23]。当初 3 年の予定で来日したウンガンは、その後滞在を延期した[24]。彼は 1983 年に日本で亡くなり、ほかのタタール移民とともに、多磨霊園内のイスラーム墓地に埋葬されている［松長 2009：57-62；デュンダル 2012：223］。

こうして国籍上は「トルコ人」となった在日タタール移民は、トルコへ「帰国」することが可能になった。1953 年よりも前に自由移民として離日する者は存在したが、コミュニティの縮小を誘引したのは、やはり国籍取得であった。特に国籍取得から 3 年後の 1956 年には、東京、そして神戸からもまとまった数の離日者を生む出来事が起こった。トルコのデニズジリック（海事）

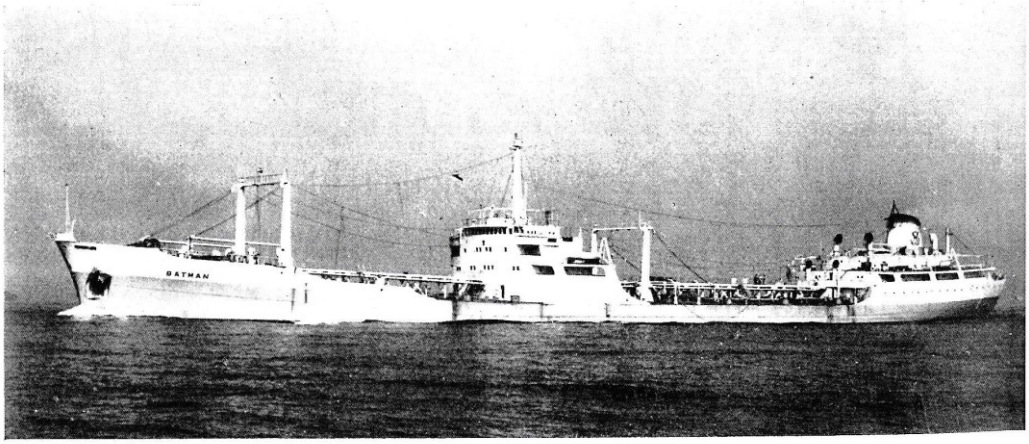
---

[22] 終戦からしばらくの間、2 階建ての東京回教学校は、空襲で住まいを失ったタタール移民たちの一時滞在先となった。住居を確保した家族が徐々に出ていくと、1946 年頃から空いた教室で授業が再開された。ラマザン・サファは、トルコ国籍が付与される前年の 3 月に同校を卒業しており、トルコ語教育導入前の教育について、次のように記憶している。「人が減って 2 階の教室が使えるようになると、46 年頃から学校が始まった。その頃 1 階にはまだ 5 家族以上が住んでいた。戦前に比べて生徒は減り、10 数名程だった。タタール人のハリーダ・アパが一人で先生をやって、クラスはひとつだけ、みな 2 階の同じ教室で勉強した。算数やタタール語、クルアーンを勉強した。これ以外にも、刺繍やかご作りなど、先生ができることを教えてくれた。日本語の授業もあったかもしれない。日本人の先生はいなかった。授業はタタール語で行われ、アラビア文字のタタール語を学んだが、タタールの歴史をやったかどうか覚えていない。英語の授業はなかった。［集団礼拝のある］金曜日はお休み。教科書は［東京回教］印刷所で印刷されたものを使った。上［2 階の講堂］に舞台があるので出し物をやったこともあるし、校庭では運動会も開かれた」［沼田 2011：71-71］。

[23] Öğretmen Sıddık Ungan'ın Japonya'daki Türk Okullarında öğretmenlik görevi almasına izin verilmesi, Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, Fon Kodu: 30..18.1.2., Yer No: 137.106..11.

[24] 1957 年 11 月、1961 年 1 月、1961 年 10 月にそれぞれ滞在延長を許可する文書が残されている。Sıddık Ungan'ın iki yıl daha Japonya'daki Türk Okullarında Öğretmenlikyapmasına izin verilmesi, Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, Fon Kodu: 30..18.1.2., Yer No: 147.60..5.; Japonya'daki Türk okullarında öğretmenlik vazifesi alan Sıddık Ungan'ın izin müddetinin uzatılması, Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, Fon Kodu: 30..18.1.2., Yer No: 158.38..19.; Japonya'daki Türk okullarında öğretmenlik yapmakta olan Sıddık Ungan'ın izin süresinin uzatılması, Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, Fon Kodu: 30..18.1.2., Yer No: 162.55..17.

銀行より発注を受け、浦賀で建造されていたトルコの大型タンカー「バトゥマン」が完成し（資料 3)、トルコに向かう同船で、30～40 名のタタール移民が移住していったのである。出発に先立ち、東京トルコ人小学校では送別会が行われた［Numata 2012 : 141］。1956 年 7 月 12 日付『ヒュッリイェト』紙は一面で、「石油と 20 人の美女を連れた、我々の商船隊で最も大きな船バトゥマンが昨日到着」との見出しで、日本から 40 名の「カザン・トルコ人」がトルコへ移住し、そのうちの一人である 19 歳の女性が、同船の第三キャプテンと航海中に婚約したことを伝えている（*Hürriyet*, 12 Jul. 1956. 資料 4)。



油槽船　バットマン　13,340 総トン　(Denizcilik Bankasi T. A. O.)

資料 3　バトゥマン号全景

出典：浦賀船渠(株)編［1957 : 379］

ここで、1950 年代から 1960 年代にかけてコミュニティが縮小していく過程を、可能な限り把握してみよう。1955 年 8 月 3 日に東京トルコ人小学校で撮影された写真［三沢 2014 : 222］は、過渡期にあるコミュニティの様子を映しだしている。裏面にトルコ語で「東京トルコ人協会運営委員会」の各役職と個人名が記されたこの写真には、大人子ども合わせて 89 名の人物が写っており、ほとんどがタタール移民だと考えられる。また、同時期に神戸で撮影され、英語で「神戸コミュニティ」の会長と書記の名前が記された写真［三沢 2014 : 220］には、成人とみられる 68 名が登場する。これらの写真からは、1950 年代中頃までは、コミュニティとしてある程度の規模と体制を保っていたことが垣間見える。

しかし、バトゥマン号乗船者をはじめとする人びとの移住を経て、在日タタール移民人口の減少は明白となる。1960 年代には生徒数の減少に伴い、東京トルコ人小学校が閉校した。1966 年 7 月 21 日付『読売新聞』には、「いまは入学児童もなく閉鎖中だが『そろそろ三世のために再開準備中です』」との「T・ムヒート・トルコ協会長の話」［『読売新聞』1966 年 7 月 21 日］が載せられているものの、同校で教育が再開されることはなかった。東京に残ったタタール移民 2 世であるアブドゥル・メブラー・ハリウラの「終戦になってからも（東京の何らかの集まりには）70～80 人が集まってた。それから亡くなった人間もいたし、トルコ（に）行った人間もいて段々減って。大体 50～60 人になったけどね」［沼田 2011 : 74］という語りや、鴨沢が実施した座談会での「1980 年現在では全国のタタール人人口は『100 人いるかいないか』」［鴨澤 1983 : 229］と

いう発言も残されている。

神戸についても、1955 年 11 月 16 日の『アサヒグラフ』が、「さまよえるトルコ人」と題して[25]、「日本の経済状態が行商という稼業に行詰りをもたらした」ため、「この頃は神戸から便船が出る毎にトルコ人たちが母国に引揚げてゆく」様子を、写真と簡単なインタビューとともに掲載している。記事には、「今年［1955 年］になってもう 50 人が帰国し年末までには更に 20 人余りが立去る予定だ」と記されている［『アサヒグラフ』1955 年 11 月 16 日：8-9］。

資料 4　トルコに到着したバトゥマン号とタタール移民たち

出典：*Hürriyet* (12 Jul. 1956).

この問題に関連して、筆者はタタール移民名簿［中亜問題研究会 1943a；1943b］をもとに、東京や神戸に暮らした人びとの、最終的な居住地等の特定作業を行った。名簿は 1943 年に作成され、「在京タタール」37 世帯 141 名[26]、「神戸在住『タタール』」31 世帯 111 名が掲載されている。しかし、これらはあくまで日本側の手による情報であり、氏名の誤りや、一部の家族が掲載されていないなど、注意を要する。また、名簿が作成された時点で、軽井沢や有馬へ疎開していた家族がいたかどうかも、判然としない。居住地等の特定作業において、可能な限り情報の修正を試みた結果、少なくとも 1940 年代初頭の東京には 38 世帯 149 名、神戸には 41 世帯 143 名のタタール移民が暮らしていたことが判明した。東京の 38 世帯 149 名のうち、少なくとも 66 名が日本に留まり、あるいは移住前に亡くなった。40 名はトルコへ、24 名はアメリカへ、2 名はカナ

[25] この記事は、東洋大学の三沢伸生先生にご教示頂いた。

[26] 名簿では、「横浜方面ノ『タタール』ハ近年僅カニ、二家族ニ減ジタルヲ以テ、在京タタールノ範疇ニ包含シタル」（中亜問題研究会 1943b）とし、神奈川県在住の 2 世帯 6 名も「在京タタール」に含んでいる。調査において、彼らと東京に暮らす人々の接点が確認され、近しい間柄であったことから、本研究でも「在京タタール」として扱う。

ダへ、1 名はオーストラリアへ渡っている。神戸では、41 世帯 143 名のうち、12 名が日本に残留、もしくは日本で亡くなったのに対し[27]、48 名がトルコへ、64 名がアメリカへ移住した。東京、神戸ともに、アメリカへの移住者数は、直接の渡米者とトルコを経由した者の双方を含んでいる。これは、最終的にサンフランシスコやニューヨークに定住したことを、同地のほかのタタール移民による情報で確認できたとしても、トルコへの移住経験の有無については、当事者に確認を取る必要があると判断したからである。残念ながらすべての当事者に会うことは叶わなかったため、このような表記となった。2016 年現在、東京出身の 16 名、神戸出身の 19 名については、最終的な居住地が判明していない［Numata 2018：93］。また、バトゥマン号でトルコに移住したダイヤン・サファ（4 章 2 節）によれば、乗船者は 30 名であり、そのうちダイヤンを含む 7 名が、後にアメリカへと再移住した。なお、資料 4 の『ヒュッリイェト』紙には乗船者は 40 名と記されているが、1 ヶ月を超える旅路を共にした当時 21 歳のダイヤンは、同乗者 30 名の名前も記憶しており、信憑性が高いだろう。

以上みてきたように、在日タタール移民の数は、確かに減少した。ただし、周囲が移住していくなかで、日本に残る選択をした人々が存在したこともまた、看過できない。この点で日本は、政治的変動を背景にコミュニティが消滅した旧満洲と朝鮮半島とは、異なっている。戦後、在日タタール移民の中からは「進駐軍に勤務して成功する者、柔拳試合やプロレス、芸能界などで頭角を現す者」が現れるようになった［三沢 2016：347］。日本映画やテレビ番組に出演した外国人俳優、プロダクションの運営者、医師としての活躍も、日本に残った人びとの間にみうけられる［赤坂 2016：351-355］。また、コミュニティの食肉需要や、1964 年東京オリンピックにおける外国人ムスリムの参加者に対し、ハラール処理を行った写真も残されており[28]、1960 年代のタタール移民の様子を今に伝えている［沼田 2014：228-227］。

本節の最後に、神戸出身者とアメリカ移住の関係に目を向けたい。先に、アメリカへの直接の移住者はトルコ移住者に比べて少数であることを述べた。しかし、追跡調査による最終的な渡米者の数は、全体で 88 名に上る。特に、東京出身者 24 名に対し、神戸出身者は 2.5 倍強の 64 名と、大きな開きがある。名簿自体の精度に問題があるため、この数字は参考に過ぎないものの、すでに福田が「神戸在住者の場合は，米国（とくに西海岸）へ渡った人も多い」と述べ、Bacon

---

[27] 神戸市文書館所蔵『神戸の外人墓地』は、再度公園の山中にある「修法ヶ原外人墓地」に関し、財団法人神戸市公園協会が 1980 年から 1981 年にかけて、「歴史的経緯の調査と現状の調査の 2 点を骨子にして」作成した報告書である。報告書には、埋葬された約 2400 名について、「墓碑写真・氏名・国籍・宗教・生没年一覧表」が掲載されており、ムスリム墓地やタタール移民の情報も含まれる。すべての項目が必ずしも記載されているわけではないが、氏名、国籍、宗教、出生地等から可能な限り割り出したところ、少なくとも 52 基がタタール移民のものと考えられる。そのなかで、亡くなった人数を年代ごとにみれば、1920 年代 6 名、1930 年代 10 名、1940 年代前半（終戦まで）3 名、1940 年代後半（終戦後）11 名、1950 年代 11 名、1960 年代 4 名、1970 年代 3 名、無記載 4 名となっている。国籍別では、トルコ 37 名、ロシア 6 名、無国籍 1 名、無記載 8 名である。ロシアと記された 6 名は、全員 1920 年代に亡くなっている。宗教別では、「モスラム」（ムスリム）が 41 名、無記載が 11 名である。

[28] 戦前ガイナン・サファは、羅紗行商人として家族を養っていた。しかし、戦後は羅紗の売れ行きが落ちたため、商品を変えて行商を続けながら、ハラール処理した肉を売るようになった。息子のラマザン・サファは、「クルアーンにあるように、1 割よりもうかってはいけない、それはギュナ（罪）だと言い続けた。いつも、はかりをごまかすな、大目に入れてあげろ、と目盛りをマイナスに設定してあげていた」ガイナンの姿を記憶している［沼田 2011：72-73］。

［2010］を紹介しながら、終戦後間もなく「米軍人と結婚して渡米した女性たち」の存在に言及し、さらには、神戸出身タタール移民であるフェリド・キルキー（1927-2013）による「半数はトルコに、半数はアメリカに（少数はオーストラリアに）移住したという」発言を引用したように［福田 2017b：10-11］、神戸出身者が東京出身者に比較して強いアメリカ志向をもつ可能性が指摘できる。

この点に関連して、1945 年、神戸に生まれ、インターナショナル・スクールを卒業したのち、一家でサンフランシスコ・ベイエリアに移住したルキヤ・サファの語りは重要である。彼女たちの場合、移住先を決める段階で決定打となったのは、すでにアメリカに暮らす、米軍人と結婚した母方のおばたちと祖父母の存在だった。ルキヤによれば、神戸から直接渡米した家族は、2〜3 家族に限られ、1964 年に移住したルキヤ一家が最後だったという。

【原文】

RS：だけどトルコ語はうち（結婚後のサンフランシスコ・ベイエリアの自宅）ではしゃべってなかった。私の方がトルコに住んでなかったから。トルコ人になったのはよかったんだけど、トルコ語じゃなかったのよね、神戸は。先生っていう先生も、ほんとに何か月ちょっちょっちょって alphabet 教えにきてくれたくらいで、東京からね。で神戸の人たちはトルコ語っていうあれになかったのよ。あんまり。

［略］

＊：そうすると、53 年なのでちょうど（トルコ国籍取得への）移り変わりのときに（神戸のタタールの）学校に行かれてたんですね。

RS：そうそうそう、そう。それでうちね、みんなの家族に flag もらって、トルコのね、で、いろんなトルコの本みんなの家族に、みんなもらったね。そういうの。帰ってきて、お父さんお母さんが帰ってきてこう旗をもらってね。

＊：トルコのこう赤と

RS：そう。わあー、ね。それまでは小さいからさ、タタールで、タタールの学校行ってるんだしさ、トルコ人か何か関係ないもんね。外行って遊べれば日本語だし、学校行ったらタタール語だし、（インターナショナル・スクール入学前で）英語も知らないしその時はね。

＊：ええ、そうですね。

RS：だから、はあトルコ人になったって、トルコのこういろんな本、わあ面白いねえとか、いろんなとこみてね、一番印象に残ったのは私パムッカレ//＊：パムッカレ//私パムッカレの写真。はあここは一度行ってみたいねえって思った。［略］Yeah.うーんあれも行った。パムッカレ行きました。でもトルコ語はほとんど知らないし、で東京の人はやっぱし大使館があって、とか色々あったから東京の人の方がトルコ語できたのよ。

（2011 年 10 月 6 日、アタテュルク空港、カフェ）

家庭での使用言語についてなされたのが、冒頭の語りである。4 章 2 節で取り上げるように、ルキヤの夫であるダイヤン・サファは、トルコでの 11 年半にわたる生活経験があり、トルコ語を話す。しかし、ルキヤがトルコには移住しなかったことから、夫妻の家庭ではトルコ語は使用されなかった。さらにルキヤは、多くのタタール移民が日本に暮らしていた時代にも、トルコとのつながりやトルコ語の習得に関して、神戸と東京の間には差があったことを指摘する。在神タタ

ール移民も、在京タタール移民と同様にトルコ国籍を取得したが、それまで「タタールで、タタールの学校行ってる」子どもで、外では日本語、学校ではタタール語の生活を送るルキヤにとって、トルコやトルコ人ははるか遠い存在だった。両親が持ち帰ったトルコ国旗や関連本を見て、初めて「トルコ人になった」ことを意識し、「わあ面白いねえ」と、パムッカレをはじめとするトルコの名所を学んだのである。とはいえ、トルコ大使館があり、トルコ政府から派遣されたトルコ人教師が常駐した東京に対して、神戸では基礎的なアルファベットを短期間で学んだ程度で、やはり「東京の人の方がトルコ語できた」のであった。

戦前、神戸のタタール移民は、トルコ国籍取得を説いたイスハキーを支持し、神戸イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会を設立した。しかし、1945 年生まれのルキヤの生活世界において、トルコという国やトルコ人とのつながりは希薄なものだった。また、本節で引用した、1950 年代中頃に東京と神戸でそれぞれ撮影された写真［三沢 2014：220］を見比べても、前者の裏書きがトルコ語であるのに対し、後者は英語である。国際貿易港を有する神戸という環境に慣れ親しんでいたことが、英語志向を生み出し、最終的な定住先の選択に、影響を及ぼしたとみることもできるだろう。

1-3　トルコ定住とアメリカ再移住

極東で終戦を迎え、その住まいをトルコへと移したのち、タタール移民はどのような状況に置かれたのだろうか。トルコ移住と国籍取得は実現可能な選択肢だったとはいえ、自由移民、もしくはすでに国籍をもつトルコ国民として移住したタタール移民は、定住移民に与えられたような後ろ盾をもたなかった。とくに国籍をもつ「トルコ人」としてトルコに「帰国」した場合、自由移民に与えられた 5 年間の免税措置等もなかった。したがって、移住後の暮らしが容易でなかったことは想像に難くない。極東からトルコへ渡ったタタール移民は、自力で新生活の基盤を築き上げる必要があったのである［沼田 2019：166］。船や飛行機で到着した人びとは、すでに移住していた家族、親戚、友人、知人の援助を受けつつ、生活の基盤を整えていった。彼らは極東において都市の生活様式に慣れ親しんでおり、トルコでも同様に、首都のアンカラや最大都市のイスタンブルで暮らすことを選んだ。アンカラではエメック、バフチェリエヴレルが、イスタンブルではヨーロッパ側のフェリキョイ、クルトゥルシュ、オスマンベイが集住地となった。

このとき、タタール移民が語学能力に長けていたことは、就業に有利に働いた。極東における生活で、教育や米軍関係者との関わりを通じて獲得した英語の知識は、1950 年代トルコの一般社会では貴重であり、米軍関連施設や米政府関連機関、航空会社を代表とする外資系企業への就職や、通訳としての業務を可能にした[29]。また、就職のための推薦書を持参して、トルコに渡った者

[29] 1971 年発行『カザン』誌 6 号には、「トルコで暮らすカザン出身者たちの社会状況に関する統計的一考察」と題して、「トルコに 1917 年以降に移住した人びと」を主要な対象とする統計が載せられている。調査対象者の出生地は、35.9%がロシア、45.9%が中国、18.2%が「トルコ、日本、朝鮮等」となっており、1917 年以降の移住者とはいえ、トルコへの直接の移住者ではなく、極東を経由した者が少なくとも半数近くは占めると推測される。職業内訳の上位 3 つをみれば、「家内労働者（家事、子育て等）」21.4%、「セクレタリー、会計等」19.25%、「学生」10.25%である。その後、「技術職」8.35%、「行商」7.09%、「労働者」6.85%が続く。調査の詳細が記されているわけではないものの、ここに示された数値は、トルコに定住したタタール移民の 1970 年初頭の就業状況について、一定の推察を可能にするだろう［Tahir, Devlet 1971：4-7］。

もいた。前節で登場した資料提供者イルハン・アキディルの母方の祖母は、朝鮮半島からトルコに移住する前、米軍の PX（post exchange、米軍基地内にある売店）で働いていた。イルハンの手元には、移住に際して雇用主から提供されたとみられる手紙が残されている。タイプライターを用いて英語でしたためられた推薦書は、トルコで米軍関連施設への就職を後押ししただろう。

韓国、釜山
私書箱 77
ご担当者様へ
本書状の持参人である〇〇夫人は、*Korean War Widows* の支援のために、米軍 PX にて約 1 年間、店員として雇用されました。彼女は雇用期間を通じ、知的で、正直かつ有能であり、献身的に職務を全うしました。
将来のどの雇用主に対しても、〇〇夫人を推薦することは、私の喜びです。

敬具
△△
1955 年 9 月 25 日

［イルハン・アキディル提供、〇〇は祖母の名前、△△は差出人の自筆の署名］

さて、居住環境を整え、仕事を獲得し、あるいは教育を再開する多忙な時期が過ぎると、2 世が中心となって、協会が設立されていく。トルコにはクリミア・タタールをはじめシベリア・タタール、ノガイ・タタールなどタタールの名称をもつ人びとは大勢いる。しかし、1963 年にイスタンブルのフェリキョイで誕生した「カザン・トルコ人文化・互助協会」、1965 年にアンカラのエメックで活動を開始した「カザン文化・互助協会」はいずれも、原則的には、極東に暮らしたタタール移民とその家族に限って、協会員とした[30]。極東における生活経験とそこで得た価値観が、タタールと呼ばれる人びとのなかでも「我々のタタール」（Bizim Tatar）というカテゴリーを生み出し、協会の紐帯として役割を果たしたのである。

「カザン・トルコ人文化互助協会」が出版した『カザン』誌 1970 年 2 号には、同誌の中心的執筆者のひとりであるナーディル・デヴレトが、トルコ移住から協会設立にいたる経緯に対する所感を寄せている。ナーディルは 1949 年 4 歳の頃、中国からトルコに移住したタタール移民 2 世であり、マルマラ大学等で教鞭をとってきたテュルク学の権威でもある。

唯一のトルコ人の国トルコへ自由移民としてやって来たタタール・トルコ人を、最初の頃大きな困難が待ち受けていた。生活していくための仕事探しや方言の違いがもたらす苦労、愉快だったり不愉快だったりする出来事の数々に直面したのである。歴史には短く、しかし人の一生にはかなり長い 5〜10 年という年月を経て、タタール移民はトルコに適応した。一口にいえば、みな収入源を確保し、子どもたちは教育を受け始めた、等。トルコへ移住する前に外国でマイノリティとして暮らすことに慣れていたことから、あるいはタタール移民の若者をひとつにまとめたり、暮らしの精神面に彩をそえる、すなわち民族の伝統や慣習、文化を継続させようという考えから、会を設立する活動に取り掛かった［Devlet 1970b：2］。

30 トルコにおける協会活動の変遷については、Devlet［2014］を参照。

文中では「タタール・トルコ人」、協会名には「カザン・トルコ人」という名称が用いられている。しかし、筆者が行ったインタビューでナーディルは、様々な名称は対外的なものであり、自分たちの間では決して「トルコ人」といわず、常に「タタール」の用語を使ってきたと強調した。また彼は、マイノリティがまとまりを保つために、宗教と言語が重要であること、ヴォルガ・ウラル地域出身であっても極東以外の経路でトルコに移住した「村のメンタリティ」をもつほかのタタールの人びとと、「都市のメンタリティ」をもつ「我々のタタール」は分かり合えず、自分たち独自の協会が必要だったことを語った（2015 年 12 月 14 日、トルコ語、イスタンブル、レストラン）。ナーディルの言う「我々のタタール」は、極東各地において礼拝所や学校、印刷所を作ることで、宗教と言語を結節点に、まとまりを保ってきた[31]。トルコでは自前の礼拝施設こそ不要になったが、タタール移民であることに加え、トルコ移住までの経験によって培われた価値観が暗黙の了解のうちに保たれる場は、ホスト国であるトルコや、ほかのタタールと呼ばれる人びとが供給できるものではなかった。タタール語、タタール音楽、タタール料理などの文化は、「我々のタタール」という仲間内でこそ共有できるものだったのである。

イスタンブルとアンカラで協会を設立し、定住へと向かう人びとがいる一方で、アメリカへの再移住者も現れる。テュルク系民族やイスラームという共通点からトルコに惹かれ、あるいはトルコ移住がアメリカ移住に比べ容易だったことから、極東からの直接の渡米者は少数だった。とはいえ、すでに極東での米軍関係者との交流があり、タタール移民にとってアメリカは遠い存在ではなかった。先に引用した推薦書は、朝鮮半島の米軍 PX での就業経験に基づき入手されたものであったし、戦後日本においては、ダイヤン・サファの語りが示すように、進駐軍との関係が構築された。

【原文】

DS：いろいろねー、いろいろあの時は進駐軍の関係で俺たちは外人なんで、それで、今まで苦労してきたから、それでやっとアメリカが戦争に勝ってそれで俺たちもトルコ人、タタール人で、外人、もうどこ行っても外人と言うとやっぱり皆アメリカ人だと思われちゃうんだよね。でそれでものすごく、どこいっても、 problem があったから、ちょうど戦争が終わってっから、アメリカ人が、軍隊が入ってっから、俺たちが外人だからって、あの人たちも、久しぶりに外人を日本で見たんで、俺たちに対してものすごく良かったんだ。それで red cross だとか、いろいろな面で、えー、何か手伝う仕事があったらっつって、俺たち東京の連中はみんな横浜まで行って、で、アメリカ人のキャンプやなんかで働いて、で、若い俺たちみたいなちっちゃいのが、10 歳 12 歳もっと下のは、クリスマスの時とか何とかでいつも呼ばれて、アイスクリームとかなんか皆食べられて、だから、そういう意味で、あのー、英語が少しできると、どこも仕事行く必要なくアメリカ人に働いて、そいで、いろんな食べ物やいろんなものもらってたんでね、洋服やなんかもみんなくれたし、そういう意味では、ものすごく戦争終わったんで俺たちに対してものすごく得、得した。

---

[31] 東京では小さな日本式の家屋を賃借して、1927 年より子弟教育が施されるようになった。1930 年には独自の校舎を建設し、礼拝所、印刷所、事務所、集まりの場の機能を兼ね備えるようになった。教育や宗教を重視する姿勢について、ラマザン・サファは、「人が集まればマスジド（礼拝所）と学校を作るのは、タタールの連中にとって普通のこと。祈ることはどこでもできるから、マスジドと学校はセットでもよい」と述べている［沼田 2011：19］。

（2012 年 5 月 3 日、サンフランシスコ・ベイエリア、エディハム・キルキー宅）

戦時下の日本ではその外見から、「外人」、「アメリカ人」として敵視された経験から一変し、米軍主体の連合国軍が進駐した戦後にあっては、「久しぶりに外人を日本で見た」アメリカ人の軍人から親切にされ、「英語が少しできると」仕事を与えられ、物資が不足するなか、食料や洋服などを謝礼として得ることができた。このような経験を下地に、冷戦体制下、アメリカは強い存在感を放っていたのである。

渡米の動きが生まれた背景にはまた、米土関係の変化がある。1950 年～1960 年の民主党時代の対外関係は、「冷戦構造の中での西側への―より正確にはアメリカへの―全面的な参入・依存に特徴づけられる」ものだった。トルコは朝鮮戦争へのトルコ軍派兵によって、1952 年に北大西洋条約機構（NATO）加入を実現させ、ソ連に対する安全保障と西側からの援助をふんだんに得ることとなった［新井 2014：248-259］。トルコ国内のいたるところに米軍基地が建設され、1950 年代前半には経済成長もみられた。しかし当時のトルコは、失業率の上昇や財政逼迫という問題もまた、抱えていた［土屋 2010：124］。1950 年代中頃には、「アメリカの援助に頼ったメンデレス政府が、経済の長期的『発展』より短期的な『成長』を重んじ、自立ではなく対外依存の度を深めてきたことの矛盾が、至るところに現われ始め」るのである［新井 2014：252］。こうして 1950 年代後半になると、トルコは不況とインフレにみまわれ、アメリカによる軍事援助も縮小されていくのであった［土屋 2010：122-124］。英語能力を生かして米軍関連施設や米政府関連機関で職を得ていたタタール移民たちは、一連の縮小のあおりを受けたといえる。こうして、トルコに移住したものの、適応の難しさ、変化の激しい社会、生活条件等を通じて将来に不安を抱えた人びとは、先進国であり、よりよい生活と豊富な就業機会が期待できる「チャンスの国」アメリカに渡ることを考え始めた。

日系移民や華僑、ユダヤ系移民、イタリア系移民、アイルランド系移民などアメリカを目指した多くの移民がそうであるように、タタール移民もサンフランシスコやニューヨークを新生活の拠点とした。ただしここでも、すべてのアメリカ移住希望者が、渡米を実現できたわけではなかった。米在住の家族や親戚がスポンサーとなって呼び寄せる方法が最も確実であったが、そうした近親者をもたない場合は、出身国別割り当て制による差別措置が残存する米国 1952 年移民・帰化法［菅 2001：64-65；80； 古矢 1990：1021］と向き合わなければならなかった。筆者が複数のインタビュー協力者から聞いた限りでは、当時ソ連からの出国は実質的に不可能であり、結果としてロシア生まれのタタール移民が定員に入ることは容易かったが、一方で中国や朝鮮生まれの場合、厳しい数的制限から、移住実現の可能性はほとんどなかったとのことである。こうして、トルコで課された兵役を避けるため、移住制度を活用しアメリカへ移住していった者、トルコに適応できず移住を希望するも、中国で生まれたため叶わず、結局はトルコに定住した者、トルコでの兵役や生活の経験を評価しつつも、結婚という個人的な契機によって渡米した者など、三者三様の動きがみられることとなった。

各地に暮らすタタール移民の規模に関して、2010 年代前半の文化・互助協会の会員数にもとづけば、アンカラ、サンフランシスコ・ベイエリア、ニューヨーク各地に 200 名前後とみることができる。イスタンブルについては、協会が閉鎖しアジア側に引っ越した者も多く、分散状態にあるため、実数を把握することは非常に難しい。ただし、日常的な往来や宗教的祝日における個人宅での集まりなどは継続しており、そうした交流から推測するに、ほかの地域と大きな違いはな

いか、少ないだろうというのが、イスタンブル在住者の見方である。2019 年現在も、イスタンブル、アンカラ、サンフランシスコ・ベイエリア、ニューヨーク、そして僅かだが東京に、タタール移民 2 世とその子孫が暮らしている。

2章　「テュルク・ムスリムの国トルコ」というモデル・ストーリー

2-1　モデル・ストーリーの内容

本章では、テュルク・ムスリムという共通点をもつタタール移民とトルコの関係について、モデル・ストーリーという観点からみていきたい。トルコ移住に言及する一連の研究から浮かび上がるのは、テュルク系民族のムスリムが多数派を占め、なおかつソ連圏に取り込まれていない唯一の国トルコに対する、タタール移民の親近感や憧憬である。例えばすでに引用したように、鴨澤は、「トルコ族であるタタール人にとって、ソ連の領域外では唯一のトルコ族の国であるトルコ共和国の国籍を取得しようと望むことは、きわめて当然のことであ」り［鴨澤 1983：258］、朝鮮戦争時にトルコ軍負傷兵が受けた厚遇に感謝したトルコ政府関係者が、タタール移民に返礼を申し出た際、彼らは「かねて念願の国籍取得問題にけりをつけようと」トルコ国籍取得を願ったとする［鴨澤 1983：270］。松長によれば、「タタール人が長年住み慣れた日本からの出国を決意した理由は、戦後の生活の貧しさから逃れたかったこと」と、「イスラームの教えに従い、タタール人女性が異教徒と結婚することを避けたかったので、結婚適齢期のタタール人女性の結婚相手を見つけること」であった［松長 2009：59-60］。『ミッリー・バイラク』紙を扱った小野は、送別側のあいさつにおける「トルコ人の祖国」、「トルコ人の土地」というトルコに対する形容は、テュルク系民族としての連帯が強く意識される移住であったことを表すとし、送別会でのクルアーン朗誦、駅・埠頭の見送りでの「神は偉大なり」との唱和の慣習は、彼らのアイデンティティが宗教に深く根差していたことを示すとしている［小野 2017：237-243］。

さらにデュンダルは、タタール移民とトルコ人外交官の間で起こった戦前の悲喜劇的な出来事を紹介しつつ[32]、タタール移民の名乗りの問題を考察する。以下はその要約である。

> 1930 年～1940 年頃、東京トルコ大使館設置後のこと、車の壊れたトルコ人外交官を助けたテュルク・タタール人が出身を聞かれた。彼が誇りをもって「トルコ人です」と答えると、外交官は驚いた。そこで、もともとタタール人だが、トルコ人でもあることを説明しようとすると、外交官は「お前はトルコ人ではない、トルコのパスポートがないではないか。もしまたお前がトルコの名を使うのを耳にすれば、お前を警察に訴えるぞ」と言った。タタール人は大変悲しんだ。伝えられるところによると、自身の正当なトルコ人性を誇ったこの外交官は、実はほかの民族的出自をもつトルコ人だったようだ。一方で、その外交官が咎めた人物は、汎テュルク主義者であるという主張から迫害され、故郷を離れざるを得なかった民族の一人であり、トルコのパスポートを持たないトルコ人だった。紙の証明書を持たないために、トルコ人だと名乗れないトルコ人だった。しかし、東アジアのテュルク・タタール人にとって、トルコ人かタタール人かという問題は、1953 年に解決したということができる。なぜなら、この地域のイディル・ウラル出身者のほとんど全員がアナトリアへと移住し、トルコ共和国の国籍とトルコの証明書、すなわち身分証明書を獲得し、自由に「私はトルコ人だ」と名乗れるようになったからである［Dündar 2014：173-174］。

ここで示された出来事は、汎テュルク主義的な考えにもとづき、タタール人でもトルコ人でも

[32] このエピソードを聞き覚え、デュンダルに情報を提供したラヴィル・アギシは、筆者もインタビューを行った人物である。彼の語りは、4 章 1 節で取り上げる。

ある自己を示そうとするタタール移民が、トルコ人であることに正当性を与える権威的代表ともいえる外交官から、その名乗りを否定されるという悲劇である。同時に、この外交官自身が実はタタール移民と同じように、ほかの民族的起源をもっていたことがわかり、悲劇は悲喜劇に変わる。そしてデュンダルは、「トルコのパスポートを持たないトルコ人」だったタタール移民が抱えた問題は、1953 年のトルコ国籍取得をもって解決したとする。

これらの研究にもとづけば、タタール移民にとってトルコは「約束の地」であるようにみえる。確かに、筆者が行ったインタビューにおいても、テュルク系言語を話すテュルク系民族としてのアイデンティティやムスリムの国への志向は、移住理由として頻繁に語られた。1938 年東京に生まれ、移住せず同地にとどまったラマザン・サファによれば、多くのタタール移民が「トルコはイスラームの勉強の中心」というイメージを抱いて、移住していったという［沼田 2011：74］。このような「テュルク・ムスリムの国トルコ」に収斂される語りは、タタール移民全体に共有される、トルコ移住のモデル・ストーリーといえる。鴨澤は 1980 年前後に在日タタール移民の 1 世、2 世に話を聞いたうえで、「通称にしたがってタタールと記すが、在日タタール人の人々は通常自分たちのことをカザン・トルコ人 Kazan Türkleri と呼んでいる」と残している［鴨澤 1982：28］。このようにタタール人としてではなく、トルコ共和国の市民である、あるいは市民になることを望むカザン出身のトルコ人として名乗れば、「テュルク（トルコ人）の国トルコ」というストーリーは正当な権利を得る。それは、「アナトリアという大地に根ざし、そこを領土として国をつくっていくという［略］アナトリア・ナショナリズムと言っていい一国ナショナリズム観」［坂本 2014：153］にもとづき、マイノリティを「トルコ人」へ同化させようとする受入国トルコのイデオロギー［Svanberg 1989：58］、すなわち「全体社会の支配的言説」であるマスター・ナラティブに共振する［桜井 2002,：36］、トルコとタタール移民の双方にとって「良い」語り口となる[33]。

ただし、「テュルク（テュルク系民族）の国トルコ」として、タタール人でもトルコ人でもあるという汎テュルク主義的な姿勢を前面に押し出すことには、微妙な問題がついてまわる。ここで、トルコ、ソ連、汎テュルク主義の関係をまとめておこう。「19 世紀に登場したトルコ・ナショナリズムの一形態であり、ユーラシアに広く分布する『テュルク』系の人々、さらには旧オスマン帝国領に『取り残された』人々を糾合することを目指す」汎テュルク主義は［新井 2016b：287］、ソ連との関係に腐心する新生トルコにとって厄介な存在であると同時に、人びとの間では根強い影響力をもつものであった。

1923 年にトルコ共和国が成立したのちも、ソヴイエトとの友好関係は継続し、トルコは経

[33] モデル・ストーリーがマスター・ナラティブと調和する例をあげれば、日系二世従軍の物語は、日系人のアメリカに対する忠誠心や愛国心を示すものとして日系人コミュニティで繰り返し参照される「モデル・ストーリー」となった。これは、第二次大戦はアメリカにとってファシズムに勝利した「よい戦争」であったというアメリカの全体社会で共有されている記憶、すなわち「マスター・ナラティブ」と調和し、相互に補完的な物語となっている［佐藤 2015：106］。蘭が、桜井［2002］を「社会学を越えて広く隣接領域に影響を与えた」と評価しながら述べたように、「モデル・ストーリーという概念から個人の語られた歴史と集団や社会とを接合して語りの社会性を明らかに」することができるのである［蘭 2015：222］。なお拙稿［沼田 2019：167］では、「テュルク・ムスリムの国トルコ」というモデル・ストーリー全般を「良い」語り口としたが、より詳細にみていく必要があると判断した。

済政策もソヴィエトからの援助を受けつつ計画経済を実施した。したがって、中央アジアにおけるテュルク系の民族運動を抑圧しつつあるソヴィエトとの関係悪化に直結する危険のある汎テュルク主義は、トルコ共和国においては禁圧されることになった。ただし、新生トルコは脱イスラーム化政策をとって、従来のイスラームに替わるアイデンティティと誇りの拠り所としてトルコ民族の偉大な歴史的功績を強調していたから、政治的には禁圧された汎テュルク主義は、心情の面ではトルコ国民を強く惹きつける性格を持っていた［新井 2016b：290］。

汎テュルク主義が、トルコと中央アジアのテュルク系民族を結び付け、彼らのソ連からの脱却を促進するということは、国としてのトルコには警戒心を、民衆には魅力を与えた。結局、汎テュルク主義は「政府の表面的な禁圧にもかかわらず人々の気持ちを惹き付け、また誇りをくすぐって、その後も根強い反ソ・反露感情と一体となって生き続けてゆく」［新井 2014：233］こととなった。実際にトルコは、ブルガリアからの 15 万人を越える定住移民、旧ユーゴスラビアからの 12 万人の自由移民を筆頭に、1950 年代に大量の移民を受け入れたが、その背景のひとつが 50 年代のトルコにおける民族主義の高揚であった。受け入れた約 30 万人の移民の大部分は、テュルク系民族だったのである。さらにこの移民受け入れに関して、ブルガリアや中国出身のテュルク系民族を、国として手厚い援助を与える定住移民として扱ったのには、「社会主義体制への対抗をしめす直接的な意思表示の意味」があったとみられている。当時の民主党政権は、西側陣営での立場確保に努め、反ソの姿勢を示したのであった［松原 2011：386-391］。その後 1960 年代末には、汎テュルク主義を掲げる民族主義者行動党がトルコ政治にも影響力を及ぼすようになった。1991 年にソ連が崩壊すると、もはや汎テュルク主義を積極的に抑圧する必要はなくなり、テュルク系諸国との文化・経済面での連携が目指されるようになった［新井 2016b：291］。

このように、人びとに浸透する汎テュルク主義は、トルコの国際政治における立場、特にソ連との関係によって、禁圧と促進という二極の間を揺れ動いた。1950 年代冷戦体制下では、汎テュルク主義そのものは表面上禁じられているものの、反ソの姿勢を強めていったトルコは、「汎トルコ的感情」［新井 2014：231］に裏打ちされた大規模なテュルク系民族の受け入れを実施した。タタール移民のトルコ移住も、この流れのなかに位置づけられる。したがって移住当時、タタール人でもありトルコ人でもあるという考え方は、現実には許されるが、その汎テュルク主義的側面を政治的な場で明示すべきではないという位置づけだったと考えられる。とはいえ、トルコ語でテュルクという言葉がもつ線引きの不明瞭さ、すなわちトルコ人ともテュルク系民族とも理解できる点は、こうした問題を曖昧にし、テュルクと名乗る際の垣根を限りなく低めたかもしれない。極東においては、タタールという名称はあまりに知名度が低く、ホスト社会の人びとと交わす日常会話では、最初からトルコと名乗っていた。これは出自の否定ではなく、便宜上の問題に対する柔軟性といえよう。テュルクという言葉がもつ曖昧さと相まって、各局面で現実的な対応がとられたのである。

一方、建国以来脱イスラーム化を図るトルコにとって、「ムスリムの国トルコ」というストーリーはオスマン帝国への遡及につながりかねない。しかしながら、建国後のトルコの現実に目を向ければ、イスラームは強い影響力をもち続けていた。近代化が部分的で主に都市部で力を発揮したというだけでなく、イスラームは国家設立の際の統合要因でもあった。トルコ共和国誕生時、テュルクという言葉で認識されたのはムスリムだったのである。ギリシャとの住民交換と、バル

カン半島およびソ連からのムスリム移民への門戸開放をつづけたことで、トルコの人口は、すっかりムスリムに占められるようになった。[Svanberg 1989：81]。

1950 年、共和人民党から民主党（ジェラール・バヤル大統領、アドナン・メンデレス首相）へと政権が交代すると、イスラームへの態度は軟化する。「バヤルも含めたケマリスト・エリートにとって、宗教の強調は、彼らがその実現のために献身してきた祖国の発展を否定」するものである。その一方で、「自分たちの宗教心を公の場に解き放ちたいと望んでいる人々の心をとらえることが票に直結することを」、メンデレスをはじめとする政治家は理解していた。かくして民主党政権下では、「導師・説教師養成学校」の再開・拡大、モスク建設などの宗教的自由がもたらされた［新井 2014：246-247］。

こうしてみると、タタール移民が抱く「ムスリムの国トルコ」への想いは、トルコ国内の実情と乖離するものではない。それ以上に、彼らが望むのはムスリムが多数派の社会で暮らすこと、そこで子どもを育てることであり、例えば脱イスラーム化推進のなかで「好ましくない」［新井 2014：214］とされた日常的なヴェール着用は、そもそも彼らの慣習にはない。礼拝時にはヘッドスカーフで髪を覆うが、タタール移民の女性たちが日常生活で頭部を隠すことはない。本研究に掲載した写真資料からもわかるように、タタール移民の姿は、メディアで報じられ、日本社会が一般に抱く保守的なムスリムというステレオタイプとは異なっている。彼らは概して、アタテュルクの世俗主義に賛同し、2000 年代の新イスラーム政党台頭後のトルコにおける宗教色の強まりには、眉をひそめる。彼らにとってイスラームとは、豚肉を食べない[34]、ラマザン月には断食を行うなどの実践と、ムスリムであるという自己認識そのものに価値を置くものだと解釈できるだろう。したがって、移住当時のトルコが目指す方向やトルコ社会の風潮と、「テュルク・ムスリムの国トルコ」というモデル・ストーリーは、大きく相反するものではなく、またインタビュー時点でも万人に理解されやすい語り口として、機能するものだったと考えられる。

2-2　モデル・ストーリーとの距離感

では果たして、タタール移民のトルコ移住は、「テュルク・ムスリムの国トルコ」というストーリーだけで理解できるのだろうか。結論を先取りすれば、答えは否である。桜井は「人びとの語りを調査者は予め持っている枠組みに合わせて聞いている」として、この枠組みを「構え」と呼んだ［桜井 2012：119］。この「構え」という視点から、筆者がインタビューの過程で感じた語り手との間のズレをみていこう。

聞き手である筆者には、大きく 2 つの構えがあった。1 つ目はまさに、前節でみたようなストーリーへの過度な期待である。これまでタタール移民に関する研究では、戦前・戦中が重視され、戦後、彼らがどのような状況に置かれ、極東を離れ、今日に至るまで暮らしてきたかについては、限られた情報が提供されるに過ぎなかった。そこで、筆者が 2011 年にトルコでの調査を開始した際には、タタール移民の経験をインタビューにより収集することを目的とし、特にトルコへの移住理由に注目した。インタビューを実施する際、調査者は「いくら先入観なしに語り手の語りを聞こうと心がけても、もともと調査企画にもとづく目的があり、またその関連文献などを予め

[34] たとえば福田は、陳舜臣が幼少年期に神戸で「タタール人の子供たち」と接触したことを指摘している。陳が見かけた子どもたちは、お好み焼き屋で豚肉を避けていた［福田 2017b：2］。

探索して背景的知識を準備するなかで、多少なりとも調査協力者に対する『構え』をも」つ［桜井 2012：119］。調査の足掛かりとして、2011 年の時点ですでに世に出ていた鴨澤［1982；1983］、松長［2009］から得るところは多く、トルコへの親近感や憧憬は移住傾向をある程度裏付けてもいることから、筆者自身の前提としてしまったのである。しかし実際のインタビューでは、トルコへの強い帰属意識という筆者の期待に反して、淡泊な返答を得ることが少なくなかった。トルコに対する民族・言語・宗教的親近性は、語り手自身の移住理由というよりも、距離を置いた形で、タタール移民全般や親の志向として語られることがあること、そのために語りが定型化されて、それ以上は大きな語りにならなかったり、憧れとは逆の感情が示されることもあったこと、語り手である 2 世よりも、移住を主導した親の 1 世により強く意識されていたことが読み取れることは、留意しなければならない重要な点である。初期の予想以上にトルコからアメリカへの移住者が存在することも、自身の構えに気づく手がかりとなった。

2 つ目は、「移住は大変なはずで、その移住を実現するからにはよっぽどの理由があったのだ」という思い込みである。これには、筆者のトルコへの憧れや留学実現までの苦労も影響したかもしれない。しかし調査のなかで、彼らの語り口には移動や変化への忌避感よりも、規模を問わずそれらを積極的かつ柔軟に受け入れる態度が常にみられることから、タタール移民のフットワークの軽さを実感するに至った。それはまさに鴨澤が、戦前は「フットルーズな行商人として、広く各地に『軽く』接触し」、戦後は「簡単に離日して別天地に出ていく」タタール移民の姿を示しながら、「一所定住的な、かつあまりにも日本国内的な空間態様が主流をなす日本人と比較するとき、興味深いものを覚える」［鴨澤 1983：250-251］と述べているような経験であった[35]。彼らの移動に対する柔軟さは本質的なものではなく、18 世紀半ばに中央アジア、19 世紀末には極東方面へと進出した商人としての歴史のなかで培われてきた、ハビトゥスだと捉えられるだろう。

このような移動に対する認識については、伊豫谷の指摘が示唆的である。すなわち、社会科学、文学、歴史学によって「人の移動は、国民国家という物語のなかに組み込まれ、位置づけ直されてきた」。それはつまり、「移動する人は、正常な状態、本来あるべき状況からの逸脱」だと捉え、彼らが「戻るべき場所」や「本来いるべき場所」を暗黙のうちに想定するものだった［伊豫谷 2014：14-17］。したがって、インタビューでの肩透かしは、伊豫谷が指摘する移動を特別視する態度を、聞き手である筆者が無意識のうちに内面化していたことが一因といえる。

タタール移民が暮らす土地は、トルコ共和国建国のはるか昔より、その地政学的特徴から、出移民、入移民ともに人の移動とともにあった。今日においても、「黒海とエーゲ海・地中海の周辺に広がる諸地域、イランと中央アジア、アラブ世界、バルカンは、モノ、ヒト、情報、いずれの点においてもトルコと緊密な関係でつながっている」［坂本 2014：157］。1960 年代にドイツへ渡ったトルコ人「ガストアルバイター」、2010 年代にトルコへ避難したシリア難民も広く知られているだろう。「トルコ人という民族の概念を国民概念に重ね合わせながらトルコ共和国という国家はトルコ人だけから成る国だという」［坂本 2014：154］、トルコの「『国民国家』化」［新井 2014：252］を強引に推し進めてきたイデオロギーとは裏腹に、タタール移民が暮らす土地は移動の歴史と多民族的諸相に彩られている。したがって移動を異常な現象と見ていては、トルコを

[35] トルコでの長期調査から帰国する直前に記したエッセイで、筆者は留学の動機を「（タタール移民には）日本に生まれて日本で育ち、他の場所で暮らしたことのない私には見えない世界があるはずで、それをどうしても知らなければならないような気がした」と述懐している［沼田 2015：162］。このような留学生の未熟な情熱が、「構え」を生み出したことも確かである。

めぐる人びとの実際の機微や諸相を把握できないのである。

それでは改めて、念願叶って移住したはずの人びとは、その後どうなったのだろうか。既述の通り、鴨澤［1982；1983］やデュンダル［2012］、Dündar［2014］を除いて、当事者へのアプローチが十分になされてきたとは言えず、移住時、移住後の様子はこれまでほとんど顧みられないテーマだった。次章以降で詳しくみていくように、トルコ移住によってタタール移民は本懐を遂げ、トルコ社会に速やかに適応したとは、決していえない。民族・言語・宗教の親近性はあっても、初めて訪れるトルコという国や、イスタンブル、アンカラでの生活は、慣れ親しんだ極東各地とは別世界であった。すでに1章3節で引用したように、イスタンブルのタタール移民たちの手によって刊行された季刊誌『カザン』には、「唯一のトルコ人の国トルコへ自由移民としてやって来たタタール・トルコ人を、最初の頃大きな困難が待ち受けていた。生活していくための仕事探しや方言の違いがもたらす苦労、愉快だったり不愉快だったりする出来事の数々に直面したのである」［Devlet 1970b : 2］とある。この記述からは、「唯一のトルコ人の国トルコ」はコミュニティで共有されるモデル・ストーリーであると同時に、トルコ移住直後の彼らの生活が安泰ではなかったことが読み取れる。とりわけ、すでに高齢となった1世や、極東での生活の経験が長い2世が、幼少期に移住した者に比べて、トルコ語の習得やトルコ社会の価値観、生活条件など様々な面で難しさを抱えた。

複数のホスト社会をもつことから、2 世が負うことになる重荷を考える上で示唆的なのが、Kurban［2012］である。タタール移民のソフィヤ・クルバンは、自身や家族の経験をもとに、「ロシア革命で中国に移住し、文化大革命によってアナトリアへと旅路についたある家族の 80 年を描写する」『ギョチ』（移住）という自伝的物語を、2012 年に出版した［Kurban 2012 : 10］。彼女は、タタール移民に限らず、国際移民であれ国内移民であれ、移民と呼ばれる人びとが共通してもつという各世代の性格について、次のように記している。

> 移民は自身に属すると感じるものすべてを残して、旅に出る。大地にしっかりと根を下ろす大樹から、突然、風に吹かれる葉に変わってしまう。到着した新しい土地に根をはれるよう、爪で地面を掘り、生き残るための闘いを強いられる。将来への不安は大きく、ひたすら働き、少しのもので満足する。ただし彼女／彼には、新しい場所に適応するというような苦しみはない。自分を定義し、自身の存在を作り上げてきた過去に、残してきた文化に、固執する。子どもたちを育てるときも、彼らの内面に過去を、さらには故郷への想いを、細やかに縫い取り、飾り立て、実際よりもいっそう色鮮やかに、植え付ける。こうして生きている瞬間から切断された、憂鬱な 2 世が出てくる。2 世にとって、事態は困難である。両親に対し、失われつつある文化に対し、責任を感じる。過去からくるものを生かすために努力する一方で、居住先にも根をはるため、身を粉にして働き続ける。3 世は、もはや異なる。彼女／彼は、［居住先の］地元民である［Kurban 2012 : 9-10］。

本研究でタタール移民2世と呼ぶ人びとは、しかし実質的にはトルコへの移民1世としての重荷も背負うことになった。引用したクルバンの定義に従えば、両親やタタール文化に責任を感じつつ、自身を作り上げてきた過去は極東にあり、なおかつトルコ社会に根をはるための勤勉さを求められるという、2重3重の挑戦を課されたのである。

「移民二世は，親から継承した文化と生まれ育った土地の文化の二文化の狭間に否応無しにお

かれるが，ことに先祖の文化と受入社会の文化との距離が離れていればいるほど，マージナル・マン的特徴は顕著になる」と、森本は指摘する［森本 1998：79］。トルコに定住したタタール移民 2 世の場合、「親から継承した文化と生まれ育った土地の文化」に加えて、移住した土地の文化という三文化の狭間に置かれた。タタール語、イスラームのような「親から継承した」タタール文化と、「生まれ育った土地」である極東各地の文化との距離は、近しいものではなかった。ただし、親は後者の文化から子を遠ざけようとしたのではなく、親自身も商売をはじめ、居住地の人びとと交渉し、文化を吸収した。その後移住したトルコでは、言語は同じテュルク系言語で近しく、宗教は同一だったが、極東で吸収した文化と受け入れ社会の文化に齟齬が生じた。

トルコ社会への適応に苦労する姿は、1950 年代当時の朝日新聞の記事でも見ることができる。記者は「トルコ紀行―古都で聞く『買物ブギ』“故郷日本”を懐しむ人々」と題し、イスタンブルにおける多様な民族の存在に驚きつつ、「まことに不思議な日本人たち」であるタタール移民に言及している。

> みんな日本人より日本語をうまくしゃべり、日本人より日本のことをよく知っている人達である。彼等の名刺には日本で生れ、日本で教育を受けたトルコ人と明かに書いてある。つまりその両親達が 30 年、40 年と日本に住み、日本で商人として成功した人々のいわば 2 世であった。小学校も、中学も日本で学び、生き方も、感じ方も日本人として成長した人達である。こうした家族はここ 2, 3 年のうちにどしどし日本から帰国してきた。日本がいやになったわけではない。手続上のことで国籍の確認の必要から帰国したのだ。サイドアリ君のお父さんも日本に 40 年も住んで、戦争中も日本人と一緒に協力してあの空襲にたえてきた人である。ムーリン君の［略］一家はどうしたら一日も早く日本に帰れるか、その方法について私にあらゆる質問をあびせかける。［略］次の日、サイドアリ君もどうしても私を自分の家へつれて行くといってきかない。ただ家族のものが日本語を話し日本の事情を知りたがっているので御迷惑でも是非来てくれという。私はこの一家を訪問してすっかり驚いてしまった。サロンにあるものはすべて日本のもので、お母さんは老の眼に涙をためて私をみつめる。「懐かしいです。本当に懐かしいです」とまるで言葉も、感じ方も関西のどこかの町にいるようであった。この一家も 40 年も神戸に住み、今でも娘や息子が神戸に残っているという。［略］なんという異様な家族であろう。自分たちはトルコ人だが、故国へ帰ってみたら全くの異邦人であった。感じ方も、仕事の面でも、第一言葉もまだうまく通じないという［佐藤 1952］。

後述（4 章 1 節）する戦時中のタタール移民に対する強制疎開や「外人」差別の存在を記者が認識していたかは不明だが、「戦争中も日本人と一緒に協力してあの空襲にたえてきた」という記述や、「不思議な日本人たち」、「日本人より日本語をうまくしゃべ」る、「異様な家族」との表現に、記者の独善性や日本人としての優越感がぬぐい切れない。しかしながら、記事に登場する人々が示した日本への郷愁の念とトルコ社会に覚える距離感は、彼らが直面した移住後の適応の難しさを表している。また、「サロンにあるもの」が日本から持参した思い出の品であることや、「懐かしいです」というまなざしは、筆者自身も調査の過程で度々経験した。そして「自分たちはトルコ人だが、故国へ帰ってみたら全くの異邦人であった。感じ方も、仕事の面でも、第一言葉もまだうまく通じないという」経験は、本記事から 60 年が経った筆者のインタビューでも語られた。

「テュルク・ムスリムの国トルコ」への適応は一筋縄ではいかなかった。トルコへの評価は様々であり、特に、極東で生まれ育ち、長期に渡る生活の経験を記憶している場合、極東での生活水準は移住後の生活に対する強力な評価基準のひとつとなった。移住直後の印象や、生活基盤を形成していく過程、その後のインタビューの場に至るまでの生活など様々な経験を包括的にふまえたうえで、「テュルク・ムスリムの国トルコ」というストーリーを今、彼らはどのように語るのか。その際、先祖の出身地であるヴォルガ・ウラル地域や、自身の生まれた極東各地、移住先トルコ、あるいはアメリカをはじめとする新たな移住候補地は、どのように参照されるのか。次章から、語りにおける場所の解釈を見ることで、タタール移民の移住経験を理解していきたい。

3 章　朝鮮半島および旧満洲生まれのタタール移民 2 世の語り

3-1　「私はタタール人で、でもトルコ人でもある」―ラヒレ・アギ

ラヒレ・アギは、1944 年テグ生まれの女性である。京城（現ソウル）に引っ越し、1950 年 6 歳のとき、朝鮮戦争勃発前に一家でトルコへ移住した。彼女はアンカラの「カザン文化・互助協会」の会長補佐や、設立 50 周年を祝う記念式典の組織委員を務めるなど、協会運営の中心的役割を担っている。またトルコのみならず、アメリカを始め他国に暮らす極東出身タタール移民も参加する年次旅行の幹事も引き受けている。世代交代が進むなかで、彼女の積極的な姿勢は、タタール移民同士のつながりを保つ結び目のひとつとなっている。

筆者は、2012 年 5 月 18 日～20 日に行われたエーゲ海地方キュタヒヤへの年次旅行[36]に参加した際、ラヒレと初めて顔を合わせた。「タタール人の歴史を研究する日本からきた女の子の学生」が参加することを知っていた彼女は、滞在先のホテルで温泉につかりながら、自身の半生やタタール移民の勤勉さについて話すなど、当初から協力的な態度で筆者に接してくれた。その後も、「カザン文化・互助協会」の食事会の知らせを受けたり、筆者からはバイラムの際に電話であいさつをするなどのやりとりを続けた。録音を伴うインタビューは、2012 年 12 月 16 日（67～68 歳）[37]および 2015 年 11 月 15 日（70～71 歳）に、アンカラのラヒレの自宅で実施した。

6 歳でトルコに渡ったラヒレは、朝鮮半島での暮らしも、トルコ移住も、覚えていない。しかし、のちに両親など上の世代から聞かされ、まるで記憶に残っているかのように感じるという。

【訳文】

RA：私たちが朝鮮半島にいたとき、父は店を持っていて服を売ってたの。アメリカ人が来て、米軍基地があったから、そこから来て、服とか買っていってたみたい。［略］彼らはいつも言っていたみたい、「この国を離れた方がいい、ここで戦争が起こる。この国から離れて。ここで戦争が起こる」って。それから父はアメリカへもトルコへも行けるよう、申請をした。どちらの国にも書類が整った、「あなた方は行けますよ」と。［略］どちらの国も私たちを受け入れる。でも母が、「アメリカには行かないでおきましょう。アメリカでは子どもたちはキリスト教徒になってしまう。私たちはムスリムです、トルコへ行きましょう。」と言って。［略］中国からタタールたちがトルコへ来たのも、トルコがムスリムの国だから。

＊：例えばエジプト、もしくはほかのムスリムの国は思いつかなかったですか。

RA：思いつかなかった。とにかくトルコ。

＊：テュルク（テュルク系民族）だから。

RA：そう、テュルク（テュルク系民族かトルコ人の意）よ、つまり。//＊：だから、//だから私たちはトルコへ来たの。でも私、この国に暮らして本当に幸せ。つまり、私はタタール人で、でもテュルク（トルコ人）、テュルク（トルコ人）でもある。そう、いつも気を付けているの。でも、「私はテュルク（トルコ人）だ」と言って、私たちがタタール人であることを消し去ったことは、一度もない。私はタタール人、いつだってタタール人（笑）。

＊：あなたはタタール人であって、テュルク（トルコ人）なのですね。

---

[36] 友人、あるいはタタール移民の配偶者であるトルコ人や、タタール移民の孫にあたる 2～3 名の子どもを含み、全体で 56 名ほどが参加した。

[37] 括弧内は、インタビュー時の語り手の年齢である。

RA：ええ、もちろん、もちろん、もちろん、もちろん。
（2015 年 11 月 15 日、トルコ語）

京城で暮らしていたラヒレ一家は、米軍関係者から朝鮮戦争の噂を聞き、移住を決める。彼らの場合、アメリカとトルコのどちらにも渡航可能な書類を手にした状態だったが、子どもたちがムスリムであり続けることを重視した母親の意見によって、トルコが選択された。さらに、ムスリムがマジョリティである国であればどこでもよいのではなく、テュルクの国であることが必要だった。「はじめに」で指摘したように、トルコ語では、テュルク系民族もトルコ共和国のトルコ人も、同じテュルクという単語で示される。このインタビューの場合、最初の筆者の発話ではタタール人もトルコ人も含む、広義のテュルク系民族の意味でこの単語を用いている。その直後のラヒレの返答では、どちらの意味合いでテュルクと表現したか明確ではないが、続く部分では、トルコ人でもタタール人でもあることを常に意識し、両者のアイデンティティを保持してきたことが主張されている。このようにラヒレは、モデル・ストーリーに則った解釈を行っている。幼少期に移住した彼女は流暢なトルコ語を習得し、あとからトルコに到着したタタール移民が関係省庁で手続きを行う際には、通訳として付き添い役まで務めたという。家では常にタタール語を話し、教育は最初からトルコの学校で受けたため、どちらの言語も問題がなかった。その自負は、ラヒレが中学校でほかのタタール移民の子どもとタタール語で会話をした際、その光景を見かけたトルコ人の友人たちが、いつタタール語を勉強したのかと尋ねてきたというエピソードにも表れている。ラヒレは「私、タタール人だよ」と答えるが、小学校からラヒレを知る友人たちは「まさか。あの子たちはタタール人、あなたは違う」と驚いたという。

米軍関係者による戦争勃発の警告は、トルコ移住を決意させる重要な役割を果たしたが、こうしたアメリカ、アメリカ人との関係は、移住後の生活でも継続した。ラヒレ一家は、京城で所有していた店舗や家具を売って自力で資金を調達し、1950 年 4 月 2 日、イスタンブルに到着した。すでにトルコに移住していた父方のおばの元に身を寄せ、父は当時建設中だったイェシルキョイ空港（イスタンブル・アタテュルク空港の旧称）において、労働者として働き始めた。出勤中のバスで、父はあるアメリカ人と隣になり、朝鮮半島にいた頃に習得した簡単な英語で会話を始めた。何をしているのかと聞かれた父は「私は朝鮮半島から来ました。トルコへ。私たちはムスリムです、ムスリムの国がよいと。しかし、なんとかここで（空港の労働者として）仕事を見つけて、働いています。家族を養わなければなりませんから」と答えた。するとそのアメリカ人は、アンカラでビジネスを始めるため、秘書を探していると、父を誘ったという。最終的に、父は事務員、おばや友人のひとりは秘書としてアンカラの会社で働き始め、イスタンブルで父の便りを待っていた母、ラヒレ、弟の 2 人も合流し、チャンカヤ地区のバフチェリエヴレルに家を借りた。

一家はこうしてアンカラでの生活を始めたが、なおもアメリカは彼らにとって無縁の存在とはならなかった。ラヒレが高校在学時に、アメリカ移住の可能性が現れるのである。

【訳文】

RA：たくさんの人がアメリカへ行った。トルコに来て、ここからもアメリカに行ったタタールがたくさんいたの。それで、父はこっち（アンカラ）に来てからしばらくしたら、みんなアメリカに行く、アメリカの暮らしは良いって、父はここでも手続きをしたの。//＊：おお//ここでも書類がそろった。//＊：おお//私たち行けます、とね。そのとき私は高校に通って

いた。弟（ラヒレのひとりめの弟）も同じ。ラシム（ラヒレのふたりめの弟）はまだ小さかった。でね、ある冬の日のことだった。決して忘れない。書類は届いた。私のほかの（父方の）おばさんたちも、アメリカへ行った。親戚の多くも行った。父は言ったの、「書類は届いた、アメリカに行けるよ」と。私は「お父さんたち行って。私 1 年後に行くから」と言った。

［略］

RA：私は残ると言った。私がそう言うと、弟（ひとりめの弟）も（残ると言って）、それから当時トルコの状況は少し悪くて、周囲では色々なことが起こっていたの。//＊：60//ん？//＊：60 年代のことでしょうか。//そう、60 年代のことを話してる。60 年よりあとかな。［略］たぶん私たちの書類は、64 年にそろったと思う。それから、弟（ひとりめの弟）が「僕もアメリカに行きたくない」と言い出したの。//＊：あらら//すると父は「アメリカへは君たちのために行くんだよ。でなければ、ここ（トルコ）での生活を捨てて、アメリカでゼロから始めることは簡単じゃない」と言った。私たちがコリアからここ（トルコ）に来るとき、手にはトランクをそれぞれひとつだけもってやって来た。考えてみて、身に着けている洋服だけ、なにもない。たぶん少しのお金は持ってるでしょう、でもそのお金もプシューッと、飛んでなくなってしまう。

＊：もちろんです、ゼロから始めるのですから。

RA：そう。何もかも、ゼロから始めるの。だから父は「僕はみんなのために行くんだよ」と言って、私たちは「行きたくない」と答えた。父はそんな私たちに「1 日考える時間をあげよう。明日答えを聞かせてもらうからね」と。次の日「私たち、行きたくない」と言ったら、父は書類を破った。あの頃、家ではストーブを使っていて、こういうカロリフェル［［トルコやヨーロッパの家庭で一般的な温水暖房機器］］ではなかった。そのストーブの蓋をあけて、全部の書類を投げ入れて、「私が生きている限り、誰もアメリカへ行くことはない」と言ったの。//＊：わあ（笑）//ふふ（笑）。それで、この話はおしまいになった。

（2015 年 11 月 15 日、トルコ語）

1950 年代後半のトルコは、不況とインフレに直面し、またアメリカによる軍事援助の縮小は、米軍関連施設で職を得ていたタタール移民たちにも、影響を及ぼした。1960 年クーデタによって民主党時代が終焉を迎えると、続く 10 年の間、経済発展は実現したものの、物価上昇、格差の拡大、都市への人口流入の加速、失業率上昇と、安定した社会とは言い難い状況が続く［新井 2014：263-265］。この時期、タタール移民のトルコからアメリカへの再移住の動きが目立つようになる。一度はトルコに移住したラヒレの親戚も次々と渡米し、子どもたちの将来を考えた父もまた、アメリカ行きの手はずを整えた。ここでは、移住という経験に対する父の考えとラヒレ自身の考えが、交差して語られている。父は「ここ（トルコ）での生活を捨てて、アメリカでゼロから始めることは簡単じゃない」にもかかわらず、子どもたちのため、アメリカでの新たな苦労を覚悟している。そして「ゼロから始める」苦労について父の言葉を支持し、補足するように、ラヒレ自身が聞き手である筆者に、「身に着けている洋服だけ、なにもない」移民の状況を想像するよう促している。このような「何もないところからの出発」という表現は、例えば日系移民研究においても「日系人だけではなく多くの移民の経緯で語られる要素」だと示されており［山崎敬一・やまだ・山崎晶子・池田・小林編 2016：91］、移民全体に共有されるモデル・ストーリーの可能性

を指摘できるだろう。繰り返しになるが、トルコ移住時に6歳だったラヒレは、当時のことを覚えていないという。しかし彼女は、彼女自身を含めた「私たち」が直接経験したこととして、「私たちがコリアからここ（トルコ）に来るとき、手にはトランクをそれぞれひとつだけもってやって来た」と語っている。すなわちラヒレは、トルコ移住時の物語を両親など上の世代から繰り返し聞き、生活の安定に奔走する彼らの様子をみることで、移住とはどのような経験なのかを内面化し、自身の経験として筆者に話しているのである。父は子どもたちに 1 日の猶予を与えるが、ラヒレたち姉弟は、トルコに留まることを希望した。その後、アメリカの親戚を訪ねることはあっても、父が移住を提案することはなかった。

資料 5　アンカラの「ゲジェ（ゆうべ）」にてダンス[38]を披露する 2 世たち
（1960 年代末、前列左から 2 人目がラヒレ）
出典：ラヒレ・アギ提供

アメリカ移住の可能性が再び浮上するのは、結婚後のことである。ここではなぜトルコに留まることを選んだかが、具体的に語られている。

【訳文】

RA：それから結婚した。［略］子どもたちが大きくなり始めた。（当時の）トルコの状況は良くない。夫は「アメリカに越そうか。アメリカに越そうか」と（言い始めた）。「どうすべき

38 「人生で一度もタタールのダンスを見たことがなかった」ラヒレたち 2 世は、協会の集まりで披露するため、自分たちで振り付けを考えた。「カザン文化互助協会」の 50 周年記念式典で 3 世、4 世の子どもたちが発表したダンスも、ラヒレが考案したものである（2015 年 11 月 15 日、トルコ語）。したがって、協会で保持される「タタール文化」は、伝承されるとともに、変化を遂げ、あるいは新たに生み出された「タタール移民文化」として、捉えるべきだろう。なおソ連崩壊後には、カザンをはじめとする先祖の「故郷」から、民謡のカセットや楽譜等が入手できるようになり、複数の調査協力者宅で筆者も目にする機会を得た。

か全くわからない」って答えたら、「君が行って、アメリカをみてきて」なんて言うの。「君が良いと判断すれば、みんなでアメリカへ行こう」って。私は「いいえ、もし行くならふたりで行ってみてみましょう。ふたりで一緒に決めましょう」と答えて、80 年にアメリカへ行ったの。夫のふたりの妹もアメリカにいたから。妹のひとりはここ（トルコ）で働いているときにアメリカ人と結婚して、アメリカに行った。二番目の妹も、アメリカに暮らすタタール人がここに来て、彼と結婚して、そうしてアメリカへ渡った。でも私たちふたりとも、アメリカへ行くと、アメリカはとてもステキ、でもそこで生きて行こうという風には感じなかったの。だから夫に「違う、私にとってアメリカは重要じゃない。ここ（アンカラ）でとてもよくやってるじゃない。もう家も持っているし、私たちの仕事も良い。良い会社で働いているでしょう」と話した。私はモービル石油会社で、夫はアメリカ大使館所属の機関で働いていたの。そこ（アメリカ）に行って、私はここ（アンカラ）でのように、私はここで会計の仕事をしていたんだけれど、アメリカに行ったところで会計には雇われなかったでしょう。スーパーでレジ係として働くことになったでしょうね。それもあれしなかったの、望まなかった。//＊：もちろんです。//それ以降、（アメリカに）行くのをやめた。そして、トルコでずっと暮らした。でもここに残って、本当に幸せよ。私たちは素晴らしい人生を送った。ええ。すべてのものを、ふたりで働きながら、結婚した時は借金があって、ローンがあるなかで結婚した。でも働きながら、なんでも手に入れた。なんてありがたいこと（神に感謝を捧げる意味合い）、いい人生だった（(幸せと悟りが混ざったような笑い)）。私は 65 年間アンカラにいる。そして、幸せなの。

（2015 年 11 月 15 日、トルコ語）

ラヒレはタタール移民の男性と結婚し、子どもをもうけた。しかしトルコの状況は依然として安定せず、むしろ 1960 年代末から 70 年代初頭にかけて「政治の混迷は、その度合を一層深めてい」く［新井 2014：268］。70 年代後半になっても内政は好転せず、経済危機を背景に社会不安は増大し、1980 年には軍事クーデタが起こった［新井 2014：276-282］。労働運動、学生運動を「民族主義者行動党の組織『灰色の狼』が襲撃」するというような［新井 2014：278］、血で血を洗う左派右派の衝突は、ラヒレ夫婦やほかのタタール移民が直接関係するものではない。しかし、ラヒレたちの将来を案じてアメリカ移住を模索したラヒレの父のように、ラヒレの夫もまた、家族を想いトルコを離れることを考え出した。すでに移住していた妹がいたことや、アメリカ政府関係組織で働いていたことも、ラヒレの夫にアメリカ移住というアイデアを与えただろう。ラヒレの勤務先も米系企業であり、高校在学時にもアメリカ移住の可能性はあった。したがって移住は非現実的な選択肢としては認識されず、夫婦そろって下見に訪れる。しかしながら、実際にアメリカを目にしたラヒレは「そこで生きて行こうという風には感じなかった」のだった。アンカラには築いてきた生活があり、家があり、職があった。米系企業の会計という職は、トルコだからこそ獲得可能なものであり、移民として渡米しても「スーパーでレジ係として働く」のだろうと考えた。こうしてラヒレは、高校在学時と結婚後の二度に渡ってアメリカ移住の機会を得るも、トルコで暮らすことを選んだ。そして、夫婦で力を合わせて生活を築いたことへの誇りと感謝を強調し、「私は 65 年間アンカラにいる。そして、幸せなの」と、確信をもって述べている。

ラヒレの語りにみられるモデル・ストーリーに則った解釈や、苦労と達成への肯定的な意味付けは、幼少期に移住し、家庭内外でそれぞれタタール語とトルコ語を習得したこと、トルコで教

育を開始したこと、アメリカ移住が選択できる状況にあってトルコで暮らすことを自分の意思で決めたことに起因すると考えられる。彼女にとって、インタビュー時点で 65 年の長きに渡って暮らしたアンカラこそが、「故郷」の役割を果たしているといえるだろう。そして、そのアンカラを確固たる足場として、級友たちにトルコ人だと思われるほどの滑らかなトルコ語を話すことと、「カザン文化・互助協会」の活動に積極的に関わること、すなわちトルコ人でもタタール人でもあることは矛盾せず、ラヒレのアイデンティティを形成している。

政治的経済的適応だけでなく、社会的文化的適応も果たした成功例ともいえるラヒレの語りに対して、次に取り上げる OM の語りは異なる様相を示している。OM は同じく京城からトルコに移住するも、その語りには、移住そのものやその後の生活に対する不満、トルコ人に対する不信感が表れている。

3-2 「まあいろんな苦労しましたよ。どうしてトルコに来たのかも分かんないし」—OM

OM は、1927 年ピョンヤン生まれの男性である。京城で育ち、トルコ移住のため 1948 年に東京へ移ったのち、1950 年 22～23 歳の頃、一家でイスタンブルへと渡った。OM とは、彼が親しくしているイスタンブル在住の日本人を経由して知り合った。トルコ語での表現に言及したり、筆者にタタール語の単語を教えるなど必須の場合を除き、初回の電話から自宅でのインタビューに至るまで、一貫して日本語で受け答えを行った。日本で生まれ育っていないにもかかわらず、流暢な日本語を話すことを誇りに思い、その能力が衰えていないかと、何度も筆者に尋ねた。何よりも筆者が日本人であったことが、インタビュー了承の理由であったという印象を受けた。

また OM は、インタビューの録音を消さないよう筆者に念を押し、問題なく録音できているか確認するため、インタビューを中断し音声を再生するよう促すことが度々あった。タタール移民に関連する事柄だけでなく、歴史や社会に広く関心をもって生きてきたこと、そうして身に着けた知識を筆者と読者に分け与えることへの自負と責任が感じられた。録音を伴うインタビューは、2012 年 2 月 23 日（84～85 歳）、2012 年 2 月 29 日、2012 年 4 月 1 日、2012 年 4 月 3 日、2012 年 5 月 29 日、2013 年 1 月 12 日（85 歳～86 歳）に、イスタンブルの OM の自宅で行った。なお本人の希望により、イニシャルのみ記載している。

OM はトルコ移住について、当時から父に無理強いされたと感じており、インタビューの場面でもなお、トルコ社会やトルコ人に対する不信感が語られた。

【原文】

＊：OM さんはどうしてトルコに行くってことを決め//OM：私は当時は、おやじの鶴の一声。//はー。

OM：お父さんに関しては何も言えなかった当時だ。//＊：ええ//今の時代と違うんです。

＊：その本当は（トルコに）行きたかったですか、行きたくなかったですか。

OM：行きたくなかったな。

＊：行きたくなかった。日本の方が楽しかったですか。

OM：まあ日本語も達者でさ。//＊：そうですよね。//それであのー、知らない国に行くんだから。でトルコ語も全然できなかったでしょう。タタール語しか。

（2012 年 2 月 23 日）

この語りは、OM の自宅を初めて訪問した際のものである。彼は京城での生活においても朝鮮語ではなく日本語を使用し、日本人と人間関係を構築した。タタール移民の子ども同士の会話も、ほとんどが日本語だったという。なお OM によると、彼自身は日本語、英語、トルコ語、タタール語、両親はタタール語とロシア語に加え、父は「ヘタな日本語」、母は「片言」の日本語を話し、家族の誰も朝鮮語を使用しなかったという（2012 年 2 月 23 日）。インタビューでも日本語の使用にこだわったのは、筆者の拙いトルコ語に配慮しただけではなく、日本語に対する強い帰属意識からだった。そんな OM にとって、トルコは「知らない国」であり、「トルコ語も全然でき」ず、トルコ移住を希望していなかったと明示している。2 回目の訪問時には、「おやじの鶴の一声」で移住したあとの日本・トルコ間のギャップに対する衝撃や、移住を主導した父との葛藤が語られた。

【原文】

＊：ここ（イスタンブル）に来たときはどんな印象でしたか、空港にまず着いて。

OM：空港にまず着いたときは、私は若かったんでね、あの覚えてるだけのことを話しますがね、がっかりしました。

＊：がっかりしましたか。

OM：がっかりしましたね。//＊：はあ、それはまた、//まあ当時は、1950 年はね、あの羽田から飛行機で来ましたけどね、羽田は、あの電気をね、十分使ってあってピカピカですよ。こちらへ来たらね、電球 1 個しかないんだ。まあ 75 ワットか 100 ワットか知りませんが、大きなね、倉庫みたいなとこでまあ飛行機が着いてからそこ、まあそこが税関なんですよね。

［略］

OM：まあいろんな苦労しましたよ。どうして（トルコに）来たのかも分かんないし。まあおやじがイスラムの国へ行ってね、そこで死にたいという感があったんですよ。//＊：ええ、ええ//ですからまあ当時はおやじがあれでしょう、あの、まあ家庭ではね、おやじが一番上方だから。//＊：なるほど。//まあ、鶴の一声で、//＊：ああ、「行くよ」って言われたら//まあ「行くよ」って言われたら、それでおしまいだ。まあ特にこの朝鮮戦争がね、始まらなければ良かったんだけどね、始まってからね、おやじ、なんだか知らないけど私は若かったんで、（おやじが）そわそわし始めたんですよ。

＊：なるほど、またその共産主義の、こう・・・

OM：そうそう、それで。それ（共産主義の台頭）を恐れてね。//＊：ええ//まだ日本まで攻め入れて来るか来ないかでね、その北朝鮮軍が。

（2012 年 2 月 29 日）

イスタンブルに到着した OM がまず目にしたのは、離日時との空港の明るさの違いであり、望まない移住に対する彼の落胆が反映されている。また同日のインタビューでは、トルコ人男性の姿を、「口ひげ」を生やしタバコのヤニで「黄色い歯」をして、「もう服装からして汚くてさ、あの、惨めだった」と表現し、トルコ人女性については「無知」で「教育はないから、それこそ本当にまあ、なんて言うんだろう、まあかわいそうな状態でしたよ」と述べている。このような痛烈な心象は、トルコに連れてきた父に対する反感へと向かっていく。人生の終わりは「イスラム

の国」で迎えたいという考えをもち、さらには朝鮮戦争が勃発したことで共産主義勢力台頭への恐れも抱くようになった父は、トルコ移住を強く望んだ。トルコ移住のために朝鮮半島から日本に移っていたものの、決定打となったのは朝鮮戦争だと OM は考えている。

1 世はロシア革命による難民や元白軍兵士であり、OM の父が有したような共産主義に対する拒否、嫌悪、恐怖は、親世代の感情としてほかの 2 世のインタビューでも示されることがあった。タタール移民と共産主義との関係について鴨澤は、朝鮮戦争時「トルコ兵とは、反共精神で結合した」という 1981 年の「キルキー氏の談話」を引用したうえで、「その国籍を取得しようとするトルコ共和国では一般に民衆が反ロシア、ひいては反共的であり、さらに朝鮮戦争のころには、［略］アメリカ人と接近する環境におかれていた在日タタール人の人びとは、大勢として反共的な傾向をもつことになっていたといえるかもしれない」と指摘する［鴨澤 1983 : 271］。また松長は、タタール移民は「無国籍でソ連にはいい感情を持たず、どちらかと言えば反共・反ソ的な立場の人々が多かった」［松長 2009 : 58］と述べている。ソ連が成立するなかで「故郷」を離れざるを得なかった背景をもち、さらに冷戦期のアメリカやトルコと強いつながりをもったタタール移民が「反共精神」を有することは、心情的にも戦略的にも妥当な姿勢と考えられる。

OM は東京出身のタタール移民の女性と結婚しており、東京の産婦人科で生まれた 10 カ月の娘もいたが、父の「鶴の一声」に逆らえる者はいなかった。こうして両親、姉のひとり、OM、妻、娘はトルコに移住した。ここからは、ラヒレのように幼少期に移住した 2 世だけでなく、OM のように青年期を迎えた 2 世も、親である 1 世の意向に左右されたことがわかる。父のトルコへの想いは、トルコへ「帰る」という表現に象徴される。

【原文】

＊：あとは、そうですね、その、トルコに行くときに、トルコに行くんですか、帰るって言いましたか。

OM：まあ、帰るって言いましたよな。//＊：帰るって。//というのは、うちのお父さんはね、まあ、宗教にちょっと凝ってたんで、だれ、それを無理させて、宗教家になるとか、ナマズ［[礼拝]］しないとか、するとか、そんなことは言わなかったけども、自分はいつも礼拝してましたよ。

＊：自分はいつも礼拝して。ええ。

OM：お父さんはね。//＊：ええ//でー、断食祭には断食のあれを、ラマザン、やっておりましてね。

＊：でも例えば OM さんとか子どもたちに強制することはなかった？

OM：なかった。ただし、私も子どもの頃からしてね、断食やってたんですよ。//＊：ええ。ええ。//11 歳頃からして、12 歳頃。

＊：それは、始める年齢としては結構早いですよね。

OM：いやあ、早いといったってさ、ま、うちで全部やってるからね。子どもこころだよ。えー大人のやってるの見て、自分もね、それをやりたいという感じが出ましてね。

（2012 年 4 月 3 日）

一家にとってトルコは、実際には初めて足を踏み入れる国である。そこに「帰る」のは、「宗教にちょっと凝ってた」父が、「イスラムの国」としてのトルコを渇望したからこその表現であり、

「テュルク・ムスリムの国トルコ」というモデル・ストーリーに則った語り口である。しかし同時に、父の宗教心は息子に礼拝や宗教家になることを強制するものではなく、父自身が礼拝を欠かさず、ラマザン月には断食を行っていたこと、それをみた OM が自発的に断食を望んだことが喚起される。10 代になったばかりの OM は、1 カ月の断食をやり遂げたという。

宗教的実践が父による強要ではなかったように、OM も宗教に対して柔軟な見方をもつ。例えば OM は 1985 年にソウルを再訪し、モスクを見学した。その思い出に言及しつつ、韓国におけるイスラーム普及の可能性について、関心があっても「5 回礼拝するっていうのはもう、今の時代ではもう無理ですよ」と話し、礼拝の義務を知れば「イスラム教をあきらめる」と、現実的な判断をする（2013 年 1 月 12 日）。また、共にトルコに移住した姉が亡くなった後、知り合いの日本人女性たちが日本語で「声を上げてさ、お経を詠んでくれました」と、思い起こす。「うちの家族はムスリムです」と明言するが、線香を持参し、テーブルの上に姉の写真を置いて「Japanese 式で」冥福を祈ってくれたことは、感謝の念を伴って語られる（2012 年 2 月 29 日、4 月 3 日）。

さて、宗教実践に対する強制はなかったものの、朝鮮戦争勃発による不安と「イスラムの国」への渇望が相まってトルコ移住を強行した父に対し、OM は不満をぶつける。

【原文】

OM：（父に対して）あなたが連れて来た（と憤りをぶつける）。［略］そういう面でいろいろとごたごたがありましたよ。5 年間続きました、それが。

＊：日本のほうが良かった、なんでここに来たんだっていう。

OM：そうです、そうです。何のために来たか。何のために来たか。［略］おやじは歳を取っとるしさ。誰に頼って来たかっていうことだよ。こちら（OM）もトルコ語もできないしさ。トルコ人も言いますけどね、ま、「行けばなんとかなる」。なんとかならない、絶対に。「なんとかなる」。トルコ語で言うことをね。

（2012 年 2 月 29 日、下線部はトルコ語）

意に反してトルコに到着した OM は、さらに高齢の父に代わって、家族を養わなければならなかった。トルコで奮闘せざるを得ない OM は、「何のために来たか」と、移住後 5 年にわたって父と揉めた。そして、トルコ移住後の生活に対する父の楽観的な見通しを、トルコ人が頻繁に使う「なんとかなる」という表現と結びつけながら、批判している。結局 OM の父は、トルコに来てすぐ、「ここ（トルコ）で何もできないから、日本ではなんとかなるから」と、東京に残っていた OM のほかの姉に、トルコに来ることのないよう手紙を送ったという（2012 年 2 月 29 日）。飯島が「フィリピン日系ディアスポラ」を例に指摘した「帰還前に思い描いていた故郷と現実が映し出す故郷の差異」［飯島 2016：609］は、理想化された憧れのトルコと、実際のトルコのギャップという、OM の父が直面した現実にも当てはまる。さらに OM は、トルコに来たものの、すでに高齢で自立することが困難なほかのタタール移民に対しても、「若い人たちに頼って来てるから。こちらに来た年寄は、何にもできないんで、言葉（トルコ語）も知らなきゃ教育もないし」と、否定的な発言を残している（2012 年 2 月 29 日）。

OM は 1952 年に、イスタンブルのボアジチ大学の前身であるロバート・カレッジで会計の仕事に就き、1957 年にはより給料の良いスカンディナビア航空に転職した。友人のタタール移民がアメリカへ再移住する際、それまでの勤め先に OM を紹介したのである。OM や友人に限らず、

多くのタタール移民の「若い人たち」が航空会社に就職したことについて理由を尋ねると、「だって派手な商売だもん。飛行機は乗れるしさ。無賃乗車、切符がとれるし、それであのエリートなあれ（職業）でしょう、商売」と言う（2012 年 2 月 23 日）。そして、このような「エリート」の職場で、1960 年頃にはオフィスの主任となった理由を、「精を出して働いてたからさ。ここの、現地人と違って。一生懸命。日本調の教育を受けてるから。だからまじめに働いてたんですよ」と、京城で培われた日本語の生活世界に結び付ける。「ずっと日本語で育ってる」ことは、OM にとって成功の基盤とみなされているのである（2013 年 1 月 12 日）。

OM は実のところ、学校教育に恵まれていない。京城の日本人学校には「西洋人は禁止だ」と入学を断られ[39]、代わりに通ったアメリカン・スクールは、太平洋戦争が始まると「憲兵隊」がやって来て、アメリカ人の先生たちは「全部引っ張られて」、授業を受けることはできなくなった（2013 年 1 月 12 日）。それでも学習意欲を失わなかった OM は、「本の虫」として独学で知識を吸収する。

【原文】

OM：（京城の）本町っていうとこで、ここはあの繁華街でいろんな物を売ってましたよ。パンとかケーキとかいろんな物ね。//＊：なるほど。//そこでまあちょっと時間的に余裕があればそこ行ってね、私はいつも本屋へ入ったりさ、もう入ったら出ないんだ。//＊：はい//そういう面では、もう本の虫でしたよ。

＊：いやあ、なるほど。

OM：いろんな本屋さんがありましてね、当時日本人いた頃は良かったなあと思ってね。いつもその、いつも感謝だね、思ってたんですよ。//＊：はい。//感謝してました。

＊：それは、どういうことに対する感謝？

OM：あらゆることで。

＊：あらゆること。

OM：あらゆること。例えば、本から始まってね、あ、私がね、あの日本大使館の、アンカラの日本大使館にね、20 以上の本をね、イスラムに関しての本をね、かき集めて本屋からね、それを寄付しました。もう目が見えないから。だからあのそのアンカラの大使自ら手紙を書かさせて礼状みたいにね、私に送ってくれましたよ。

＊：ああ、そうですか。

OM：うん。ちゃんとしたね。それで感心なことには、そこに寄付した本をね、こう 1 行 1 行 1 行で全部別々に書いてね、次のページにしたり、手紙の次のページにそれを付けて、イスタンブールによこしたんですよ。

（2012 年 2 月 29 日）

ここではまず、植民地時代の京城で、書店に通った思い出が語られている。OM が「日本」に対して「当時日本人いた頃は良かったなあ」と示す感謝には、本が重要な地位を占めている。別のインタビューでも、「無性に本が好き」だった少年時代、夢中になったのは、「講談社の本とか

[39] ただし OM によれば、仁川のタタール移民の子どもたちは、同地の日本人学校に通っていたという（2013 年 1 月 12 日）。

さ、［略］岩波文庫、ずいぶんやっかいになりました」と語る日本語の本だった。「金がないから立ち読みね、やると、向こうの番頭さんが来てさ、読んでる本を、こっから（手元から）ぱっと取りました」と、本を買えずに立ち読みしていたところ、店の番頭に止められたことを思い起こす（2012 年 5 月 29 日）。彼にとって、「日本調の教育」とは、実は日本語の書籍を通じた独学によるところが大きいだろう。また「あらゆること」に対する感謝の内容を尋ねると、日本語の本にまず言及し、そこで目を悪くし読書が困難になった OM が、アンカラの日本大使館に本を寄贈したことが思い出された。彼は、寄贈本をリスト化し、令状とともに送付するという大使館側の対応に「感心」し、「日本」への信用を再確認するのである。OM の「日本」に対する帰属意識は、トルコで慣れない生活を送りながら家計を支えなければならなかった彼にとってよすがとなり、時に日本人や「日本調の教育」を受けた OM 自身の「誠実さ」を確認し、トルコ人の「不誠実さ」と対比させることで、より一層強度を増していく、という構造をもつようにみえる。またトルコ移住後の日本再訪も、「日本」への帰属意識を補強するものだった。

筆者には「もし機会があれば、カザンに行っていらっしゃい」とロシア訪問を勧めるも、OM はカザン、ウファともに訪れたことがない。現役で働いていた頃は「ソヴィエトが健在」で、「ソヴィエトが好きになれなかったんで、全然その、行く気もなかった」OM は、旅費や時間が工面できれば、姉や姪が暮らす日本や、生まれ育った韓国を訪れた。また、シカゴには兄が住んでいたため、20 回ほど渡米し、ニューヨークやサンフランシスコも訪れた。結局ソ連崩壊後は、すでに退職しており、姉も亡くなって「大体、ロシアにあんまり行く機会なんてないんだ」という状況のまま、今日に至っている（2012 年 2 月 23 日、4 月 3 日、5 月 29 日）。ただし、ほかのタタール移民がロシア訪問の際に見つけ出した親戚とは交流があり、イスタンブルの OM の自宅で、筆者も面識を得ることができた。彼は、OM の父の弟の孫にあたる人物で、OM とはタタール語で会話し、電話やイスタンブル訪問を通じて、関係を維持している。

トルコ移住後の苦労から、再移住は考えなかったのかと尋ねると、「（そのような）考えはもうこちらへ来てからはなかったね」との断言のあと、OM はそれ以上語らず、話題を変えた。朝鮮半島では進駐軍の「アメちゃん」のもとで働き、訪れたことのあるサンフランシスコを「憧れの場所」として言及するも、アメリカ移住は彼にとって選択肢となり得なかった。シカゴに住む兄に、アメリカに来るよう誘われたこともあったが、トルコで退職したため「文明国と違って、年金をさ、アメリカまでトランスファーしてくれるっていう設備がない」こと、退職後もトルコに暮らす家族の生計を支えていたことから、「行ったってさ（行ってどうする）」と断った。そして、アメリカに移住したタタール移民については、希望をもって渡っていったが「掃除婦とか、もの運びとか、建築のほうでさ、労働人夫」のような職しかなく、「がっくりしたのが多いんですよ」と否定的である。そのうえで、個人事業主として店舗を所有していた日本での日々が、多くのタタール移民にとって結局のところ「一番状況がよかったんじゃないか」と、締めくくるのである（2012 年 2 月 29 日、5 月 29 日）。

幼少期に移住したラヒレと異なり、OM にとって京城こそが自我を形成した場所である。そして、京城が日本の植民地支配下にあったことで、彼の生活世界は朝鮮語ではなく日本語で形成されていた。OM の実質的な滞日期間は 2 年と短い。しかし、ソ連は好きになれず、先祖の出身地に帰属意識を抱くことがないまま、機会があれば親戚のいる日本を訪れてきた彼にとって、「日本」は常に肯定できる存在としてあり続ける。インタビュー時 80 歳代半ばの OM は「日本はいい所だし、いまだかつて思ってますよ」と語り、「できれば戻って」銭湯に行きたいと望んでいた（2012

年2月29日)。

ここまでみてきたのは、トルコへの辛辣ともいえる評価である。しかしOMは、トルコのすべてを彼自身から切り離しているわけではない。タタール移民とトルコ人に共通するテュルク系言語やイスラームに言及する際、それは顕著になる。

【原文】

＊：無国籍でこちらに来るのって、とても難しかったんじゃないかと思うんですが。

OM：いやいや、難しくない。その理由はね、私たちはもうタタール族でしょう。//＊：ええ//ですから使ってる言葉から宗教も同じでしょう。//＊：ええ//ですからその面はね、簡単でした。

(2012年2月23日)

ここでは、移住に必要な査証や国籍取得などの制度が話題に上がっていた。そのため筆者は、無国籍で移動することに障害がなかったか聞いている。OMの回答は、トルコ人と言語と宗教が同じ「タタール族」であることが、制度面での容易さにつながったというものだった。この語りは、モデル・ストーリーにも通ずる。事実、OMはほかのタタール移民がなぜトルコに移住したかを、この親近性に則って説明した。トルコやトルコ人に対する否定的な心情とは逆に、OMはトルコ人との類似性や、トルコ人と名乗ること、トルコ語を評価することを躊躇しない。

【原文】

OM：(トルコ移住前の極東で)まあ(自分たちは)タタールでも、トルコって言ってましたから、当時は。//＊：ああ//タタールを知っている人っていうのは、日本じゃいなかったもん。

＊：ええ。もうじゃあ、そのなんて言ったらいいんでしょう、近いからトルコっていうことですか。

OM：まあ、近いからトルコ語ですよ。まあほんとはそれも兄弟同士みたいなもんで、ちょうどアゼルバイジャンのあれ(言語)とおんなじでね、言葉も似通っている点が、80%似てるし。//＊：ええ//まあいろんな面で、それであの宗教もイスラム教でしょう。//＊：ええ//そういう面ではあれですあの、まあね、あのまあ朝鮮でも日本でもトルコと言ってんですよ。ターキッシュっちゅう、国籍は取ってないけども、聞かれたらトルコ人。まあトルコ系統だから、一応はね。

＊：ええ、ええ、ええ。

OM：それでなければトルコ語使えない。

[略]

＊：トルコに来た後、タタールの文化を残そう、言葉を残そうっていうことは、若い人たちはやってるんですかね？

OM：いやあ、やらないでしょうな。

＊：もうやらない。

OM：もうトルコ語一点です。//＊：うんうんうん//トルコ語を使ってる、全部がね。というのはあのー、まあ単語で言っても、トルコ語がないのでずっとね(トルコ語のほうがずっと)、あのー、トルコ語で言いますよ、豊かだ。//＊：豊か。//豊かなんだ。タタール語にはね、

それだけの言葉がないんですよ。//＊：うーん//あるだろうけど、私たちが知らないんだろう。//＊：はあ//まあ、カザンに行けばどの程度知ってるか分かりませんけど。//＊：ええ、ええ//行ったこともないし、カザンから来た人たちにも会ったことないし。//＊：なるほど//並の言葉ならね、あの話し合ったら分かりますけど。//＊：ええ//普通でしたらあれです、あのトルコ語のほうがずーっと上です。

（2012 年 2 月 29 日、下線部はトルコ語）

極東では、タタール人と名乗ったところで認知度は低かった。したがって、アゼルバイジャン語とトルコ語が似通っているように、タタール語とトルコ語も「80%」同じで「兄弟同士みたいなもん」であること、同じ宗教を信じること、「トルコ系統」であることから、国籍はなくともトルコ人と答えることは筋の通った選択であったと、OM は語っている。その証左として、テュルク系言語を話すからこそ、トルコ語の習得が可能だったと主張する。実際のところ、OM が言及した 3 言語はいずれもテュルク諸語ではあるが、トルコ語、アゼルバイジャン語が「南西グループ（オグズ・グループ）」に属すのに対し、タタール語、バシコルト語は「北西グループ（キプチヤク・グループ）」に属す［菅原 2016：83］。したがって、トルコ語との類似性においてタタール語とアゼルバイジャン語を並列させることは、やや行き過ぎの感が否めない。トルコ語とタタール語の間に存在する相違こそが、高齢となった 1 世のトルコ語取得を困難にしたことは無視できず、タタール語の会話に困惑する筆者に対して、「タタールチャ（タタール語）はちょっと、むつかしいというよりもさ、耳が慣れなくちゃね」と OM が配慮を示したこともあり（2012 年 4 月 3 日）、彼自身、相違を等閑視しているわけでもない。そのうえで、ここで読み取るべきは、トルコ語が OM にとって習得可能な言語であり、トルコ語が使えるからこそ「聞かれたらトルコ人」と答えることが妥当だとする、根拠のひとつとなっていることだろう。

OM は次いで、「トルコ語のほうがずーっと上です」と、トルコ語の語彙の豊かさを評価する。タタルスタン共和国の首都カザンで話されるタタール語の状況はわからないと述べつつ、タタール移民の間で話されるタタール語に比べ、豊かな語彙をもつトルコ語が、3 世以降の若い世代に浸透するは当然だと説明するのである。引用にはないが、同日のインタビューでは、OM 自身にとっても、最も話しやすいのはトルコ語であるとも認めている。なお、「カザンから来た人たちにも会ったことない」という発言について、先述したように、OM にはロシアで発見された親戚との交流がある。しかしその親戚が住むのはタタルスタン共和国ではなく、タタール語で会話をしていても、ロシア語の環境で育った彼の言葉を、時として OM も理解できないことがあるという。これが、件の語りにつながっている。

OM はトルコのすべてを否定するのではなく、トルコ語の豊かさを評価し、言語、宗教、民族的な類似性は認めている。また、極東で理解してもらうためにはトルコ人と名乗ったほうが都合がよく、トルコ国籍を取得した以上、トルコ人と名乗ることも自然であり、かつトルコに住んでいるのだから語彙の乏しいタタール語よりもトルコ語が話されることは理にかなっている、というような現実的な判断も、インタビューの随所にみられた。OM は苦労しつつも家族の生活を支え、最終的には外資系航空会社という安定した職業についており、経済的適応は果たせたといえよう。しかしながらラヒレの語りに比較して、OM の語りからは、トルコの人びとに批判的で、社会的文化的に適応することへの拒否感が見て取れる。極東で生まれ育ち、長期に渡る生活の経験を記憶している場合、「ピカピカ」の空港と「電球 1 個」の空港の対比に喩えられるように、極

東での生活水準は移住後の生活に対する強力な評価基準となった。OM は日本語の環境で育ち、「日本」の文化を身に着けたという自己認識をもつ。トルコを「故郷」と感じていない彼にとって、日本語が織りなす空間こそが生まれ育った場所であり、最も重視する価値観である。彼が「戻りたい」と帰属意識を抱くのは、植民地支配下の京城で親しんだ日本語の生活世界であり、その日本語の本場で、旧宗主国の「日本」なのである。

OM はトルコ語の豊かさを評価し、彼自身にとっても、最も話しやすいのはトルコ語だと認めている。それでもなお、帰属意識を表明するために、インタビュー使用言語として日本語が選択されたといえるだろう。このような OM の認識に見られるのは、植民地支配の多大な影響である。では、旧満洲で生まれ、OM と同じく生活の記憶を持つラヴィレ・イディルレルの場合は、どうだろうか。

3-3 「つまり、3 つ祖国があるということになりますね」—ラヴィレ・イディルレル

ラヴィレ・イディルレルは、1927 年ハルビン生まれの女性である。1938 年末まで同地で暮らし、トルコ移住前には内モンゴルのカルガンで 1 年ほど過ごした。1940 年 12 歳のとき、一家は日本から船でトルコに渡った。

ラヴィレはトルコにおいて、『ハルビンからイスタンブルへ、そしてエスキシェヒルで 5 年（思い出たち）』［İdiller 2000、初版は 1989］との題で自伝を出版しており、筆者は連絡を取ろうと試みていた。しかし格式ばった挨拶をする前に、偶然にも、イスタンブルに暮らすほかのタタール移民の自宅で開かれた食事会で知り合ったことで、より打ち解けたインタビューの場を設けることができたように思う。この食事会は、1927 年生まれの東京出身タタール移民 2 世の女性が、同じく東京から移住した 2 世の女性 3 名と、そのうちの 1 人の身の回りの世話をする非タタール移民の女性、およびラヴィレを招き、いなり寿司を供するという会であった。彼女たちが移住してきた 1940 年代～1950 年代に比べて日本食材店が増加したとはいえ、品ぞろえ、金額、また店舗までの交通の便などを鑑みれば、日本食に必要な材料は容易に入手できるものではない。主催者の指示のもと、筆者が中心となって白米を炊き、貴重な油揚げや桜でんぶを用いて作ったいなり寿司は、彼女たちにとっても筆者にとっても、久々のご馳走と呼べるものであった。2014 年 6 月に行われたこの食事会ののち、電話でのやりとりを経て、2015 年 10 月 14 日（87～88 歳）にラヴィレが暮らすイスタンブルの高齢者向け高級マンションを訪ね、彼女の個室にて録音を伴うインタビューを実施した。

太平洋戦争戦勃発前の移住について、ラヴィレは直接の当事者である。トルコ移住から 75 年が経ち、彼女は移住のイニシアティブを取った母の考えを次のように想像する。

【訳文】

Rİ：私たち（姉妹）はまだ子どもでした。大きくなって、誰と結婚するのか。中国人と結婚させるのか。ロシア人と結婚させるのか。母はとても考えたようです。母は先のことを考える人でした。思慮深い人間でした。それ（子どもの将来）を考えて、そうしたんでしょう（トルコ移住を決めたのでしょう）。それから、私たちがいなくなったあと、また（ハルビンは）あれになった、共産主義になったでしょう。もともと共産主義から逃げたのに、また共産主義のもとで暮らすのか。ですから、母は本当に将来をよく考える人でした。私たちはムスリム、ムスリムの国で子どもたちに生活をさせようと。

＊：そのために。お二人がまだ小さいときから、考えられたんですね。
Rİ：ええ、ええ。母は本当によく考える、将来の展望を見通す人だったんです。
［略］
Rİ：一番大事にしたのは、自分たちがムスリムであることを失わないようにしよう、ほかのものにならないようにしよう、子どもたちを孤独にしないようにしようということ。今（2015年現在）ハルビンには、（タタール移民は）誰もいません。みんないなくなりました。アメリカへ行ったひと、トルコに来たひと。それを見越して、こうしたんでしょう（トルコ移住を決めたのでしょう）。
＊：ムスリムの国といえば、ムスリムが住むほかの国もあると思うのですが、特に、
Rİ：知らないけれど、どうしてか母はトルコを望んでいました。それから、アタテュルクがいるでしょう。アタテュルクの革命のあと、トルコはより、目に見える存在になった。//＊：はあ（（なるほど、というニュアンス））//そうでしょう？トルコはどんなところか、わかるようになりました。ほかの国にはどんなひとがいるか、知る由もなかったんですから。当時ロシアでも分割されたものはなく、ただロシア（ソ連）だけがありました。母が何を考えたか、はっきりとはわかりません。でもこういう考えで決めたんでしょう。
［略］
Rİ：それからたぶん、私たちの故郷により近い、戻るなら、トルコからの方が近いと考えたのかもしれません。なぜなら母は、つねに私たちの祖国に戻るという望みを抱いて生きていました。いつも、戻ろう、いつか私たちは戻ろうと話していました。でも、間に合わなかった。少なくとも、行って、見たがっていた。でも当時は、あれ（ソ連）があった、閉ざされていました。（ソ連との間に）往来はなかったんです。母が亡くなったのち、テュルク系諸国も建国された。（行き来できる）道も開いた。でも母はもはやいなかった。母は本当に望んでいました。だから母と父に、彼らの（祖国の）土を、彼らのお墓にまいてあげました。
（2015年10月14日、トルコ語）

母の考えは、ムスリムとしてのアイデンティティの保持、娘たちの結婚相手、アタテュルクの存在感、「故郷」や「祖国」[40]であるカザンへの帰還を基盤としながら、「テュルク・ムスリムの国トルコ」というモデル・ストーリーに沿う形で、ラヴィレに推測されている。母自身の考えを明確には知らないからこそ、一連の語りにはラヴィレ自身のトルコ移住に対する解釈が含まれると考えられよう。そして彼女は、母を「先のことを考える人」、「将来の展望を見通す人」と称え、先見の明の証左として、のちの共産主義勢力の台頭と、旧満洲のタタール移民コミュニティの消滅に言及しながら、その決断に理解を示す。また、母の長年にわたる「祖国に戻るという望み」を目の当たりにしてきたことで、「祖国」に少しでも近い場所を選んだのかもしれないとも推測する。このような母の望郷の念にまつわる思い出は、2014年6月の食事会で初めてラヴィレに会った際も、話題に上がった。カザンの村に生まれた母は、認知症が進むなか、テレビに映るゴル

[40] トルコ語辞典において、memleketは国、国土、生国、故郷、vatanは祖国、母国の訳語があてられている［竹内2004：268；397］。ここでは、出身地を尋ねる際に用いられることが多いmemleketを故郷、しばしば愛国心と結びつけられるvatanを祖国と訳している。

バチョフをその場にいる人物だと誤解し、「カザンに連れて行って」と話しかけたというのである。母の想いはラヴィレに受け継がれ、両親の死後、1997 年にタタルスタン共和国、バシコルトスタン共和国、チュヴァシ共和国を訪れた彼女は、この経験を「夢のような訪問だった」[İdiller 2000 : 237] と自伝に記し、持ち帰った「祖国の土」をトルコに眠る彼らの墓にまくのだった。

1940 年、一家は太平洋戦争開戦前にと、急ぎ移住した。自力でトルコに到着した彼らは、イスタンブルで新生活を始める。しかし極東でもトルコでも、難民や移民という立場にある一家は、苦労を重ねた。少しでも条件のよい生活を模索することが、一家のハルビンからカルガンへ、イスタンブルからエスキシェヒルへ、そしてまたイスタンブルへと繰り返す移動の要因となった。ラヴィレは、寄る辺のない難民として仕事を見つけることの難しさを、父の仕事を通して痛感する。ハルビンからカルガンに移るきっかけとなったのは、当時の父の雇い主の不当ないいがかりだった。もはや雇い主になりたいという気持ちを抱いた父は、親戚とともにカルガンまで下見に行き、商機があると考え、一家は住み慣れたハルビンを離れたのである。ラヴィレは、「今だって仕事がないと人びとは言うけれど、当時もなかった。難民として仕事を得ることは本当に難しい。中国語を知らないし、中国人同士ですでに商売をやっている。難民としてどうやって日々の糧を得るのか」と、父の置かれた状況に心を砕く。

自由移民としてトルコに移住したあとも、安定した生活の獲得は、一筋縄ではいかなかった。イスタンブル到着後、父は行商人として収入を得ようとした。スィミット（ゴマ付きパン）とチャイという軽食で空腹を紛わせながら、イスタンブルの北方に位置するサルイェルまで売り物を背負って歩いた。しかし安定とはほど遠い状況に、結局 2 カ月でイスタンブルに見切りをつけ、上海からきた父の知人が住むエスキシェヒルへと移動した。一家はエスキシェヒルで店を開き、定住しようとした。国籍取得の手続き自体に問題はなく、トルコ国民としての立場を確保したものの、生活は苦しいままだった。ラヴィレは、自由移民として自発的にトルコに来たという意識をもつ両親が、極東からの移民のうわさを聞きつけて視察に訪れたオメル・イノニュ（トルコの第二代大統領イスメット・イノニュの息子）[41]に対し、支援を求めることはできなかったことを語る。

【訳文】

Rİ：父は署名をしたそうです、「トルコ政府に援助は求めません」と。

＊：だからオメル・イノニュが来た時に、

Rİ：そうそう、その時私たちはまだトルコ語もよく知らなかったし、母も父も誇り高い人たちでした。何かを望むことは醜いし、失礼になる。そうでしょ？約束した、署名をしたんです。これを破ることはできない。だから両親は、「何も欲しいものはありません」と答えました。本当は、住むところが必要だったのに。

＊：どれほど困難な状況にあったか。

Rİ：でも、今考えると、家を、もしも願えば、イノニュはたぶん、義務ではないけれど、望み

[41] ラヴィレの記憶では、オメル・イノニュの訪問は 1940 年頃のことであり、したがって 1924 年生まれのイノニュは、若干 16 歳の青年である。どのように訪問が実現したのかを明らかにすることはできなかったが、ラヴィレの語りから読み取るべきは、一家がトルコ政府に対して援助を求めることができず、生活の立て直しと子どもたちの教育のためにイスタンブルへと再度移動したことが、結局はラヴィレの上昇移動を実現させた、ということだろう。

を聞いてくれたのではと思います。家か、ほかに何か、きっとくれたでしょう。そうすれば、私たちがエスキシェヒルから離れることはなかったはずです。そこで留まったでしょうね。そうすれば、（イスタンブルで）商業高校に行って、エスキシェヒルに銀行があるかどうか知らないけれど、そこ（エスキシェヒル）では社会的上昇はできなかった。//＊：ええ、ええ//その観点からも考えます。これもひとつの運命ね。

（2015 年 10 月 14 日、トルコ語）

住まいの確保にも事欠く一家にとって、本来ならばオメル・イノニュの訪問は支援を求める絶好のチャンスだった。しかし、人間としての尊厳や、トルコ政府に援助を求めないという条件で移住を認められたという思いから、両親がそのような申し出をすることはなかった。一家は 5 年をエスキシェヒルで過ごしたのち、生活の苦しさと、子どもたちの教育のため、再びイスタンブルへと移動する。ラヴィレはイスタンブルで中学校、商業高校を卒業し、トルコ大手のズィラート銀行に 25 年間勤務、タイピストから管理職まで上り詰めた。このことを受けて、家を与えられなかったことが、結局は彼女の社会的な上昇移動を可能にした「運命」だったと、肯定的な意味づけをするのである。また自伝でも、イノニュの訪問と、援助を依頼しなかったことが記されている。そのうえで、「大いなる関心の表れであるこの立ち話、短時間の訪問は、私たちみんなを大変喜ばせ、やる気、努力、希望を促進したのであった」と、述懐する［İdiller 2000 : 168-169］。この出来事をめぐる語りや記述で見えてくるのは、自由移民として一家を受け入れたトルコに対する批判だと受け取られることを避けるため、「社会的上昇」をもたらした「運命」、あるいは「やる気、努力、希望を促進した」思い出という前向きな解釈を行い、一家の努力とトルコへの謝意に、聞き手や読者の意識を向けようとする配慮だろう。

生活の基盤づくりに関わる苦労に加えて、1940 年当時の移民そのものへの無理解も、ラヴィレにとって忘れられない記憶である。自伝には、「人として、母と父を残して去るなどあり得るのか」という冷たい言葉が記されている。これは、ラヴィレの祖母が奉天に残ったことを知ったあるトルコ人が、両親に浴びせた非難である［İdiller 2000 : 174］。筆者はその部分を引用しながら、次のように尋ねた。

【訳文】

＊：お母様とお父様に、親を捨ててどこかへ行くなんてあり得るのかという人もいたそうですね。

Rİ：ええ、そう考える人びとがいました。母と父を残すことなどあり得るのかと。彼らはエスキシェヒルで生まれ、エスキシェヒルで暮らし、エスキシェヒルで死ぬ人びと。彼らは知らないんです。そもそも誰も知らなかった、移住という問題について。ドイツに行く人びとがいなければ、今でも誰もわからないままだったと思います。

［略］

Rİ：今ヨーロッパに行く人たちがいるけれど、彼らは身分をもっています。私たちはなんの身分ももたなかった。私たちは、取り残された民族です。（トルコに移住した）当時。それは悪いこと。だから母は、トルコの身分がもてるように考えたんだろうと思います。

（2015 年 10 月 14 日、トルコ語）

ここでは、エスキシェヒル以外の世界を知らないトルコ人をはじめ、当時のトルコでは移住せざるを得ない人びとという存在が認識されておらず、ドイツを代表とするヨーロッパ各地への大量のトルコ人移民が登場して、ようやく状況が変わったことが示されている。トルコ人「ガストアルバイター」が知られるようになる20年ほど前、ラヴィレと一家が移住した1940年当時、両親を非難した人物は、「ギョチメンリック（移民であること）とは何たるかを知らない」［İdiller 2000：174］のであった。さらに、今日のヨーロッパへの移民とは異なり、ラヴィレたちは無国籍の状態を脱しようという、より厳しい状況にあったことが、悔しさとともに語られている。

移民せざるを得ない人びとに対する無理解とともに、名乗りの問題も、トルコで経験した困難だった。タタール移民に対する様々な名称のうち、どれが最も適切だと思うかと尋ねると、ラヴィレは堰を切ったように、次の内容を語った。1）クリミア・タタール人と混同されたこと、2）彼らとは異なりイディル・ウラル・タタール人（ヴォルガ・ウラル・タタール人のトルコ語）と言えば区別できること、3）移住当時タタール人だと言えば馬鹿にされたことから、ラヴィレもほかの人びとも対外的には長らくタタールの名を使うのをためらってきこと、4）ソ連崩壊に伴い、タタルスタン共和国が知られるようになったことで、ついにトルコでも堂々とタタール人だと名乗れるようになったこと、5）トルコに来るとイディル・ウラル・トルコ人と名乗る必要に迫られたが、最近ではタタール人として明示するような動きがみられること、6）極東から来たタタール移民同士では常にタタール人との名称を使っていたこと、7）父はウファ出身バシコルト人、母はカザン出身タタール人だが、単語の発音が異なることがある程度で、家族の間で父はタタール人として自己を認識していたこと、である。さらに、ハルビンやカルガンから来たものの、日本の船に乗ってきたことで日本人だと後ろから叫ばれ、からかわれたことも、移住当時 10 代前半のラヴィレが経験した出来事である。その悲しみと憤りは、「1940年代のエスキシェヒルはどんなにか無教養な場所だったか」と表現される。

以上のようなトルコ移住後の暮らしのなかで、ラヴィレはハルビンを中心とする極東への郷愁を募らせていった。彼女が「私の宝物たち」と言って筆者に見せたのは、幼少期の記憶を呼び起こすものだった。それは、『蒙疆新聞』の記事、ハルビンやエスキシェヒル、イスタンブルの各地で友人がメッセージを記してくれたノート、カルガンからイスタンブルに来る際に父が記したノート、アルバム、ハルビンの名所ポストカード、日本製磁器のティーセット、1939年、1940年発行の『講談社の絵本』、『尋常小学校修身書』、1935年文部省発行『尋常科用　小学国語読本』、1936年文部省発行『尋常　小学算術』、「明治ミルク　チョコレート」の包み紙などである。ラヴィレは2007年に、インタビュー当時の住居である高齢者向けマンションに入居し、限られた収納スペースに合わせて、多くの「思い出のもの」を処分せざるを得なかった。一部屋埋まるほどの量だったというそれらの品のうち、特にカルガン時代に平仮名で書き、『蒙疆新聞』にも掲載された詩を額に入れたものを、「持ってくればよかった」と悔やんでいる。ラヴィレはその詩を自伝にも掲載している。

さびしい

せんせい　さびしい
なんのこと
お国のとほい

人のこと

らういら
［İdiller 2000：131］

この『蒙疆新聞』の記事には（資料 6）、ラヴィレや父の極東に対する郷愁と、日本の植民地主義が交差する様を見いだせる。父はエスキシェヒルに暮らしていた頃、常にこの記事をポケットに入れて持ち歩き、人びとに見せていた。1940 年に発行された記事は、今では日付も読み取れないほどぼろぼろの状態だが、インタビュー当時もラヴィレが大切に保管していた。カルガンで、両親の出身地がロシアであることを理由に「アカイ」と判断されたラヴィレと妹は、日本人学校への入学を許されなかった。そのため、日本人女性の「宮崎夫人」から無料で個人授業を受けることになったが（資料 7）、その様子を報じたのがこの記事だったのである。記事の論調からは、蒙疆政権下における「回教工作」の独善性を感じざるを得ないが、ラヴィレや父にとっては「新聞に載ることは特別で、特に外から来た人に対して大きな機会だった」と、誇るべき出来事として認識されている。ここでは「アカイ」と判断されたことへの不満よりも、記事を通じて思い出を強化させることが優先されている。このような態度は、ラヴィレが最も懐かしさを覚えるハルビンの家についても、同様である。

資料 6　『蒙疆新聞』（1940 年発行）
出典：ラヴィレ・イディルレル提供

【訳文】
＊： ホームシックというものがありますね、どこを一番恋しく思いますか、ハルビンですか、

カルガンですか、

Rİ：ハルビンがとても恋しいです。（(絵を指しながら)）この家は自分たちで作った家ですから。そのあと壊されました、日本人たちがそのあたりに空港を建設するためです。

＊：なんて無礼な、

Rİ：でも状況がそういう状況だったんでしょう。土地は中国人のものだけれど、日本が占領したので、日本が占領しましたよね、満洲を。当時、日本人はそこに空港をつくった。だからね。でも私たちにほかの場所を（新たな居住先として）提示してくれました。

（2015 年 10 月 14 日、トルコ語）

資料 7　カルガンでの「宮崎夫人」による個人授業

（1940 年）

出典：ラヴィレ・イディルレル提供

ラヴィレは「ハルビンの私たちの家 1933～1936」と題する自作の絵を枕もとに飾っている（資料 8）。しかし、その大切な家が占領者である日本の事情で取り壊されたことに対しては、無礼だと憤慨する筆者を制しながら、「状況」のせいだと批判を避ける。背景には、日本人である筆者への配慮とともに、戻れない、記憶の中にだけある「故郷」を守ろうとする意図があるのではないか。ラヴィレは、筆者が所有する彼女の自伝にカタカナでサインができるようにと練習し、「宝物」のひとつである日本製磁器のティーセットを用いてチャイと軽食を準備し、筆者の訪問と赤い小さながま口財布の贈り物を、涙ぐむほど喜んだ。ラヴィレはトルコ移住後、中国訪問の誘いを受けたこともあるが、記憶のままの姿を脳裏にとどめたいと、断っている。記憶の中にだけ存在する「故郷」の思い出を共有できる、日本人かつ歴史を勉強する者としての筆者が、「価値をわかる人」を求めるラヴィレにとって、ことのほか感謝されたのかもしれない。

ハルビンに特別な思いを寄せる彼女にとって、しかし「祖国」は3つあるという。

【訳文】

＊：ずいぶん後になってから、カザンやウファに行かれましたね。お母様やお父様にとって故郷ですが、あなたにとってはどんな場所ですか。

Rİ：とても美しく、きれいな場所です。［略］でも、そこ（ヴォルガ・ウラル地域）には行けません。ここ（トルコ）で退職して、ここに家がある。母の墓も父の墓もここにある。ここで年金をもらっているのに、あちらに行ってどうやって生活していくのか。そうでしょう？あちらに慣れることも（簡単ではない）。母も父も置いていくことになってしまう。彼らのお墓はここにある。あちらに行けば、安心できない。あり得ない。あちらで生活することはできない。尋ねに行くのはいいけれど、今はもはやそういう状態ではない。でなければ、あちらには知り合いがいる。

［略］

Rİ：彼女（タタルスタン共和国出身のタタール人の知人）も驚いていた。ここまで、75年経って、いろいろな場所をさまよって、自分のタタールの伝統をまったく失うことなく、言葉も失うことなく、タタール語だけで話すことができ、本当に、何一つ失わず、そしてトルコにも適応した。トルコでトルコ人のように生きています。私は行った場所のやり方で暮らします。まったくあれ（適応への忌避感）がありません。ふたつとも、もはやここも、トルコも私の祖国です。なぜなら70年間ここで暮らしています。祖国になった。でも生まれた場所としてハルビン。とても恋しいです。ロシアにも行って、タタルスタンに行けば、あちらにも親戚がいる。あちらでもうまくやれます。でもここで生きることを選びます。ここで死ぬことを選びます。なぜなら、母と父のお墓はここに。すべての観点から、ここでお金を稼ぎ、ここで学んだ。トルコに対して借りがあるように感じています。でしょう？トルコで、なんと言えばいいかしら、トルコ国民になったから、まるでトルコに借りがあるように感じるんです。借りがあるように、そうでしょう？満洲にも借りがある。そこで私たちに生活をさせてくれた。そうでしょう？いまトルコとして、［略］シリア人たちを受け入れた、彼らに手を差し伸べた。満洲も私たちに手を差し伸べてくれたから、あちらも私の祖国。つまり、3つ祖国があるということになりますね（笑）。

（2015年10月14日、トルコ語）

70年に渡って暮らすトルコにも恩があると語るラヴィレは、自伝でのトルコの描写にも、インタビューでの語り口にも、最大限の注意を払っているように感じられた。それは、国籍を与え、学びの場を提供し、社会的な上昇移動を可能にしてくれたトルコへの実際の感謝であると同時に、暮らしていく社会への配慮でもあるといえるだろう。流暢なトルコ語を話し、トルコで勤め上げ、両親の墓もトルコにある彼女にとって、ハルビンやカザンは、生活を送る場所とはなり得ない。しかし、帰属意識のうえで、それらはいずれも重要な地位を占めている。ハルビンは美しい記憶として、母の想いを継いで訪れたカザンはルーツとして、トルコとともに、3つの「祖国」を織りなすのである。

資料 8　「ハルビンの私たちの家 1933～1936」

出典：筆者撮影（2015 年 10 月 14 日）

本章でみてきたように、朝鮮半島では朝鮮戦争という移動せざるを得ない状況があった。中国大陸でも、本節で扱ったラヴィレが 1940 年に移住した直接のきっかけではなかったが、第二次世界大戦後の国共内戦と中国共産党の勝利が、サディエ・キリシュやラウフ・キリシュ（1 章 2 節）のようなタタール移民の移住を引き起こした。翻って日本では、ほかの 2 地域ほどの切迫した事態があったわけではない。日本の敗戦による社会全体の疲弊はある。しかしながら、主たる移住は日本経済が戦後復興に向かいだした 1950 年以降に集中しており、経済状況の悪さだけが大量離日を生み出したとは言えない。それでは何が彼らを新たな地へと向かわせ、どのような帰属意識を抱いたのだろう。

4 章　日本生まれタタール移民 2 世の語り

4-1　「日本で習ったことをトルコで使って、発展しました」—ラヴィル・アギシ

ラヴィル・アギシは、1931 年東京生まれの男性である[42]。1954 年、22〜23 歳でトルコへ移住した。移動は別々だったが、最終的に家族全員が離日している。ラヴィルとは留学開始後 1 カ月で知り合い、以後帰国に至るまで、筆者がアンカラを訪れる度にともに時間を過ごした。東京に暮らしたタタール移民の名前や家族関係を詳細に記憶しており、戦前の写真に登場する人びとのリスト作りにあたっては、膨大な量の情報提供を受けた。学術的な催しものに積極的に参加し、2014 年にアンカラで開かれた中東研究世界大会で筆者が発表を行った際には、都合がつかなかった本人の代わりに孫を参加させるなど、タタール移民の歴史に高い関心をもっていた。2 章で言及したように、トルコ人研究者にも知られた存在である［Dündar 2014］。録音を伴うインタビューは、2011 年 11 月 13 日（80 歳）、14 日、16 日、2012 年 12 月 19 日、20 日（81 歳）、2013 年 2 月 11 日（81 歳）に、アンカラのラヴィルの自宅やカフェで実施した。

ラヴィルがトルコ移住の理由を語る際、まず呼び起こされるのが、日本でのネガティブな経験である。

【原文】

＊：どうして、そのートルコに行くことにしたんですか。

RA：もう日本でも、将来どうなるのかっていうことを、みかた（展望）がなかったからね。//＊：はああ//今まで、まあよかったけど、ま、戦争中でも戦争前でもちょっと苦労したからね。//＊：はい//うん。苦労したし、それから、あのー（・・・）まあ日本の人たちに、近所はみんなよかった、友だちと一緒に、そんな悪いってことは全然しなかった、まあときどき、あのあれですよ、外へ出るとね、ちょっとよそのとこ行くと、「あー外人外人」って。外人っての見てなかったでしょ。

＊：あの時は、慣れてなかったですもんね。

RA：慣れてなかったからね。まあ外人、みんな集まってくる、なんか動物を見に来たように。はっはっはっはっは。わかるでしょ、そういう気持ち。

＊：はい、トルコに来たら、すごくよくわかる（笑）。

RA：そう、みな同じことになるんです。

＊：中国人？日本人？中国人？日本人？

RA：日本人。はいこれ、みんなくる。

＊：はい、遠いところからも、ヘイ・日本人！って。

RA：みな同じだ、同じもんなんですよ、うん。まあその時代はもう、こういう色のしてる人は敵ですからね。

［略］

RA：戦争中、はい。そう。それから、こういう風にやられる。はっはっはっ。//＊：おお//ああ、「鼻たか鼻たか」ってこういう風に（笑）。

---

[42] ラヴィル・アギシは拙稿［沼田 2019］において、アザットという仮名で取り上げた人物である。彼の詳細な生活史は、同論文を参照されたい。本節は、同論文の内容にもとづきながら、修正を加えたものである。

＊：ああ。
（(ラヴィルは苦笑している)）
＊：ちょっと暮らすときにそれは、
RA：つまりね、悪くなかった。まあトルコへ帰りたい。もう戻ろうと。あすこで新しくまた生活する、//＊：生活しようと//まあトルコへ来てもよかった。こういう幸運があった。
＊：そうですね。
RA：ええ。こんなに幸運があった。これはもう、うん、こんな、お、奥さんもうほんとに神様からプレゼントですよ。で、同じ国の同じ（民族）の人ですからね。//＊：ええ//ここで生まれて。じいさんばあさんがよそから来て。//＊：ええ//同じ言葉、同じめし、同じあのー、//＊：ええ、エスキシェヒル。//これはもう、エスキシェヒルから。これはほんともう神様のあれですよ、お土産ですな。
＊：そうですね。//RA：ええ//すごくいろんなことが重なって、結果、//RA：ええ//こうですもんねえ。わーなるほど。
RA：つまりね、別に、良かった悪かったって、そういうあれなかったんだよ。日本に住んだときは本当によかったです。本当に日本のみなさんにいつでも感謝しております。ずいぶんもう、勉強になりましたからね。え、まあ、もう生活の、そのもとは、日本で習ったものを、（日本で習ったもの）で、//＊：トルコ、//トルコから始めたんですからね。もうほんと日本に対してもう、いつでもお祈りするときに感謝しております。//＊：なるほど//わかりました？こういう、//＊：わかりました//意味です。もっと意味出すあれがちょっとないけどね。
（2011 年 11 月 14 日、下線部はトルコ語）

なぜトルコへ移住したか尋ねた筆者に対し、まず日本での将来の不透明性が指摘された。次いで、外国人を見慣れていなかった戦前の日本社会で「動物を見に来たように」注目された気持ちを、同じく外国人としてトルコに滞在する筆者も理解できるだろうと、共感を促している。2010 年代前半のトルコ社会において東アジア的な顔立ちは目立つ存在であり、道を歩けば注目されることも少なくなく、筆者は同意している。ラヴィルはまた、戦時中に敵として扱われた経験を語っている。ここで注目すべきは、「テュルク・ムスリムの国トルコ」というモデル・ストーリーではなく、まず日本での不安や苦労が語られている点である。また食料不足や困窮、空襲のような戦時中の苦労もインタビューでは語られたが、ここではより「外人」へのまなざしという、精神的な苦痛が語られている。そのあと改めて、日本での暮らしが悪かったのではなく、トルコに帰りたいという気持ちから移住したこと、移住後にエスキシェヒル生まれのタタール人と結婚した幸運に対する感謝へと、肯定的な意味付けがなされる。実際には出身国でもなく、訪れたこともないトルコに対する「帰りたい。もう戻ろう」という表現は、モデル・ストーリーに通じる語りと解釈できるだろう。その後、善悪の判断を避け、日本で学んだことはトルコで暮らしていく基盤となったと感謝し、移住の語りが日本や日本人に対する否定的な評価と解釈されないよう、配慮している。

「外人」への視線は離日を決意させ、インタビュー時にもラヴィルの記憶に残っていた。同時に、当時の日本社会において目立つ容姿という属性に伴うのは、否定的な経験だけではなかった。ラヴィルの母は、大日本国防婦人会の一員として、千人針や慰問袋の作成に携わった。戦時色が

濃くなる中、タタール移民は「日本への協力や忠誠を示す必要に迫られて」［松長 2009：57］おり、その一環としての行為だったと考えられる。11 歳前後のラヴィルは母に連れられ、新宿駅の前で千人針への協力を呼び掛ける。すると「あれっ、外人のひと襷つけて、これ面白いな。これ誰だ、じゃあやろう」と、多くの人が集まったという。また、出兵する近所の若者を「露営の歌」で送り出すなど、日本人児童とも共通する銃後を経験していた。このような行為自体が、タタール移民が戦時下で置かれた微妙な立場を示しているが、1940 年代初頭には、「外人のひと」への興味から千人針に協力することはあっても、排外的な態度が取られることはなかったようである。しかし、1941 年 12 月の太平洋戦争開戦とともに始まった「日本国内に在留する連合国側の外国人」、すなわち「敵国人」の抑留は［小宮 2009：9-10］、徐々にその対象範囲を広げていく。1944 年になると東条英機内閣は、「『非敵性外国人』もすべて一定地域に住まわせる措置をとり、軽井沢や箱根の強羅に強制収容し」た［内海 2001：6-7］。こうした流れのなかで、西洋的な外見上の特徴[43]をもつタタール移民に対しても、差別や懐疑を含んだ視線が向けられるようになり、最終的には軽井沢へと強制疎開の措置が取られた。ラヴィル一家も軽井沢に移り、終戦まで自由な移動を禁じられた。

【訳文】

＊：では東京へ、つまり軽井沢にいる間に、一度でも東京に戻り、//RA：来られませんでした。//来られなかったのですね。

RA：なぜかと言うと、もはや戦時中だ、もはやその時は大変にあれでした、日本政府はもはや、それ以前にもそうでしたが、外人と話すことは禁止。//＊：ああ（・・・）//うん。もはや、私たちは外人です。近所の人たちなんかは、怖がったもので、私たちと話しませんでしたよ。//＊：ああ（・・・）//うん。その時はもう、それのせいで、私たちは子どもだったでしょ、もう「スパイ、スパイ！」と（日本人の子どもたちに）言われたものでした。ははははは（笑）。ええ。

＊：でも十分に、そもそも知り合いだったのでは？

RA：知り合いでしたよ。

＊：同じ場所に暮らしたんですよね。

RA：暮らしましたよ、だけど、//＊：そうだったら、// そうだったとしても、怖がっていた、うん。もう外に出たときには「あ、スパイの子、スパイの子」とかなんとかね。なぜかと言えば、もうプロパガンダ、写真とか、それからはもう、「外国人と話してはならない」と。

＊：ああ、日本政府がそう言っていたのですね。

RA：ええ、ええ、そういうこと。それから、わたし覚えています。軽井沢に時々、完全に移る前に、荷物があったので、子どものなかで年長者の私がしょっちゅう軽井沢へ行って、荷物を運んでいました。初めて軽井沢へ行ったとき、一人きりで行って、荷物を置いて、さあ軽井沢の駅に降りた。目的の場所にはどこから行ったらよいか、一人の日本人の若者に

---

43 福田は、「タタール人がその外見から『西洋人』やロシア人と混同された例は珍しくない」［福田 2017b：2］と指摘している。OM（3 章 2 節）は、「西洋人は禁止だ」と京城の日本人学校への入学を断られ、ダイヤン・サファ（4 章 2 節）は「（戦時中）もうどこ行っても外人と言うとやっぱり皆アメリカ人だと思われちゃうんだよね」と、「外人＝アメリカ人」とみなされることで、常に困難に晒されたことを語った。

聞いたんです。「すいません、僕どこそこに行くんです。」「どこ行きます、道はどっちですか」ったら、彼は教えてくれて、だけどすぐに警官がやってきて、彼を連れて行って、捕まえた。「一体どうやって話してるんだ！」などと言っていた。「外人の話、するのか。お前何をする！」って（・・・）

＊：ただ道を教えてくれただけなのに。

RA：ええ、ええ。それほど厳しいものだったんです。そういう出来事も、経験しました。道を聞いたことを、悲しく思いました。

ラヴィルの妻：ああ（・・）

RA：つまりは、禁止だった。その通り。戦時にはどの国でもやりますよ、うん、それはつまり、日本だけの問題ではない、すべての世界で、もはやそういうこと。

＊：はい、どの場所でも起こっていますね、ええ（・・）

RA：そういうことです。

（2011 年 11 月 13 日、トルコ語、下線部は日本語、ラヴィルの妻を交えた茶の席にて[44]）

それまで近所付き合いをしていた人びとから恐れられ、子どもたちからは「スパイ」と呼ばれる経験は、10 代前半の少年であったラヴィルを深く傷つけただろう。日本で生まれ育った 2 世は、タタール移民のコミュニティに閉じこもるのではなく、日本語を流暢に話し、国民学校に通うなど日本社会との関わりを持って生きてきた。それでも、子どもである 2 世すら、「外人」として厳しい視線にさらされたのである。戦中日本でスパイであるかのような扱いを受けた語りは、ほかにも存在する。デュンダルは、「大戦中に日本の中等学校に在籍していた金髪で碧い目のトルコ・タタール人が筆者に語った想い出を引用して」いる。それによれば、「ある日、クラスの教員が『外国人に注意せよ』と言って、指でこのトルコ・タタール人生徒の座っている席をさした。生徒は外国人とはだれかと思って振り向くが、指されたのは自分だとわかると、日本ではやはり外国人なのだと気づく」のである。彼は、「『それでも私は夢も日本語で見ていたのだ』と語った」のだった［デュンダル 2012：224］。「近所の人たち」や「クラスの教員」という直接の知人から差別を受ける一方、軽井沢で道案内をしてくれたのは、通りがかりの日本人の若者であった。そしてラヴィルは、「外人」である彼と話したゆえに若者が警官から咎められたことに対して、心を痛めている。同時にここでも、戦時下で外国人との接触を禁じたのは日本に限らないと一般化することで、日本への評価をやわらげるよう留意する。

ここまで見てきた苦労は、ラヴィルにとって忘れられない経験である。しかしながら彼にとって、東京は生まれ育った場所であり、特にラヴィル一家を含みタタール移民の集住地であった渋谷の代々木上原駅近辺は、郷愁を呼び起こす原風景ともなっている。1930～40 年代初頭の思い出に言及する際、駅を基点とした位置関係を踏まえて、寺や酒屋、小川など当時の生活圏が詳細に語られた。また、大八車を引いて近所に野菜を売りに来ていた八百屋が、買い物に来るタタール移民の女性たちと顔なじみになるなかで、いくつかのタタール語の単語を覚えた様子など、日常生活における日本人との交流がラヴィルの記憶に残っている。また、「日本の国民学校ではじめ

[44] ラヴィルの自宅を訪問した際は必ず、インタビューの合間に「じゃあひとつお茶にしましょう」と筆者に茶菓子と紅茶を勧め、ラヴィルの妻を交えて休憩を兼ねつつ、話をしたものだった。トルコ生まれの妻は日本語を解さないため、ラヴィルは筆者に対して日本語で話したあと妻にトルコ語で説明するか、トルコ語中心の会話がなされた。

て、暗算で、ににんがし、にさんがろく」と掛け算を覚えた彼は、トルコ移住から60年が経っても計算は日本語で行うという。ラヴィルが日本で生きた 20 年あまりの期間には、第二次世界大戦が暗い影を落としている。しかし、そうした経験を経ても、日本での経験の全てが否定されたわけではない。むしろ東京での暮らしにもとづく日本への郷愁は、アンカラの路上で「露営の歌」を口ずさんだり、日本語で計算するなど、インタビュー当時もラヴィルとともにあった。

日本で生まれ育った 2 世の場合、朝鮮戦争が起こり、トルコ国籍が付与される 1950 年代になるまで、トルコという国を認識することがほとんどなかった者も存在する。そのなかで、ラヴィルは 1930 年代という早い段階からトルコを意識していた。ラヴィルの両親は、イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会の集会所を住み込みで管理していたことがあり、ラヴィル自身も協会付属の学校に通った。トルコ国籍取得を訴えかけていたイスハキーの影響力を考えれば、ラヴィルを囲んだ環境が「トルコ寄り」だったことがうかがえる。また、トルコ共和国初代大統領ケマル・アタテュルクの 1938 年の逝去は、東京にいるラヴィルがトルコを意識した出来事のひとつである。ラヴィルの手元には、逝去の数日後にアタテュルクを偲ぶためにつどい、イデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会付属の学校の前で撮影した集合写真のコピーが残されている。写真に登場する同協会のメンバーには、ラヴィルと両親、弟も含まれている。

さらに、ラヴィル一家とトルコの結びつきを強めたのが、ラヴィルの兄である。ラヴィルの父親の最初の結婚から生まれた 11 歳年上の兄は、エジプトのアズハルへ留学したタタール移民の子弟のひとりだった。極東各地に増加したタタール移民の需要に応じるため、またムスリムの利用をもくろむ日本政府の思惑から、10 名ほどの子どもたちは、エジプトのアズハルへと送られた。イマーム（指導者）になるための教育を受けるはずだったが、エジプトの生活条件の悪さや、それまでに学んだ宗教とは異なる内容に適応できず、1938 年トルコへと逃げ出した。トルコ軍に入隊したラヴィルの兄は、朝鮮戦争に参加した際に休暇で東京を訪れるまで、家族と再会することはなかった。手紙のやりとりも、第二次世界大戦が始まると途絶えてしまったという。トルコにいる兄の存在は、父をはじめとする家族の面々に、トルコを意識させる重要な一要素になっただろう。

以上のように、1930 年代後半から 1940 年代初頭の東京で 10 歳前後のラヴィルが触れたのは、実体のあるトルコ人やトルコの地を介さない、想像のトルコである。1950 年に朝鮮戦争が勃発すると、その状況は一転する。東京は朝鮮半島に派遣された兵士たちが治療を受け、休暇を過ごす場所であり、トルコ共和国のトルコ人と在京タタール移民が、初めて現実の接触を持つことになった。聖路加国際病院等への見舞いをはじめとするタタール移民の支援活動は指摘されてきたが［松長 2009：58-59；三沢 2016：347］、休暇を過ごすトルコ軍兵士を相手とする土産物の販売は、多少なりともトルコ語の知識をもつタタール移民にとって、実入りの良い商売ともなった。トルコ軍兵士とコミュニケーションを取るにはトルコ語が欠かせず、日本人商人とタタール移民は協働した。ラヴィルと両親の場合は、「発音がちょっと違う」が「とても言葉が近い」トルコ語は、「2，3 か月ちょっとトルコの人と話せば」適応できるものだった。

さらに、ラヴィルの兄と一家の再会が実現したのも、この時期だった。一家が自宅にいたところ、髭を生やし、すっかりトルコ軍人の風貌となった兄が突如現れ、その驚きは大変なものだった。再会を果たした兄は家族と過ごすために任期を延長し、2 年滞在した。その間に、一家がトルコへ移住することが、具体的に話し合われた。1953 年には在日タタール移民に対してトルコ国籍が付与され、ラヴィル一家の移住は、いよいよ現実のものとなる。

ラヴィルはトルコに「行く」のではなく、「帰る」と表現する。しかしながら、ラヴィルにとってそこは新たな環境である。さらに兄は、一家がトルコに移住することに対し、消極的だった。ラヴィル一家をはじめとするタタール移民が移住した 1950 年代のトルコは、政治・経済・社会のいずれもが変化の過程にあった。そうした現実を知る兄は、一家の移住後の生活に不安を抱いたのである。

【原文】

RA : で、トルコへ来たときに、まあ兄貴は、トルコはまだ発展してないところで、もう新しく自分の力で、発展しようという時代でしょ。だからトルコ来て何やるかと心配したわけなんだ。//＊：あー//だけど僕は働いたからね。//＊：はい//うん。

＊：ええ。車の、

RA : 車の。自動車修理で有名になったんですよ。アンカラは、わたくしは色々な、にほん、にっぽん大使館の自動車も修理しましたから。

＊：はっ、そうですか！// RA：ええ、ええ//わあ、すごい。

RA : 一時期立派なガレージもってましたよ、あんまり大きくないけどね。

［略］

RA: 日本から来たトルコの時代はまだ発展してなかったからね。そういう（アメリカへ行った）人たち、ちょっとどうなるのかなあ、生活はっつって怖がったから。アメリカは金持ち、いつでも仕事がある国だから、じゃそういう（ロシア生まれの）父、母のチャンスがあるときに使おうっつって、行ったんでしょうね。

＊：なるほど。トルコには来てみたけれど、なんというか将来がわからない。

RA : うん。と思ったんでしょうね。//＊：ええ//そうでしょう。

＊: ラヴィルさんは来たときどう思われましたか。トルコ、初めて見たんですよね、そのとき。

RA : 見たけども、これはもう普通だと。ま知ってきたから。いつでも聞いてたから、どうだったトルコが、何があって何があって何があってとか。

＊：それはお兄様に聞いてた？

RA : お兄様に聞いて。読んだり。色々な兵隊さんがいましたね、その戦争、朝鮮戦争。その人たちにも聞いたりなんかして。//＊：ええ//一か八かと、じゃあ行こうと。うん。

（2011 年 11 月 14 日、下線部はトルコ語）

ラヴィルはトルコ到着直後から、日本とトルコのギャップを積極的に受け止めた。「だけど僕は働いたからね」と語ったラヴィルの静かな口調には、兄の心配に反して立派に生活を築いたことへの自負が含まれていると、インタビュー当時の筆者には感じられた。実際のところ多くのタタール移民にとって、兄の心配は杞憂ではなかった。2 章 2 節で言及したように、「テュルク・ムスリムの国トルコ」への親近性からトルコに行くも、抱いていたイメージやそれまでの生活条件と、「まだ発展してない」トルコでの実際の暮らしとのギャップから、トルコ社会に適応できなかった親の姿や、2 世自身がそもそもトルコ移住に消極的だったこと、到着後の戸惑いが語られることは、少なくない。しかし、ラヴィルはアメリカ移住者と自身を対比させて語り、アメリカ移住が彼の選択肢になく、トルコでの不透明な将来を「怖がっ」て移住を求めた人びとをあくまで他者として捉えていることがわかる。そして、当時のアメリカの移民制度上、ロシア生まれの者は

移民の受入定員に入りやすかったため、その機会を利用できるうちに移住していったのだろうと客観的に解釈している。ラヴィル自身は、トルコを見るのは初めてだったとしても、あらかじめ兄やトルコ軍兵士、本を通じて知識を得ていたため、「これはもう普通だと」驚きはなく、日本で習得した自動車修理の技術こそが、移住後の生活を支えたという。横浜のセント・ジョセフ・カレッジに通い、英語能力も身に着けていたラヴィルは、イギリス人工場長の代わりとして抜擢され、安定した生活を築いていった。

一連の語りからは、トルコ移住前に、より現実に近い情報を得、また移住後に活用できる技能と言語能力を日本で獲得していたことで、日本とトルコの間に横たわるギャップがラヴィルにとって大きな問題にならなかったと彼自身が解釈していることがわかる。留意すべきは、ラヴィルが、このような勤勉さや移住後の就業における成功を、彼自身だけが成し遂げたと話しているのではないことである。タタール移民全体の職獲得に関する語りをみてみよう。

【訳文】

RA : アメリカ人兵士たちにはお金があって、トルコの地元のひとたちのほとんどはまだ英語を知らなかった。私たち、あちら（極東）から来た人たちの多くは、英語を知っていました。

［略］

RA : （雇用主はタタール移民を）すぐに採用しました、すぐに。航空会社がたくさん作られて、弟はイスタンブルを離れてアンカラに越してきて、航空会社に就職しました。［略］（私たちタタール移民は仕事の内容を）すぐに覚えていました。あれがあるんです。何かと言えば、私たちのおじいさんたちは、みんな商売をやった人。だから私たちの精神には、商売の素質があるんですね、交渉とか。それから、「8 時になったから、もう仕事はおしまい」ではない。「そろそろ終わるな」と（仕事を整理して）、それから帰宅する。だから仕事を与えた人たち、雇い主も、私たちのことを気に入っていました。//＊：ふーむ、働き者//働いた（・・・）そう、そうです。私たちは、そういうこと（楽をすること）を気にしません。つまりね、私にある仕事を与えたら、「おお、もう 5 時になった。じゃあ帰ろうと」じゃない。「これを一応まとめて、掃除して」、うん。

（2011 年 11 月 16 日、トルコ語、下線部は日本語）

1950 年代のトルコで、タタール移民 2 世は商人になるよりも、英語能力が求められる外資系の航空会社やホテルなどで働いた。しかしラヴィルは、言語能力や商売のセンス、勤勉さは、商人として活躍した先祖から受け継がれるタタール移民全体に見られる美点であり、トルコ移住後に職を得る際の強みとなったと評価しているのである。ラヴィルにとっては自動車修理技術と英語能力こそが、アンカラでの安定した暮らしをもたらし、彼はついに 60 年近くを生きる安住の地を得ることになった。

こうした経験を経て、移住後 60 年が経ったインタビューの場でラヴィルがまず発したのは、日本への感謝であった。ここで、ラヴィルとの初回のインタビューを振り返りたい。2011 年 11 月 12 日、イスタンブルからやってきた筆者の研究に役立つようにと、ラヴィルはアンカラ市内の本屋や古本街、図書館で行われていた展示会を紹介してくれた。その際に筆者の博士論文のテーマや、ラヴィルの生活史を教えてほしい旨を改めて伝え、翌 13 日、録音の許可を得て初回のインタビューを実施した。以下は、レコーダーの電源を初めて押した直後の会話である。

【原文】

＊：昨日話してたのは、あの最初、お父さんのお父さん（祖父）の世代からどんなふうにいらしたかっていうのを、説明しましょうって、

RA：説明する前に、私あの日本の皆さんに感謝したい。私たちが日本で住んでいたときに日本の国、政府ね、日本の皆さん、私たちに対してとても優しく、心にとても近くみて、住むことを、楽に住んでいました。そのために日本のみなさんに、感謝してます。日本政府にも、その日本の偉い人たちにも、みんな感謝して、ありがとうございます。いろいろ、その時、住んでた時にも、いろいろに勉強になりまして、いろいろなことを習いまして、それでもってトルコへ来て、それを使って発展しました。そのために、日本の皆様にありがとうございます。

（2011 年 11 月 13 日）

前日の会話から聞き取りの目的は把握しているものと、すぐにラヴィルの生活史を聞こうとする筆者を制し、彼がまず語ったのは、日本への感謝であった。改まった語り口に戸惑いを覚えた筆者は当初、戦中という難しい時代を、民族の異なる異国の地で、無国籍者として生き抜かなければならなかったタタール移民たちの微妙な立場が、ホスト社会に対する建前上の謝意の表明を強いたのかと、うがった見方をしたものだった。しかしそれでは、ラヴィルの代々木上原駅周辺への郷愁や、日本語の保持を否定することになってしまう。

トルコ社会への適応に関する彼の語りには、日本での経験が深く組み込まれている。日本で生まれ育つなかで得たものは、ラヴィルのトルコ移住後の適応を促進する役割を果たした。トルコ社会への適応を語る際に参照されるのは、兄やトルコ軍兵士、本を通じて得たトルコに関する具体的な前知識、自動車修理の技術、英語能力である。「いろいろなことを習いまして、それでもってトルコへ来て、それを使って発展しました」という語りは、移住後の生活を支えたものとして繰り返し言及する自動車修理工としての自負を基盤にした、80 代を迎えたラヴィルの人生を肯定する語りだと受け止めるべきだろう。また、こうした具体的な能力の獲得につながる経験に留まらず、駅や八百屋、力士等にまつわる思い出は、生まれ故郷の東京から、移住当時 27 日間の航海を要するほどの距離を経たトルコにおいて、懐かしさという拠りどころを与える機能を果たしている。

同時に、日本におけるネガティブな経験も、強いインパクトを持って語られる。特に、「外人」に投げかけられるまなざしや、戦時下で受けた「スパイ」であるかのような扱いは、トルコ移住の理由として、トルコに対する想いよりも先に語られたほどだった。ラヴィルはこうした経験を隠したり、忘れようとすることなく、明示する。しかし、類似の否定的な出来事は戦時という特殊な状況において起こりうることであり、日本や日本人に特有の欠点ではないと評価をやわらげてもいる。こうした一般化は、日本人の筆者や、いずれラヴィルの語りを読むだろう読者への配慮であるとともに、弱い被害者としてのレッテルを避けるため[45]、あるいは彼自身の生まれ故郷

[45] ナイジェリアの歴史や悲劇から影響を受けた作品で知られる、小説家のチママンダ・アディーチェの主張は、戦時体験を語りながら、日本への謝意も表明するというラヴィルの語りを理解するうえで、示唆的である。彼女は、「否定的な物語のみを強調することは、私の経験を打ちひしぎ、私を形づくるほかの多くの物語を見過ごすことである。シングル・ストーリーはステレオ

の思い出を守るための行為かもしれない。かくして、郷愁、感謝、辛苦という異なる感情を呼び起こす日本での生活経験は、移住をめぐるラヴィルのストーリーに共存し、移住を決断させ、適応を促進し、人生の肯定へと帰結する役割を担っているのである。

20 代になるまで東京で暮らしたラヴィルは、具体的で多様な経験に基づき、帰属意識を形成している。それでは同じく 20 代前半でトルコに移住し、トルコでの経験を評価しつつも、その後アメリカへと再移住したダイヤン・サファは、どのような場所を「故郷」と考えるのだろうか。次節でみていこう。

4-2 「総合的に言って、我々はインターナショナル」—ダイヤン・サファ

ダイヤン・サファは、1934 年東京生まれの男性である。1956 年 21 歳のとき、トルコへ単身移住し、1967 年 32 歳のとき、米在住タタール移民であるルキヤ・サファとの結婚を機に、アメリカへと再移住した。ルキヤは 1945 年、終戦の 3 日前に神戸で誕生し、異人館のひとつであり、現在は「ベンの家」として公開されている住居で育った。1964 年、インターナショナル・スクール卒業後にサンフランシスコ・ベイエリアへ移住し、1966 年、日本航空に就職した。ダイヤンは 1978 年から、サンフランシスコ・ベイエリアに暮らすタタール移民の協会であるアメリカン・トルコ・タタール・アソシエーション（ATTA）でイマームの補助や葬儀などを担い、1994 年には公式に同協会のイマームとなった。ルキヤもまた、同協会の行事の際には委員となり、料理の腕を振るうなど、中心的な役割を果たしている。

筆者は修士論文執筆時に、ダイヤンの弟で東京在住のラマザン・サファの協力を得、トルコ留学にあたってサファ夫妻を紹介してもらった。そのため留学開始後、最初にインタビューを実施したのが夫妻であり、2019 年現在もメールや電話でやりとりを続けている。彼らは素晴らしいフットワークの持ち主で、タタルスタン共和国やバシコルトスタン共和国、トルコ、日本のようなゆかりの地にとどまらず、世界各地を訪れている。米在住にもかかわらず、初回のインタビューをアタテュルク空港のカフェで実施したのも、トルコを訪問していた夫妻が、イスタンブルでの生活を始めたばかりだった筆者のため、帰国便搭乗直前にインタビューの時間を設けてくれたからである。サンフランシスコ・ベイエリアを訪れた際は、夫妻や夫妻の娘の自宅に滞在し、ルキヤ特製のすき焼きやペレメチを馳走になり、インタビューは時に深夜まで及んだ。

録音を伴うインタビューは、2011 年 10 月 6 日にアタテュルク空港（ダイヤン 76 歳、ルキヤ 66 歳）、2012 年 4 月 30 日、5 月 1 日、2 日、6 日（ダイヤン 77 歳、ルキヤ 66 歳）にサンフランシスコ・ベイエリアのサファ夫妻の自宅、2017 年 10 月 3 日（ダイヤン 82 歳）に羽田空港で行った。また 2012 年の滞米中には夫妻の紹介によって、彼らの古くからの友人にもインタビューを実施することができた。場所は各自の自宅で、夫妻も同席しインタビューに参加した。実施日、語り手、同席者は、2012 年 4 月 30 日（ラビヤ・アクチュリン、ルキヤ同席）、2012 年 5 月 3 日（イブラヒム・フェイズッラーオウル、夫妻同席）、2012 年 5 月 3 日（エディハム・キルキー、夫妻同席）である。トランスクリプション中の DS はダイヤン、RS はルキヤを指す。

ダイヤンは、タタール移民全体と彼自身の移住理由を区別し、次のように語る。

タイプを生み出す。ステレオタイプの問題は、それが真実でないということではなく、不完全だということである。ステレオタイプは、ある物語を、唯一の物語にしてしまうのだ」と、唯一の物語にとらわれ、「人間の尊厳を奪う」ことに警鐘を鳴らす［Adichie 2009］。

【原文】

＊：アメリカかトルコか、二択だったんですかね。日本から出るとすると。

DS：hmhm.結局トルコってことはやっぱり宗教的にイスラムだから。//＊：ええ//イスラムの国に。

RS：で言葉もおんなし、kind of ね。

DS：イスラムの国に行こうって人は多かった、

RS：多かったのよ。

＊：国籍もトルコ国籍と。

RS：そう。

DS：Yeah.だからそういう理由で、トルコ行こうっつって。

RS：でアメリカに最初行った人は、日本から少なかったのよね。

DS：アメリカ人と結婚した人が多くて、

［略］

DS：俺の場合は（トルコ）国籍をとったんで、じゃあトルコ人になった以上は男の人は軍隊があるんだよってことを、知らされて。それでうちの親父やなんかが、大使館に呼ばれて、［略］うちの親父は宗教的に（東京回教礼拝堂の役目を）やってたんで。で「あんたの場合は、男の子どもがね、たくさんいるんで、もう歳、軍隊に近いことになってるから、軍隊やんなきゃいけないんだよ」ってことを言われたときに、親父が、俺に「お前行くか」っていうことなって。で俺も、「いやあ、行っても構わない」っていうんで、そういう理由でトルコへ来たんだよ。

（2011 年 10 月 6 日）

ダイヤンもルキヤも、タタール移民の大部分がアメリカではなく、まずはトルコに行ったのは、「イスラムの国」への志向と言語の類似性によるものと考え、まさしくモデル・ストーリーに沿うような語りがなされた。そのうえでダイヤンは、「俺の場合は」と、自身の異なる状況を説明する。当時日本で暮らすダイヤンにとって、兵役は必須ではなかった。しかし、東京回教礼拝堂のムアッジンを務め、のちにイマームとなる父のガイナン・サファが、トルコ大使館を訪れた際に兵役の存在を耳にし、父自身もロシアでの軍隊経験をもつことから、息子の一人に兵役を務めさせることにしたのである。

【原文】

＊：ダイヤン・アービイ[46]の場合は、もう完全にお父さんが、兵役に、asker（トルコ語で兵役の意）に行ってこいっていうことでトルコに？

DS：そうそう、それが、それがあって。asker へ行かなかったら、男の人は男にならないって。

＊：って、お父さんが？

DS：親父が。自分が行ったから。はっはっはっはっは（笑）！それで自分が行かなければ、今

[46] タタール語では親しみを込め、年上の男性にはアービイ（お兄さん）、女性にはアパ（お姉さん）との呼称を用いる。

でもまだその田舎（ロシアの出身地）に残ってたわけだから。
（2017 年 10 月 3 日）

ダイヤンが知るところによれば、父は 18 歳のとき第一次世界大戦に徴用され、ロシア革命とその後の混乱により故郷に戻れなくなった。共産党の捕虜となった父は、シベリアに向かっている途中に旧満洲へと逃れ、その後日本へ移ったのである（2011 年 10 月 6 日、2012 年 5 月 2 日）。この経験は父にとって忌むべきものではなく、出生地の「田舎」を離れて成長する機会となり、だからこそ息子をトルコに送る決意をしたのだと、ダイヤンは語っている。父は兄弟のなかでもダイヤンを適任とした。東京回教礼拝堂での仕事に責任感をもつ父をはじめ、家族の他のメンバーは日本に留まったため、ダイヤンは唯一のトルコ移住者となった。ダイヤンが乗船したのは、1 章 2 節で言及したトルコの大型タンカーバトゥマンである。乗船にあたっては 1 万 8 千円を払ったものの、船内で働きながら 51 日の船旅を終え、1956 年、イスタンブルに到着した。

さて、アタテュルク空港での初回のインタビュー時、筆者には語り手に対しモデル・ストーリーを求める「構え」があった。それから 6 年後、自身の構えに気づき、語りにおけるモデル・ストーリーとの距離感を意識するようになった筆者は、改めてトルコ移住について「憧れ」という表現を用いながら、ダイヤンに尋ねた。

【原文】

＊：やーなんか、よく、そのみんなタタールだから、トルコはおんなじだから、みんなトルコに憧れて行ったみたいに言う人が多い。

DS：トルコだけが accept したんだよ。

＊：トルコだけが、accept したから//DS：だからトルコへ行こう//別にトルコに憧れてたっていうこと、

DS：あー、んてことないよ。そんなことない。ただし Turkic っていうこと、あれがあったんで、それで、タタール語と近い言葉だっていうことを誰かが、あれしたんでしょうね（タタール移民たちに伝えた）、たぶん。//＊：うーん。//そいで、えー、一回申し込んだだけで、トルコの方で「いいでしょう、いらっしゃい」と、いう形になったんで、えー、トルコでは昔の、あのーアタテュルクね、アタテュルク、あとイスメット・イノニュとかなんかってのはね、そういうイミグラントして来る人を嫌いなんだよね。

＊：ああ、ああ、ああ。

DS：嫌ってたんだよ。だからそんときに（トルコに）入った連中は、税関でものすごく苦労して//＊：まあ（(ひどいですねというニュアンス)）//うん、それで税関では自分で持ってきたものを、通さない。1 年も、1 年半も税関に。//＊：まあ//それで、もういいでしょう、じゃあっていったときにはもう、もってきたものみずびたしで濡れたとか、もう//＊：ひどい//そういう、あー経験があったの。そのあとに、アドナン・メンデレスが来てから、今度 modernize だ、トルコは。そのあとトルコっていうのは、少しアラビアの国よりか少し上、あがってね。//＊：んー（(同意)）//で、その前はやっぱりトルコはだめだったんだよ。俺たちが出た、行った時、56 年の時は、まだまだあんまりよくなかった。

＊：うん、うん、うん、うん。

DS：そのあとね、アメリカが入ってきたり//＊：そうですよね//まあ（すでに）アメリカ入って

たけど、もっと軍隊をもっと（ネイト？）でいっぱい、そん時に今度もう俺たちみたいなのが、仕事たくさんあって、でトルコ人のほとんどが英語知らないでしょ。だから、プライオリティでタタールの連中はみんないいところへ仕事入れるんだ。

＊：その軍隊の関係の？

DS：軍隊とか、oil、oil company とか色々

＊：oil company、ああ、もうアメリカ、

DS：モビルとか、（エスト？）とか色々ね//＊：エスト？//（エスト？）、うん。みんな良い、良い立場に。それで、俺たちが、若い連中が来ると、「ああ、ここにも仕事ある、ここにも仕事ある」って、みんな呼ばれたりとかしてね。

＊：うん、うん、うん、うん。

DS：だから、そういう意味では、あのー、トルコは、タタールの人たちには、良かった。こういうことなんだよ。だから憧れて行ったわけじゃない。//＊：じゃないですね。//やむを得なく。//＊：うん、そうですね。//ね。日本から出なきゃだめなんで。で、コリアから出ないと、コリアの場合も、49 年に戦争が始まって、

＊：ええ、ええ。

DS：そいで、プサンまで影響したんだよ。

＊：みんなねえ

DS：みんなじゃあ、どっかへ、どっか行こうと。で、そん時に、トルコが一番 OK 出たわけだよ。

（2017 年 10 月 3 日）

ダイヤンのような「若い連中」にとって、モデル・ストーリーは自分たちの語り口としては機能しない。「憧れ」という筆者の表現に対して、極東の状況が悪化するなかで、トルコが唯一タタール移民を受け入れたからこその「やむを得な」い移住であり、「憧れ」とは異なるという返答がなされた。これは、先の「イスラムの国」や言語の類似性というモデル・ストーリーの存在自体を否定するものではない。ここでは、アドナン・メンデレス率いる民主党政権によってテュルク系諸民族に門戸が開かれるよりも前に、トルコに渡ったタタール移民の苦労や、朝鮮戦争開戦による緊急性に重点が置かれていることから、より現実的な制度の話が中心となっていると考えられる。また、「憧れ」ではなくとも、英語能力が強みとなり、軍関連施設や外資系企業など「いいところ」に就職できたという観点からは、「トルコは、タタールの人たちには、良かった」と評価もする。

トルコ移住に際し、ダイヤンの場合は、父の意向があった。しかし、そのほかの在日タタール移民は、いかなる理由で移住を決めたのだろうか。前節で取り上げたラヴィル・アギシは、日本での不安や苦労、トルコへの志向を動機としたが、ダイヤンの語りからはタタール移民が戦後に置かれた状況が見えてくる。以下は、先の語りの引用に直接続く部分である。

【原文】

＊：でもコリアの場合はそうですけど、日本の場合は戦争があったわけじゃなかったですよね？出なきゃいけなかったっていうのは？

DS：ああそうねえ、でもそれは日本の場合は、あのー、タタール連中でも、若い連中は学校行

って少し勉強した人もいたし、そいで、うちの親父よりかちょっと真ん中の連中はね、日本語も下手で、それで、えー商売も、んー、毛布を売ったり、ね、//＊：うん、うん//そうすと、あちこちに、田舎へ行くんだけど、//＊：ええ//毛布やなんか売れなくなったり、//＊：ああ//そうすと、明日食って、食べていくのには、そういう商売しなきゃお金が入らない。//＊：うん//そういう意味で、えー、それで、子どもたちも、えー日本語があんまり達者じゃないけど、タタール語で勉強してそいで英語の学校行くけど、日本語があんまりないんで、やっぱり日本にいると、えーよっぽどいい仕事には就けないと。で、こういうあれも考えたんでしょ。そいで、じゃあ一番いいところは、じゃあアメリカ行くか、それともトルコ行くか。でアメリカ行くには、クオーターのシステムだから、えー日本で生まれた人は行けないわけ。ロシアで生まれた人は、プライオリティがある。それで一年か二年待てば、アメリカに入れたわけだからね。で、そういう意味でアメリカ行った人は、トルコ全然寄らないで。でもトルコへ行って、トルコで生活しようっつって行った人は、大体 90 パーセント、みんなパー（物事がうまくいかない）なんだよ。それで税関から荷物が出ないとか。そいでお前らはタタールだから、あー、ね、ダメとか。昔はそうだった。もう「ピス・タタール」（汚いタタール）。うん。そういうあれで、タタールの人たちは、あんまり、えー、面白くなかった。でもそのなかでも、あのータタールのなかでも、えートルコへ行って、ものすごく（トルコを）お気に入りで、ものすごく生活に、えー、いい生活をして、今でも（いい）生活してる人は、いないことはないんだよ、いるんだよ。

（2017 年 10 月 3 日）

中国や朝鮮半島のような危険がないにもかかわらず、なぜ離日者が現れたのかという筆者の問いに対し、ダイヤンは、1 世の多くが従事した商売の先細りや、母語としての日本語が前提とされる日本社会において、2 世の将来が危惧されたことを指摘する。そして、日本生まれの場合は出身国別割り当て制が立ちはだかるアメリカではなく、移住可能なトルコが選択されたという実情を説明するのである。しかしトルコでも、「税関から荷物が出ない」ことや、タタール人に対する軽蔑という困難に直面したこと、そのなかでも最終的には「いい生活」を手にした者もいることを述べた。

「テュルク・ムスリムの国トルコ」への移住と適応というような、単純な図式には収まらない評価を抱くダイヤンであるが、トルコでの彼自身の経験については、肯定的に捉えている。トルコ移住後のダイヤンの暮らしに目を向けてみよう。単身イスタンブルに到着したダイヤンは、親戚や友人宅に泊まりつつ、仕事探しを開始した。あるタタール移民の紹介で、アンカラの PX に職を得ると、倉庫係や会計係として、1 年間働いた。1957 年になると兵役に召集され、ポラトゥルにある砲兵隊の予備役将校の学校にて 6 ヵ月の教育を受けた。その後、砲兵隊の少尉としてエラズーに 1 年務め、1959 年に兵役を満了した。除隊後はかつての職場に復帰するも、同年、あるタタール移民の紹介によって、KLM オランダ航空に転職した。

彼がトルコでの経験を評価するうえで、兵役は重要な地位を占めている。以下では、トルコの兵役から逃れるためにアメリカへ再移住した複数の家族の存在に言及しながら、兵役を務めた者との比較を行っている。

【原文】

DS：それでさっき言ったみたいに軍隊があったわけ。//＊：ええ//18 歳になる頃になるともう早く逃げようってもう。

＊：ああ。

RS：何人かの家族ね。//DS：ああ//アメリカへこう、先に子どもたちだけ行かせるとか、あと子どもと一緒にこう、行っちゃうのよね。何人か友達にもいたわ。

DS：それとあんときの軍隊ってあんまりよくなかったから。それでお金はもらえないし。それで二年間でしょ。それで海軍が三年間だから。それがやだっていうんでみんな。（兵役に）行った人はみんな、あの、行ってよかった、//RS：無事にねえ。//無事で行ってそれで、//RS：誰も//少しでも生活を、苦労を覚えたとかなんかっていうんで//＊：ああ//みんな、みんな喜んだんだよね。だから軍隊いってその後家族を持った人と、軍隊行かないで家族を持った人の間は差がものすごいある。//RS：あるよ。//ありますよ。

（2011 年 10 月 6 日）

厳しい環境に置かれ、収入を得ることもできない兵役から子どもを守るため、渡米を選択する家族もいた。しかし、兵役に服したタタール移民はみな、無事に勤めを終え、成長を遂げることができた。そのため、兵役の経験の有無で、家長としてのあり方に大きな差が生まれると、ダイヤンもルキヤも語っているのである。このように兵役に対して肯定的な意味づけをするダイヤンは、トルコで過ごした年月を振り返り、次のように述べた。

【原文】

DS：だから、軍隊のときでも、その、日本から来てわざわざ軍隊へ、兵隊をやりにきて、それで、日本（語）ができて英語ができてるから、っていうんで、ものすごく、得をした。ね。日本語で言うと、得をしたケースが多かった。だから、兵隊さんをやって、本当によかったと思うし、

＊：よかったと思われますか。

DS：うん、良かったと思うし、それで、そんなにまで、あの一みんなの話を聞いたように、辛い思いっていうこと、あんまりしなかった。

＊：あー、それよりも、規律が身につくとか、そういうよさがあったと

DS：そうでしょうね、うん。だからあの、誰かさんのためになんかをして、それで、してあげたからなんかお返しもらおうっていう気でやらないで、やるとね、かえってね、返ってくるんだよね。返ってきたときに「ああ、よかった。あれをやったからこうなったんだろう」という、結果が出るんだよな。だから、なんか出来たら、誰にでもいいから、やってあげると、損はしない。損はしない。俺、損しなかったよ。ほかの意味で、え一誰かとなんかやったときに損した経験もあるけど、//RS：ふふ（笑）//でも、あの一overall ね、全体をやると、トルコで過ごした 11 年間、11 年半、

＊：11 年半、

DS：ものすごくね、あの一、人間的にも、生活のためにも、そのあとの将来のためにも、やっぱりよかったと思う。日本で残っていたらもう、本当に怠け者になって、なんていうんだかなあ、金持ちの女をみつけたんでしょう、たぶん。そういう結果になった可能性もあったし。そいで、そういうあれがなくて、遅く、遅れた国に行って、それで、日本で育った

経験もあったし、それで、損をしなかった。それで新しい友達も何人もつくったし。結果的には、最後には、こういう結果になったけどね。よかったのかなあ。

＊：よかったと思います！

DS：へへ（笑）

（2012 年 5 月 2 日）

ダイヤンは兵役中、ほとんどのトルコ人にとって遠い異国である日本で生まれ育った経験や、日本語、英語の能力を生かし、重宝された。「得をした」とは、楽をしたという意味合いではない。この語りの直前、当時世話になっていたタタール移民の「おばさん」が、ダイヤンの派遣先がアンカラとなるよう知人の少佐に掛け合うと提案してきたが、「トルコ（に）来た以上」、トルコのやり方でトルコのあれこれを学びたいと断ったことが言及されている。ダイヤンはほかのトルコ人同様、「くじ引き」の結果に従い、エラズーへと赴いた。そして、トルコに移住した多くのタタール移民ほど、「辛い思い」を経験することなく、見返りを求めず他者のために行動することが、結果的には自身に「返ってくる」という教訓を得たという。このように振り返ったあと「トルコで過ごした 11 年間」は、「人間的にも、生活のためにも、そのあとの将来のためにも、やっぱりよかったと思う」と評価し、その理由として、日本で「怠け者」になるのではなく、トルコという「遅れた国」で、自身の生い立ちも生かしながら働き、多数の新たな友人を得たことを挙げるのである。

では、日本で「怠け者」になるとはどういうことだろうか。背景には、在日タタール移民の離日の理由としてすでに指摘された、2 世の将来への危惧、より具体的には戦後の日本における 2 世の就職問題が存在する。この問題は、兵役を終えてトルコに留まる義務はないのにもかかわらず、家族が暮らす日本に戻らなかったダイヤンの決断に、深くかかわっている。

【原文】

DS：一回日本から出てしばらくたつと、日本に入る許可（Re-entry Permit、再入国許可）なくなっちゃう。俺の場合は軍隊のためにトルコ来たから、終わってから戻れば（日本にまた）入れた。お母さんがいつも、帰ってこい帰ってこいと言ったの。俺軍隊終わってっから。（トルコで）友達ができたし、それで、仕事もいいの見つけたし、働いてるから。今までそういうところで働いたことなかったから。日本の場合はエキストラやったり、店の運転手やったり。誰かさんの下で、事務所で働くということはなかった、トルコで初めてストックルームから会計やるようになって。毎年好きな時に日本に帰れたから。トルコで仕事あるから、やっぱり辞めずに日本とトルコを行ったり来たりしてたの。60 年にトルコでレボリューションがあったでしょ。そのあとにごたごた。59 年にアメリカのあれからオランダ航空にかえて。休みさえあれば好きなときに好きなところに行けて。日本で同じような仕事に就けばいいけど（就けるかはわからない）。日本に帰る必要ないんじゃないかと。やっぱり慣れちゃったのかな。それで、そうしたら今度、日本と同じように一人ずつ友達がいなくなっていくんだよ。アメリカ行ったり、オーストラリア行ったり、それともアンカラから越してどっか行くとか。だんだんつまんなくなってくる、状態がね。アメリカの政府関係で働いてる連中も、この会社が閉まって、この会社がなくなって。アメリカのあれが小さくなってきちゃう。そうすると自然と、友達もいなくなるし、仕事もなくなって

くる。KLM の場合も俺は大丈夫だったけど、結果的には住みやすくない立場になってきちゃう。俺のいい友達がカナダにイミグラントして。ほかの人もあちこちいって。だんだんいなくなって。そうすると、俺もどこか行こうかな。日本に帰ればいいんだけど、日本に帰るにしても、同じ手続きしなくちゃいけない。何年もリエントリーしてないから、ツーリストでいってるから。カナダにやってみようと。カナダは仕事によって、受け入れたり。誰かさんがスポンサーすればいいと。

（2012 年 5 月 6 日）

兵役を終えたダイヤンに対して、母は日本の家族のもとに戻ることを希望するが、友人を得、責任のある仕事を初めて任されるようになったトルコでの生活は、もはや手放すことのできないものだった。映画やテレビのエキストラや「店の運転手」のような短期の仕事ではなく、航空会社などで「誰かさんの下で、事務所で働く」ことは、日本では叶わなかった。それは個人の選択よりも、「外国人」という見た目や背景をもつ人びとの就業に関する、当時の日本社会の構造に起因する状況だといえよう。ダイヤンはトルコで働きながら、「毎年好きな時に日本に帰」り、「休みさえあれば好きなときに好きなところに行け」る生活を送った。

しかし 1960 年代に入ると、「アメリカの政府関係」機関が縮小されたことで職を失った者をはじめ、再移住の動きが顕著となる。1959 年に除隊後、KLM オランダ航空に就職したダイヤンは自身の仕事に満足していたものの、タタール移民にとっての就業機会の縮小と、友人の減少は、トルコを「結果的には住みやすくない」環境へと変えてしまった。親しい友人がカナダへ渡ると、ダイヤンは再入国許可の期限が切れた日本ではなく、カナダ行きの手続きを始めた。

こうして渡航準備を進めていたダイヤンだったが、1965 年、彼の将来を変える出来事が起こる。当時アメリカにいた妹が日本に帰ることになり、父親に同行を命じられたダイヤンは渡米した。そこでルキヤと出会い、1967 年に結婚したのである。妻は 21 歳と若く、彼女の家族は娘をトルコに送るのではなく、ダイヤンがサンフランシスコ・ベイエリアに来ることを希望した。こうしてダイヤンは KLM を退職し、トルコでのすべてを捨てて、アメリカへと移住した。サンフランシスコ・ベイエリア到着後 1 週間で、友人からカンタス航空を紹介され、以後 25 年間勤務した。1970 年には息子、1972 年には娘が生まれた。

最終的にはアメリカを定住の地に選んだダイヤンであるが、これは、トルコへの不適応の結果としての移動ではなかった。先にみたように、彼は成長の機会を与えてくれたトルコでの経験を肯定しており、トルコはひとつの「故郷」といえよう。さらにダイヤンは、トルコに限らず、タタール移民が暮らしてきた複数の場所への感謝を示し、同時に「インターナショナル」な存在として、場所を問わず生きていくことができると語る。

【訳文】

DS：例えば、例えば、もし私に聞くならば、退職したときに、誰かが、「それらの国々からどの国に行って暮らしたいか」と聞いたならば、私は「日本」と答えるだろう。日本では、私たちが幼いころ、とても貧しかった。何もない。それから、育っていくとき、第二次世界大戦が終わったのち、外国人にとってはとても良い生活が待っていた。日本人には少し大変だった。けれど、私たちにはとてもよかった。自分たちには、PX があった。あれがあり、これがある。私たちはみんなアメリカが来てから、アメリカ人のところで働いた。仕

事があった。それから、あるとき状況は改善した。その後、朝鮮戦争後、日本はすこし金持ちになり始めた。金持ちになった後、私たちに対して、指をさし始めた。「あなたたちは何者だ、出ていけ」と。なぜなら、「あなたたちのパスポートはない。祖国はない。なんだかわからないが、白系ロシア人、タタール、」

RS：無国籍、無国籍だったから。

DS：そういう人をみんなね、「ちゃんとした仕事もってるなら、税金を政府に収めるなら、ここにいていい。ちゃんとした家を持っているなら、ここにいていい。何ももっていないなら、出ていきなさい。一度きりのパスポートをあげる。船に乗るか、飛行機に乗って、どこかへ行け」と。白系ロシア人は、オーストラリアに行った。アジアでもシンガポールでもどこでも、アメリカでもどこでも。ロシアに帰った人たちもいた。（　　）の理由で。でもトルコ（タタールの意）、私たちタタールは、トルコ大使館に行って、トルコ人に、ムスリムになりたいと申請した。トルコ政府、アンカラは認めて、イスタンブルのエミノニュから担当者を送ってくれた。私たちは登録して、1953 年に私たちは Türk（トルコ人）になった。すると、日本政府は「我々は何もできない。なにかあればトルコ大使館があなたたちの面倒をみる」と言って来た。それで、日本に住むことができた。でなければ、3 年ごとに区役所に行って、登録してもらって、日本滞在許可を得なければならなかった。ある働いていない人に対して、5 人家族で誰も働いていない一家に対して、「この国に滞在する許可はあげない」と言い出した。それで、たくさんのロシア人は日本を離れ、タタールの人びと離れて、

RS：彼らは（日本を）離れ始めて、トルコがベストの行き先だった。

DS：だから私たちは、ほとんどの人はトルコに行って、もしアメリカにコネクションがあれば、

RS：私の家族は、直接アメリカへ。

DS：直接ここ（アメリカ）に来た。なぜかというと、彼女（ルキヤ）のおばさんが、

RS：私の母の姉妹たちがここにいたの。おばあちゃんもおじいちゃんも、もうここにいた。

DS：だから、日本はほかの人たちに対してちょっと厳しかった、日本がこう、

RS：日本が豊かになると。

DS：うん。1991 年、私が退職したとき、あるひとが聞いてきたとしよう。（日本でのネガティブな経験にもかかわらず）それでもなお、私はまだ「日本に行きたい」という。気にしない、もし暮らす場所があれば、日本で退職していたかもしれない。でも今は、毎年トルコに行くし、今は、気にしない、

RS：トルコにも行けるし、

DS：（トルコに）3 カ月、6 カ月滞在することもできるし、気にしない。ここでも文句ない、天気よいし、

İF（イブラヒム・フェイズッラーオウル）：hh（笑）

DS：家も持っている、場所がある。総合的に言って、我々はインターナショナル。私たちはここにいられる、あそこにもいられる、タタルスタンにだって行って、滞在できる。

＊：あなたは誰とでも、コミュニケーションを取ることができますね。

DS：うん。

RS：だから、私たちはとてもフレキシブル。

DS：君の質問に対して、私たちはこう答える。「私たちはどこにだってとどまることができる。

それから、トルコ人やアメリカを批判することはできない、//İF：できない、できない//私たちは、日本や中国を批判することはできない」。なぜならみな私たちに親切だった。私たちは彼らに親切にし、彼らは私たちに親切にした。だから我々はどこでも住める。そういうことだ。

（2012 年 5 月 3 日、英語、トルコ語、日本語、サンフランシスコ・ベイエリア、イブラヒム・フェイズッラーオウル宅）

この語りは、イブラヒム・フェイズッラーオウル宅で実施したインタビューで、トルコに行った時にどう感じたか、アメリカへは望んで来たのかという筆者の質問に対するイブラヒムの一連の回答の後に、なされたものである。1936 年旧満洲生まれのイブラヒムは、1957 年 20 歳でトルコに渡った。同国で 16 年を過ごしたのち、1973 年、妻の両親をスポンサーとしてアメリカに移った。トルコ移住時は、人生で初めて「自分の故郷」を離れ、かつ当時のトルコは発展しておらず「道は泥だらけ」で、「とても貧しい国」だったことから、中国に戻りたいと強く思ったという。しかし数年でトルコを好きになったこと、アメリカへの再移住は望んで実現したもので、38 年という「人生の最も長い時間をアメリカで過ごしている」と、トルコ語で語った。このような「故郷」はどこかを暗に問うような筆者とイブラヒムのやりとりを見ていたダイヤンは、「もし私に聞くならば」と、彼自身の解釈を語り始めたのである。

ダイヤンは1991年にすでに退職しているが、仮に退職時に居住地の選択肢を示されたならば、日本と答えただろうと述べている。ダイヤンが子ども時代を過ごした日本は、貧しく「何もない」場所で、第二次世界大戦中は苦労を強いられた。しかし、終戦後に進駐軍があらわれると、米軍人から職や物資の提供を受ける「（ダイヤンたち）外国人にとってはとても良い生活が待って」いた。ダイヤンにとって日本は、様々な感情を呼び起こす経験を内包する場所である。例えば彼は、イブラヒム宅を訪れた日の夜、1930 年名古屋生まれのエディハム・キルキー宅で行ったインタビューにおいても、「いろいろね、辛いこともたくさんあったけど、日本でいいこともたくさんあった」と話している。またダイヤンの子どもたちが幼少の頃から、彼らを親や弟が暮らす東京に連れて行き、今日でも折に触れて日本各地を訪問している。以上を鑑みれば、生まれ育った東京や日本は、彼にとってまたひとつの「故郷」であるといえよう。

「外人」として、日本からの差別も、進駐軍からの厚遇も受けてきた在日タタール移民を取り巻く環境は、日本経済が朝鮮特需によって戦後の低迷から抜け出し、高度成長期を迎えるなかで、再び変化する。「金持ちになった」日本は、無国籍であるタタール移民をはじめ、外国人に対して「指をさし始めた」のである。これは、戦後日本の国籍制度と地続きの問題である。国籍制度を取り上げ、日本政府や行政、国家官僚のような「国家を運営する側が考える『日本人』イメージの戦後の変遷」を考察した佐々木は、次のように述べる。

まず①終戦から 1952 年までの「日本人」イメージは単一民族論を採用することで徐々に成立してきたと考えられる。そして②1952 年から 1984 年まではその単一民族論を根拠として制度を運用してきた。つまり②の時期においては「日本人」のイメージはほぼ固定化されたといえよう。1952 年の昭和国籍法の背景には、「日本人」＝「日本民族」＝「日本国民（日本国籍保持）」という認識があったといえる。そしてその時語られた「日本人」とは「純血性」によって再生産され（出生における父系優先血統主義）、「文化的同一性」によって規定（帰

化時における日本文化への同一化）される存在であったといえる［佐々木 2004：228］。

このような、血と文化の完全なる同一性を前提として社会制度が運用されれば、タタール移民の日本国籍取得には多大な困難が、外国人としての滞在には構造的不平等が伴った。鴨澤は、タタール移民と日本の関係について、「すでに何十年も日本で生活しながら、あえて日本国籍を取得しなかった人びとがほとんどで、あまりにも同質性を求めてやまない日本社会に異民族を包容する力が欠けていることも、在日タタール人の国籍取得問題の検討にさいしては考慮されなければならない」と指摘している［鴨澤 1983：271］。1952 年に単一民族論を根拠とする昭和国籍法が成立し、1953 年に在日タタール移民がトルコ国籍を取得したことは、無関係ではない。戦時中は「回教工作」の対象として利用し、戦後は国をもたない「なんだかわからない」存在として扱う日本の態度は、中国や朝鮮半島のような緊急性がないにもかかわらず、多くの移住者を生みだした大きな要因といえよう。それでもなおダイヤンは、実現可能性さえあれば、退職時に日本を選択したと話す。

「今は、気にしない」と言葉を継ぐ彼の語りは、「インターナショナル」な存在としての「我々」に帰結していく。退職から 20 年以上が経ち、サンフランシスコ・ベイエリアに暮らすダイヤンは、家と安住の地を獲得し、トルコであれタタルスタンであれ、自由に行き来できる自身の状況に満足する。そして、トルコ、アメリカ、日本、中国というタタール移民が辿ってきた複数の国に関して、互いに親切に振る舞ってきた人びとを批判することは不当だと述べる。タタール移民はこのような態度を保持し、ネガティブな経験からすべてを否定したり、それまで住んでいた場所を切り捨てて、ある場所のみを「故郷」とみなすのでもない。限定した「故郷」を問う筆者への答えは、「どこにだってとどまることができる」、「インターナショナル」な生き方なのである。

以上のように、ダイヤンは生活経験をもつ複数の場所を評価しながら、「我々」タタール移民をインターナショナルな存在として規定する。では、ダイヤンや前節のラヴィルのように、東京の経験を記憶する 2 世に対し、幼少期に離日した 2 世の場合は、どうだろうか。本章の最後に、ラヒレ（3 章 1 節）よりもさらに幼く、僅か 4 歳で神戸から移住したナイレ・クデキを取り上げる。

4-3　「私たちは私たち。それだけ」—ナイレ・クデキ

ナイレ・クデキは、1951 年神戸生まれの女性である。1955 年 4 歳のとき、一家でトルコへ移住した。ナイレとは、ラヒレとの出会いの場ともなった 2012 年 5 月のキュタヒヤ旅行にて面識を得た。ボアジチ大学の前身であるロバート・カレッジに在籍したナイレは、選択科目のレポートの題材として、自身の専攻とは全く異なるタタール移民の集住地や協会の変遷を扱うなど関心が高く、若い世代にタタール語が使われない状況を憂い、さらに成人向け日本語教室に通ったこともあって、「タタール人の歴史を研究する日本からきた女の子の学生」である筆者に声をかけた。その後、互いの自宅が近かったこともあり、ともに買い物に出かけたこともあった。筆者がトルコ留学中に在籍したのもボアジチ大学であったため、録音を伴うインタビューの初回は、ナイレの提案によって、両者にとって馴染みのある同大学内のカフェで、2012 年 12 月 11 日（61 歳）に行った。2015 年 3 月 27 日（63 歳）のインタビューは、イスタンブルの彼女の自宅で実施した。

幼少期に離日したナイレは、移住自体の記憶はない。しかし、トルコ移住を望んだはずの父が、適応に苦しむ姿を覚えている。

【訳文】

NK：両親はそもそも、もう日本に留まりたくなかったみたい。暮らし向きはとてもよかったみたいだけど、ムスリムの国に行くことがもっと、つまりは正しいことだと感じたみたい、子どもたちがそこで育つことが。でも、正しいことだったのか間違ったことだったのか、私にはわからない、もちろん（笑）。父はトルコをまったく気に入らず、いつもどこかへ行きたがっていたけれど、叶わなかった。

＊：そうだったんですか。//NK：ええ//日本へ戻りたがったのですか。

NK：違う違う、例えばカナダとか、//＊：ああ、違うところへ//アメリカとか、イミグレイトしたがっていた。でも父は中国生まれだったので、アメリカは受け入れてくれなかったの、当時。

［略］

＊：日本から直接アメリカへ行った人も、トルコへ行った人もいますね。

NK：ええ。直接アメリカへ行こうと考えたかは知らない。考えたけど、多分だめだったのね。それからここに来てからも、父はいつも考えて、行きたがってたけど、叶わなかった。//＊：わかりました。//だめだった。ここにとどまった。//＊：トルコをあまり//好きになれなかったのね。好きになれなかった、慣れることができなかったと言えばいいのかな。でもどうしようもなかった、もちろん。私が大学を終える頃には、いつも「娘よ、行きなさい、行きなさい」と言ってきて。私も、アプリケーション・フォームに記入して、アメリカやオーストラリアやカナダにさあ行こうとしたときに、結婚したの。夫は「行かない」と言って、私も結局トルコに留まった。

（2012 年 12 月 11 日、トルコ語）

物心がつく前の子どもとしての移住であったため、移住後の適応に関するナイレ自身の苦労は言及されない。一方で父は、「ムスリムの国に行くこと」、「子どもたちがそこで育つこと」に正しさを感じてトルコに渡ったものの、「トルコをまったく気に入らず」、常にアメリカをはじめとする第三国への移住を自身のためにも、娘のナイレのためにも望んでいた。しかしながら中国生まれの父は、出身国別割り当て制に阻まれ、アメリカ移住を実現させることができなかった。

このように、適応に苦しむ親の記憶をもつ 2 世は、ナイレに限らない。例えば、神戸からアメリカに直接移住したラビヤ・アクチュリン（トランスクリプション中 RA）も、トルコに適応できなかった父の姿を思い起こし［Numata 2018：96-97］、インタビューに同席していたルキヤ・サファ（RS）は、日本からトルコに移住したタタール移民の心情を慮る。

【訳文】

RA：かわいそうな私のお父さんは、トルコを決して好きにならなかった。

RS：ならなかったね。

＊：なぜ、なぜでしょう。

RA：だって、まず彼ら（両親）は、その言語（トルコ語）を話さなかった。

RS：トルコ語ね。

＊：でも、トルコ語は（タタール語と）そこまで違うわけじゃない、

RS：そうね、でもそれでも、慣習はとってもとっても、違っていた。

RA：タタールの慣習からね。

RS：日本からきた私たちにとって、とくにタタールの文化と日本の背景をもちながら、//＊：背景//トルコに行くわけ。当時のトルコは、

＊：なるほど、

RS：今はとてもモダンに、

＊：はい、発展して。

RS：発展した。1955 年にはまだ。

＊：わかります。

RS：だから、日本からきた人たちにとって//＊：日本//当時、55 年にはすでに、（日本は）より発展していたから、完全に後戻りで、トルコでの生活はとても難しかった。しかも、言葉もわからない。

［略］

RA：それで、私はお父さんとお母さんのために申請して、それを送って、それから両親は（アメリカに）来て、私と一緒に暮らすようになった。

［略］

RA：お父さんは「ラビヤ、私は決してトルコに行くべきではなかった。私は日本からまっすぐにここ（アメリカ）に来るべきだった。あちらでは、5 年住んだけれど、言葉も知らず、何もできなかった」

RS：時間の無駄。

RA：「ここでは、みなさい、英語を話すことすらできないけれど、きちんと給料を払ってくれて、とても幸せに感じるんだ」

（2012 年 4 月 30 日、英語、サンフランシスコ・ベイエリア、ラビヤ・アクチュリン宅）

ラビヤの両親は、神戸からトルコへと移住した。しかし、トルコ語習得の難しさ、「タタールの慣習」とトルコの慣習の相違から、父は「トルコを決して好きにならなかった」とラビヤは語る。そのうえでルキヤは、「タタールの文化と日本の背景をもちながら」1950 年代半ばのトルコで暮らすことは、国の発展という観点からは「完全に後戻り」であり、困難を伴うものであったと補足する。結局、ラビヤ自身がスポンサーになることで、アメリカに両親を呼び寄せ、父は英語能力の不要なケータリング会社で働くことになった。彼女が記憶する「私は決してトルコに行くべきではなかった」、「（英語ができずとも職を得て）とても幸せに感じるんだ」という父の言葉からは、父にとって再移住が、トルコに比較して安定した幸福な生活に帰結したことがうかがえる。このような両親のアメリカ再移住は、ラビヤの義理の姉の存在があったからこそ、実現した。ラビヤは、自身と同じく神戸出身のタタール移民と結婚した。夫の姉はアメリカ人と結婚し、すでにアメリカで暮らしており、夫は姉との関係にもとづき、永住者として移住した。こうして渡米した夫が呼び寄せることで、ラビヤの移住も可能となり、最終的には彼女が両親のスポンサーとなることができたのである。したがって、タタール移民であるだけではアメリカ移住を実現させることはできず、各人の出生地とともに、どのような人的ネットワークを有するかによって左右されたことがわかる。

また、アメリカ移住とタタール移民の関係について、前節で取り上げたダイヤン・サファは、次のように語る。

【原文】

DS：アメリカへみんな来たがる理由は、仕事もろくにできなくても、アメリカ来たときは 60 年代、誰でもどっか仕事入れた。トルコでは入れない。コネクションがないとあんまり入るきっかけがなかった。結局面接やって、「はい、いいでしょう、明日来てくれ」っていうのはない。誰かが入れてやってくれと言って、ようやく入る。でも 3 カ月後にやっぱりだめとされてしまうこともある。ところがアメリカだと、ホテルのシーツを変える。ごみを捨てたり。白人がやりたがらない仕事。60 年代はおばさん連中でも仕事があった。一回見せればできる仕事、そういう仕事は金がやすいから誰もやりたがらない。タタールでもロシアでも、イミグラントやる。キルキーさんのお父さんとかも。昔の人はそれを一生懸命やったんだから。

（2012 年 5 月 6 日、サンフランシスコ・ベイエリア、自宅）

英語能力を買われた 2 世が、軍関連施設や外資系企業で重宝される一方、「コネクション」がなければ門戸をたたくことも難しく、技能を持たずトルコ語習得もままならない 1 世がトルコで就職できる可能性は、非常に低かった。他方、1960 年代のアメリカでは、低賃金で「白人がやりたがらない」ハウスキーピングやごみ処理を担ったのは、「イミグラント」であった。ラビヤの父が英語を話さずともケータリング会社での職を得たように、「おばさん連中」や「昔の人」は、こうした単純労働を「一生懸命やった」のであった。ダイヤンの語りからは、トルコ社会との文化的な相違が、経済的不安定性にもつながり、就業機会が期待できる先進国アメリカへとタタール移民の目を向けさせたことが読み取れる。

話をナイレに戻そう。父の再移住に対する強い想いはあったものの、2012 年 12 月に実施したインタビューでナイレは、夫の意向でトルコに留まることにしたと語っている。そして、2 年 3 カ月後の 2015 年 3 月のインタビューでは、アメリカに対して熱心な思いはないことを、旅先での望ましい滞在の仕方というテーマを通じて述べている。彼女はカザンを訪問し、祖父の村に滞在した。祖父の家はもはや残っていなかったが、祖父が暮らしたように滞在したいと、例えばトイレが屋外にあるような村の生活を、一週間経験した。日本については、4 歳で移住してから一度も訪れたことがなく、「本当に望んでいるけれど、でももう（歳を取って）行けないと思う」と話す。そして、もし願いが叶うならば、「観光客としてではなく、日本の人びとのあいだで、1 カ月ほど暮らしたい」という。対して「アメリカではそのような希望はない。友だちと行って、観光するのはあり得る。でもアメリカに行って、人びとの間で暮らしたいというような気持ちはない」と明示するのである。

さて、トルコで教育を受けたナイレにとって、言語は問題にならず、比較すべき「暮らし向きはとてもよかった」極東の記憶もない。それでも彼女は、極東からきたタタール移民として自己を認識する。ナイレにとって、トルコ料理を知らない母の手料理は、タタール料理と日本料理である。それを受け継いだナイレは、タタール料理とともに、「日本の味付けになる」醤油と砂糖を使って鮭を調理し、彼女の夫はつねに「ごはん」を食べる。トルコ料理の主食はパンであり、米はバターなどで味を加えた「ピラヴ」として食される。そのため、ナイレを含みタタール移民たちが「ごはん」と日本語でいうとき、それはトルコの一般家庭では食卓に並ばない、シンプルに炊いた白米を指す。醤油や日本食材がトルコで普及しつつあることを喜び、マクロ・センター（トルコの高級スーパー）で扱っていた無着色の「しょうが」が姿を消したことを嘆くなど、食とい

う日常は日本を意識するもので彩られている。

資料 9　サヌキ丸にて神戸からイスタンブルへ
（1955 年、中央の少女がナイレ）
出典：ナイレ・クデキ提供

またナイレは、男女規範のあり方を通して、トルコ人とタタール移民を区別し、さらにトルコに暮らすタタールと呼ばれる人びとのなかでも、極東を経由してトルコに移住した人びとを「我々のタタール」として峻別する。

【訳文】

NK：1955 年にトルコに来た時も、少女時代にも、私はのびのびと育った。でもほかの人たち（タタール移民以外の人びと）はそうじゃない。母は短パン姿で外を歩いたけれど、みなおかしな目で見て、「宇宙から来たのか」なんて話していた。1950 年代のトルコで、短パン姿の女性はいない。そういう文化がない。文化が違うだけで、どちらが良いとか悪いとかではない。でもほとんどが、私たちには不慣れなものだった。そして、私たちは彼らのようになろうとはしなかった。世間の圧力というものに反対だからね。私たちは私たち。それだけ。

（2015 年 3 月 27 日、トルコ語）

ナイレが子ども時代を過ごした頃、女性の服装をはじめとし、当時のトルコに浸透する価値観と、タタール移民のそれとの間には、大きな相違があった。それは、短パン姿の母へ向けられたまなざしを通して、生々しく思い起こされる。トルコの農村で現地調査を行った中山は、「ナムスとは、トルコやイスラーム社会において広く名誉、または自尊心を表象する言葉であ」り、「とく

に女性のセクシュアリティに結び付けられ、それへの侵犯は殺人より重大だと考えられている」こと、「婚姻外の性交渉を厳しく制限するという性的規範があ」ることを指摘する［中山 2010：7］。タタール移民社会もひとつのイスラーム社会ではあるが、彼らが極東で暮らした経験をもつことは、性的規範に対する認識やその実践に相違をもたらした。ナイレは各文化の善悪を判断するのではなく、相違は相違として受け止め、しかし周囲の圧力に屈して同化するようなことは決してなかったことを語る。トルコの文化はトルコの文化であり、「私たちは私たち。それだけ」と、タタール移民ならではの生き方を貫いた。彼女にとって「カザン・トルコ人文化互助協会」は、こうした生き方を可能にする頼もしい存在だった。

【訳文】

NK：すべての家族がお互いを知っている。たぶん、もし私たちの協会がなければ、そうはいかなかったでしょうね。だって、お互いの母や父を知っている。家族を知っている。それは私たちにとって、とっても大きなアドバンテージ。［略］その環境のおかげで、私たちにはものすごい居心地のよさがあった。

＊：うんうん、そうですね。

NK：自分たちの協会があること、そういう存在があること。私たちを安心させてくれた。［略］（高校のトルコ人の）友だちは驚いていた。夏に何をしたのか話していて、友だちはびっくり。「そんなことどうやって（親は）許すの？」「そんなこと可能なの？」

＊：そうだったんですか。

NK：そうよ。私、普通の、ちゃんと文化的レベルのある学校に通った。友だちだってそう。レベルの低いところじゃない。でも、それでも。つまるところ、トルコの生活様式がこれだった。わかる？

（2015 年 3 月 27 日、トルコ語）

「カザン・トルコ人文化互助協会」は、極東を経由したタタール移民のための組織であり、親戚や友人として、家族ぐるみで互いを知っていた。このような強い信頼関係は、異性であっても安心して友人関係を築くことができる恵まれた環境を、若い 2 世に提供した。本インタビューの録音を始める前、雑談のなかで語られた夏の思い出は、良い例である。ナイレは 16 才のとき、タタール移民の女性 5 人と男性 8 人で遊びに出かけ、夜は安全のために、男女ともに同じテントで休んだ。夏休みが終わり、夏の思い出として友人に話したところ「ちょっとでも手を触れたら男は襲うという考えしかない」彼女たちから、「処女を失ったの？」と言われたのである。インタビューでは、この話題に再度触れながら、「ちゃんと文化的レベルのある学校」に通う友人であっても、そのような考え方から自由ではなく、当時の「トルコの生活様式」の確たる存在を指摘している。

ナイレは、このような保守的な男女観は、トルコ人だけでなく、彼女と同じタタールと呼ばれる人びとのなかでも見受けられるという。1968 年頃、協会の若い 2 世たちとともに、エスキシェヒルの「カザン・タタール」の村を訪問した 17 歳のナイレは、同じタタールであるはずの人びとが、「トルコ人の村」、「トルコの文化」だと感じさせる男女隔離を実践していることにショックを受けた。例えば、先に引用した中山が滞在したトルコの農村の人びとには、「さらわれやすい」女性と、「女性に対してやましい下心を抱き、隙あらば女性を襲おうとし『じっとしていない』」男

性という、「極めてはっきりとしたイメージがあ」るという。そのため当該の農村では、「ゆるやかではあるが、空間的に男女隔離が」存在する［中山 2010 : 7］。迎えの子どもたちが心からのタタール語で「ようこそ」と言ったことに感動したナイレだったが、村の歓待を受けて食事をとる際、ナイレたち女性がいても、村の女性とほとんど話す機会がもてないことに気づく。また、協会の活動として学んだ男女混合のダンスを披露したが、村人は、初日は男性のみ、翌日は女性のみという形で、男女別に観覧した。

ナイレは、このような一見イスラームという宗教そのものにもとづくかに思える保守的な男女規範を、トルコの文化と一体となったからこそ生まれた価値観として解釈する。

NK : そもそもカザンで、ウファで、例えば私の父方の祖母はウファ出身だけど、私たちは昔からそう（男女平等）だったみたい。女性は（髪を）隠すとか、男と女は別だとか、そういうのはなかった。そもそもが、そういうのがない暮らしをしていた。

＊ : カザンであれ、ウファであれ、ずっとそういう、

NK : そう。なぜなら、どこから見たって、今のオーストラリアを見てみて。私はフィンランドのタタールたちをよく知ってるんだけど、母方のおじがフィンランドにいるから。それからアメリカ。一部はトルコから行った人たち、一部は中国、日本、朝鮮半島から直接行った人たち。私たちの間で、頭を隠した女性とか、男女をわけるとか、そういう話は一切聞かない。もともとのルーツに、そういうものがない。カザンにしろ、もともとのずっとそういう（偏った男女規範がない）暮らしをしてきた。なぜここに（極東を経由せずに）来た人たちは、こうなったか。それは、トルコの文化。トルコの文化が悪いと言ってるわけじゃないのよ。

＊ : もちろん。

NK :（トルコの）生活様式が、そのような（トルコ的な男女規範への）変化を必要とさせた。

［略］

NK : 私たちもムスリム。すべてのムスリムが、（トルコの一部保守層で見られるような）狂信的な人びとであるわけじゃないし、私たちは、まったく違う。でも、宗教そのものはいつも同じ。同じ宗教がずっと残っている。宗教は、女性を覆い隠すなんて言っていない。でも、文化と一緒になって、伝統と混ざり合って、それで違いが生まれた。

（2015 年 3 月 27 日、トルコ語）

ナイレは、彼女自身も、ほかのタタール移民も、ムスリムであると明言する。しかしムスリムであることは、ヴェールの着用や、男女隔離を自明のものとしない。祖母の時代のカザン、ウファ、今日のオーストラリア、フィンランド、アメリカに暮らすタタール人のいずれにも、トルコのような男女規範は見受けられない。1917 年の革命後、おそらくカフカス経由で直接トルコに渡り、エスキシェヒルに定住して村を作ったタタール人たちは、1920 年代、1930 年代のトルコで暮らすために、タタールの村だとしてもトルコ化、あるいは同化せざるを得なかったのだろう。これが、ナイレの考えである。そして「私たち」の場合は、極東に行ったことで、そこで教育を受け、その文化のなかで育ち、そうして大人になった世代が、トルコでナイレたちを育てたと話すのである。これは、1 章 3 節で登場したナーディル・デヴレトがもつ、ヴォルガ・ウラル地域出身のタタール人であっても、極東以外の経路でトルコに移住した「村のメンタリティ」をもつ

人びとと、「都市のメンタリティ」をもつ「我々のタタール」は分かり合えないという認識と、共通するものだろう。

以上のようなナイレの解釈からみえるのは、極東の記憶がなくとも、日常の食事や他者との比較を通じて、自身の価値観を生まれた場所に結び付けるひとつの帰属意識のあり方である。その場所は、ナイレが生まれた神戸という具体的な土地として想起されるよりも、極東を経由した移民集団の一員という抽象的な形で認識されている。

5 章　タタール移民の変化する「故郷」

タタール移民 2 世に、「故郷」はあるのか。まずわかるのは、彼らの語りをひとつの「故郷」に収斂されるものとして捉えることは、不可能だということである。タタール移民の移住は、「テュルク・ムスリムの国トルコ」への親密さと適応というような、単純な構造では説明できない。先祖の出身地、移民社会、生まれた場所、育った場所、移住先、移住先候補という複数の場所に対する帰属意識の強さ、内容、そして有無そのものも、いつ、どこで、誰を相手に語るかによって、またその時置かれた状況によって、変わり得るものだからである。本章では、①移動という経験を共有することで、タタールの名のもとに集団を形成した人びとが、②トルコという新たな「故郷」を創出し、③トルコにおいては直接あるいは間接的な極東の記憶や経験を心の拠りどころとしながら、④ソ連解体によって先祖の「故郷」を初めて訪問すると帰属先の一部として再認識していく、という様相を通じて、複数の移動を経験した人びとの帰属意識を考える。

5-1　タタール移民の誕生

鴨澤は、1920 年代極東に暮らし、混乱が収まれば「故国」に帰るつもりだったタタール移民 1 世たちにとって、「流浪の地における民族のアイデンティティーの証しを求めることは、息を吸い、物を食べることにまさるとも劣らぬ重要なことであったに違いない」として、彼らが来日後すぐに「民族的宗教教育を実施した」ことを指摘する［鴨澤 1983：233］。しかし、このときタタール移民として集団を形成した人びとは、実際のところタタール人だけではなかった。本研究の冒頭で指摘したように、非イスラーム社会に避難した無国籍の難民という圧倒的なマイノリティの立場に置かれた人びとは、互いの違いよりもテュルク系民族のムスリムという共通項に目を向け、学校や礼拝所を設けてまとまりを保った。まさに「移動こそが共同性を生み出し」たのである［伊豫谷 2014：15］。

こうして誕生した移民集団に対して、時代や場所によって様々な自称・他称が用いられてきた。例を挙げれば、日本語では旧露国人、韃靼人、回教徒、トルコ人、タタール人、トルコ・タタール人、トルコ語ではタタール、テュルク・タタール、カザン・タタール、カザン・テュルク、イディル・ウラル・テュルクなどである。現在の国籍にもとづけばタタール系トルコ人、タタール系アメリカ人である人びとを、本研究ではタタール移民と呼んできた。それは何より、2010 年代に筆者が行ったインタビューや、大小様々な集まりの場で、彼らがタタール人と自称していたからである。そこではまず「我々はタタール人である」（Biz Tatarız.）と、自己とほかの極東出身タタール移民との同一性を示す態度が顕著であった。そのうえで、筆者の問いかけに応じる形で、「父はウファ出身のバシコルトだ。母はミシェルだ」というような、より詳細な民族的出自が説明された。今日のロシア連邦において、例えば 2010 年の国勢調査を前に、「バシコルトスタン共和国内のタタール村落におけるバシキール化の圧力の強化」がタタール語メディアによって報じられるなど［櫻間 2011：43］、タタール人とバシコルト人は「兄弟民族というべき集団」［山内 2002：606］ではあるものの、2 つの異なる民族として受け止められている。トルコやアメリカで、タタール人としての名乗りが優先されるのは、移動によって生み出された共同性が機能するからであり、彼らが移民であるからである。したがって、彼ら自身はタタール人と自称するが、移動こそが彼らを集団としてまとめ、移動を繰り返したからこそ複数の帰属先候補をもつに至ったことを鑑みて、本研究ではタタール移民との呼称を採用してきたのである。

5-2　新たな「故郷」トルコの創出

移住理由の語りでは、「テュルク・ムスリムの国トルコ」というモデル・ストーリーは第一に、移住のイニシアティブをとった親である1世が抱いたものである。子である2世のなかでも、例えばラヴィル・アギシ（4章1節）のようにトルコへの移住を「行く」ではなく「帰る」と表現する者はいたが、2 世がモデル・ストーリーをどこまで内面化するかには程度の差がみられた。1 世は、戦前のトルコ国籍取得運動を主導したイスハキーの影響を受け、あるいはソ連となった出身地には戻りたくない、かといって極東に定住する未来は描けないという状況で、子育てや、自分の死に場所を考えた。そして旧オスマン帝国の首都イスタンブルへの憧れや、テュルク・ムスリムの間にありたいという願いから、「カザンのトルコ人」としてトルコという新たな「故郷」を創出したと考えられる。ソ連は解体の兆しすら見せず、無国籍のままでいるわけにもいかず、いずれかの国籍を取得しなければという必要に迫られて、受け入れの門戸を開いたトルコを選んだという事情もあった。このような経緯で生み出されたモデル・ストーリーはしかしながら、極東で生まれ育った2世にとって、必ずしも即座に同様の感情を抱く「故郷」を生み出すものとはならなかった。トルコ軍将兵と交流をもつまで、あるいはトルコ国籍を取得するまで、トルコをほとんど意識することはなかったという 2 世もいるように、彼らにとって慣れ親しんだ生活は、極東にあったのである。

移住後、母語としてタタール語を話す若い2世にとって、同じテュルク系言語であるトルコ語を習得することは、容易だった。むしろ、高齢期に差し掛かった1世がトルコ語習得に苦戦する様子が、2 世の記憶に残されている。タタール語は、家庭内の言語として使用された。また、トルコの多数派と同じスンナ派（ハナフィー学派）ムスリムであるため、独自に礼拝の場を確保する必要も消滅した。モデル・ストーリーで強調される言語・宗教的親近性は功を奏し、極東で保持したような移民特有のニーズにもとづく制度としての礼拝の場の必需性は、失われたといえる。当初は移住を望んでいなかったが、父の再三の勧告で離日せざるを得ず、しかし次第にトルコを「好きになった」という神戸出身のインタビュー協力者もおり、2 世はトルコ社会で人生を歩みはじめた。共産主義勢力が台頭し、もはや自分たちタタール移民のコミュニティも残っていない中国と朝鮮半島には戻れないことは、特にトルコ社会への適応を促しただろう。これは、1970 年代オマーンに帰還したアフリカ系オマーン人が、アフリカでの革命による難民であり、「石油経済で潤っているオマーンに比べ、経済および治安状態の悪いアフリカに再移住するという選択肢」をもたず、「オマーン・アラブ的生活様式」への「適応度を促進させる社会的要因」のひとつとなったことと、共通する［大川 2006 : 68］。しかしそれでも、1960 年代に協会を設立し、タタール語とタタール文化を保持し、互いに集う機会をつくったように、民族的親近性は、「トルコ人」であることを強制するナショナル・アイデンティティへの完全な同化をもたらしたわけではなかった。

5-3　極東出身タタール移民という拠りどころ

「トルコ人という民族の概念を国民概念に重ね合わせながらトルコ共和国という国家はトルコ人だけから成る国だという、詭弁とも思える論理で押し通そうとしてきたトルコ人至上主義」は、アルメニア人やギリシア人、クルド人との間に深刻な民族問題を生み出してきた［坂本 2014 : 154］。明言しておきたいのは、テュルク系民族であり、スンナ派（ハナフィー学派）ムスリムであるタタール移民は、民族集団としてトルコ政府との間に問題を抱えているわけではな

い[47]。さらに、英語能力を代表とする「開発可能な知識」［Svanberg 1989：26］を生かし、地元のトルコ人とは競合の少ない職を獲得することもできた。民族集団全体としてみれば、居住環境を整え、教育と就業の機会および国籍を得て、政治的経済的適応を果たしたといえる。しかしながら、「憲法が述べていた『トルコ人』＝『トルコ国籍を持つもの』という解釈から遠ざかり、「トルコ共和国の国民はすべて民族として『トルコ人』であることが強調されてゆく傾向を示」す環境にあって［新井 2016a：152-153］、トルコ社会以外の世界を知る 2 世には、時として不可視の心理的・社会的圧力がのしかかっただろうことは、想像に難くない[48]。中国から来たと言えば、「中国人らしい見た目ではない」と怪訝な顔をされ、あるいは日本からトルコ行の船に乗ったたことで「日本人」と呼ばれるなど、彼らが移住した当時、一般のトルコ人にとって、極東はあまりに遠い存在だった。ソ連圏内に暮らすテュルク系民族の個別の名称や実態もヴェールに包まれ、「ピス・タタール」（汚いタタール）という蔑称まで使われた時代、堂々とタタール人だと名乗ることもできなかった。それから時が流れたインタビューの場においても、極東での記憶をもたないラヒレ・アギ（3 章 1 節）が示したような、タタール人とトルコ人である自己を両立させる歯切れの良さは、すべての 2 世にあてはまるものではなかった。

適応の過程で新生活の評価基準となるのは、それまでの慣れ親しんだ暮らしである。極東で培った文化的背景をもちつつトルコに移住した彼らにとって、比較対象としての極東各地の存在が、適応を難しくさせた一面もある。極東で長く過ごした 2 世は、それまでの環境とトルコでの生活とのギャップを実感し、生まれ育った場所への想いを募らせることがあった。OM（3 章 2 節）は薄暗い空港や「汚らしい」服装にその落差を感じて失望し、イブラヒム・フェイズッラーオウル（4 章 2 節）は泥だらけの道にショックを受け、ラヴィルは違いを承知したうえで移住し、積極的に現実を受け止めていった。このような実体験にもとづく比較は、極東の記憶をもつ 2 世に限り、可能である。

ある社会で暮らすということが求めるのは、具体的な実生活の諸側面だけでなく、価値観の適応である。このとき、OM やラヴィレ・イディルレル（3 章 3 節）のように日本植民地下で育った者は、朝鮮半島や旧満洲という居住地ではなく、日本や日本語の影響を強調する点は特徴的である。それは、時間に正確な人びと、信頼できる商売相手という日本人に対する描写だけでなく、OM の日本語の流暢さや、ラヴィレが保管する日本語の教科書、新聞、自著に記したカタカナの署名にあらわされる。特に日本語能力の維持や日本語出版物の保存は、日本人である筆者という聞き手の存在を差し引いても、彼らが朝鮮半島や旧満洲に暮らしながら、日本語が彼らの生活世界を構成していたことを示すといえよう。彼らが懐かしさを覚えるのは、京城やハルビンという

---

47 タタール移民と同時期に移住したテュルク系民族であるカザフ難民の場合も、1970 年代半ばに起こった若者を中心とするカザフの文化への興味は、集団内に限られ、民族運動や分離主義的な兆候はなかった。彼らは決して、クルドやアレヴィのような政治化はしなかったのである［Svanberg 1989：166-168］。

48 ひとつの国が内包する多様性を等閑視し、支配的文化に従属させようとする態度は、日本にとっても無縁ではない。原は、2009 年現在、「日本において広がりを見せている多文化共生の概念」は、「『目本人』や『日本文化』の同質性・固定性・自明性を前提とした上で、『私たち日本人』が、『彼ら外国人＝ニューカマー』をどのように受け入れるのかという問いによって枠づけられている」ことを指摘する。そして、「『日本人』や『日本文化』の内的多様性や境界の流動性」は考慮されず、むしろ「『日本人』や『日本文化』の優位性と規範性」が強化されるという問題点をあぶりだす［原 2009：139］。

より具体的な場所だが、その経験の中に影響を及ぼすのが、「植民地拡大の歴史」、すなわち「国民国家の形成の歴史」［伊豫谷 2014：7］なのである。

幼少期に移住した者は、自らの極東の記憶を参照しながら比較することはできない。しかし彼らの場合も、タタール料理とともに家庭で供される醤油や「ごはん」に親しみ、極東から来たことが紐帯を生み出すタタール移民同士の付き合いや協会を通じて、自身の来歴の一部としての極東を認識した。またナイレ・クデキ（4 章 3 節）が男女規範のあり方を例に語ったように、ロシアから直接トルコへ移るのではなく、極東での生活経験をもつ移民だからこその考え方が、彼らの日々の実践や価値観に分かち難く組み込まれていた。親の教育やタタール移民内部での価値観には、近代化に苦戦するトルコに比べて、「都会」であった極東で吸収された感覚が交じり合っていたのである。家族や親戚ぐるみの仲であるタタール移民同士だからこそ生まれる信頼は、トルコの一般社会では「先進的」な男女の付き合いを可能にし、それゆえに怪訝なまなざしを受けることもあった。こうしたホスト社会から向けられるまなざしを通して意識されるのは、トルコに住む、タタール人としての民族的起源をもつ人びとのなかでも、極東から来たタタール移民こそが、「我々のタタール」であるという帰属意識である。極東で生まれ育った 2 世だけではなく、極東で生まれたより若い 2 世にも、親やほかのタタール移民を通じて、帰属先候補としての極東が存在することがみてとれる。

タタール移民の移住史を俯瞰すれば、極東は経由地として位置づけられるが、その経由地の影響は大きいものだった。移住してみれば親近性だけではないトルコ社会で生きていくために、極東は懐かしさや価値観など精神的な拠りどころとして、役割を担うようになったのである。極東での生活経験を通じて形成されたタタール移民の文化は、時として受け入れ社会であるトルコの文化とは異なる側面をもつものだった。しかしながらそれは、政治性を帯びるものではなく、日々の暮らしにくさとして認識された。トルコ移住から 5〜10 年ほどの月日が流れると、今度はそうしたトルコ社会への適応の難しさ、トルコの社会的混乱などを背景に、よりよい生活が期待できる、アメリカをはじめとする先進国への移住を模索する者がでてきた。出身国別割り当て制に阻まれたナイレの父や、トルコ在住時よりも地位の低い職に就くことへの忌避感やトルコでの生活に対する満足感から渡米をやめたラヒレ、トルコで苦労するもそこにはすでに培った生活があり、他国への移住は考えなかった OM など、語り手には様々な事情があった。アメリカはチャンスの国だという認識はあっても、結果的にはトルコにとどまった人びとにとって、帰属意識を抱くほどの存在にはならなかった。

5-4　先祖の「故郷」

ニューヨークにおける極東出身タタール移民の協会であるアメリカン・タタール・アソシエーションを 2009 年に訪問した長縄は、次のように述べている。

> どきどきしながらドアを開けると、そこはカザンだった。目に飛び込んできたのは、タタルスタンの国旗、スユムビケの塔、20 世紀初頭の詩人トゥカイの肖像画。そして、耳に入ってくるのは、懐かしいタタール語のおしゃべりと歌謡曲。［略］不思議なことに、彼らに「もともとのご出身はどちらですか」と尋ねると、どの人も判を押したように、「カザンから」と答える。そんなことはないと思い、よくよく話を聞いてみると、ウファやペンザの周辺出身

と答えてくれる人もいた。そこでピーンときた。これは「想像の共同体」なのだと。満洲や日本で生まれ育った人々は、つい最近までカザンを訪れる機会に恵まれなかったはずだ。彼らが胸に抱いてきたのは、ハルビン、東京、神戸の学校で勉強したスユムビケの物語やトゥカイの詩である。そして今日、アメリカ市民となった彼らの心の故郷は、タタルスタンとその首都カザンに収斂している。全世界タタール会議の政治的な思惑と微妙に重なりながら。そんな考えを巡らせて、ふと部屋の片隅に目をやると、一枚の白黒写真が額に入ってひっそりとかかっていった。それは、彼らが最も慣れ親しんだはずのハルビンのモスクの写真だった［長縄 2010：19-20］。

カザンに留学経験のある長縄に、「そこはカザンだった」と感じさせる空間が維持されていることは、ニューヨークのタタール移民の言語や文化保持の成功を示している。またウファやペンザが出身であっても、まずカザンと答える態度は、これまで見てきたように移動によって生み出された共同性にもとづく、移民ならではの名乗りといえる。このように協会において、カザンとのつながりが示されるのは、ニューヨークに限ったことではない。アンカラの「カザン文化互助協会」の 50 周年記念式典で配布されたしおり（資料 10）には、表にスユムビケの塔、裏にタタールの詩人であるガブドゥッラー・トゥカイの「トゥガン・テル」（母語）[49]が印刷されていた。どちらもタタール語やタタールの文化、歴史を象徴する役割を担うものであり、協会の 50 周年という意義深い節目に、改めて「タタルスタンとその首都カザンに収斂」する形で、彼らの出自が意識されているといえるだろう。では、カザンに代表されるヴォルガ・ウラル地域は、複数の帰属先候補をもつ個々人にとって、実際にはどれほどの求心力をもつのだろうか。

ヴォルガ・ウラル地域は、「動乱が終わればまた故国に帰るという気だった」［鴨澤 1983：233］1 世にとって、戻れぬ「故郷」であった。1991 年にソ連が崩壊すると、テュルク系諸国との文化面、経済面での交流が促進され、同地域を訪問することも可能となる。しかし 1 世はすでに鬼籍に入り、極東やトルコで長い時間を過ごした 2 世にとって、生きていく場所としてはあまりにかけ離れた存在になっていた。カザンやバシコルトスタン共和国の首都ウファとイスタンブルの間には、トルコ航空の直行便が運航されており、同地を訪れる 2 世は少なくない。村を訪れ、親戚を見つけるなど、先祖の出身地に対する 2 世の関心は高い。しかしそれは、家族の歴史を学びたいという興味にもとづくものであり、トルコでの生活が 60 年を超える人びとにとって、現実の生活の場所や「帰還」する場所としては捉えられていない。ラヴィレは両親の死後、「祖国」を訪れ感銘を受けるが、トルコを離れることは考えないのである。また、時間と資金があれば東京やソウルを訪れることを選んだ OM のように、訪問自体に魅力を感じない 2 世もいる。2 世がソ連崩壊後のタタルスタン共和国を通じて見いだすのは、先祖の「故郷」である。それはタタール移民としての自己を再認識するうえで、帰属先の一部をなすが、すべてではない。帰属意識の強さを比較すれば、極東がもつ比重は無視できないのである。

---

[49] トゥカイによるこの詩を歌にしたものは、「タタール民族の愛唱歌として［略］タタール語やタタール文化に関する行事などでしばしば歌われ、タタール人にとって国歌以上に親しまれるものとなってい」る［櫻間他 2017：9］。

資料 10　「カザン文化互助協会」50 周年記念式典記念品

出典：筆者個人所蔵

5-5　「ギョチメンリック」—移民であること

1927 年に生まれ、1950 年に東京からイスタンブルへと移住したタタール移民 2 世（3 章 3 節でいなり寿司の食事会を主催した人物）に、黒海地方出身と思われる彼女の隣人の故郷を尋ねたことがある。すると彼女は、問いそのものに対する嫌悪感を示した。「ネレリスィニズ？」（Nerelisiniz?）とは、日常会話でも使われる、出身を尋ねる一般的な表現である。筆者自身、数えきれないほど「ネレリスィニズ？」と聞かれ、日本人だとわかるとトルコ語が上手だと褒められ、悦に入ったものだった。トルコの日本人留学生の多くが、同様の経験をもつのではないかと思う。しかし彼女の場合、日本から来たと答えれば「日本人に似ていない」と言われることを、何度も経験してきたようだった。おそらく日本でも、決して「日本人」とはみなされず、その出自を問うまなざしを幾度となく投げかけられたのではないか。「移民はしばしばナショナルあるいはエスニックなアイデンティティが問われる。しかし同じような意味で、受け入れ社会の人びとがアイデンティティを問われることはない」[伊豫谷 2014 : 12]。この女性は録音を伴うインタビューこそ望まなかったが、筆者を「私の娘」と呼び、筆者が毎月のように自宅を訪れて長い時

間を共に過ごし、タタール移民の人びとの日々の生活や機微を学ぶ機会を与えてくれた人物である。その彼女が示したのは、「日本人」から、「トルコ人」から、そして、彼女への直接の質問ではなかったが、トルコに来た日本人留学生である筆者から、「ナショナルあるいはエスニックなアイデンティティ」を問われ続けることへの、「もうたくさんだ」という気持ちだったのかもしれない。

「ギョチメンリック」（Göçmenlik）とは、トルコ語で「移住」、あるいは「移民であること」を意味する。ギョチメン（Göçmen）は「移民」という名詞であり、リック（lik）という接尾辞がつくことで抽象名詞化する[50]。ここでは、ギョチメンリックを「移民であること」として理解する。時と場合によって強度や内容を変える複数の帰属先候補を有するタタール移民 2 世にとって、このギョチメンリックこそが、彼らの帰属意識のあり方を捉える視座といえる。3 つの祖国があると語るラヴィレは、祖母を残して移住してきたことを非難される両親の姿を記憶している。母はカザンに帰還する希望をもちながら、無国籍の状態を脱し、宗教を保ち、同じ民族の間であろうとトルコを選んだのだとラヴィレは解釈する。こうした母の考えは、微妙な立場に置かれた人びとが、現実と帰属意識の間で取り得る戦略の一形態を示しているといえよう。しかしそのような状況に置かれた人びとの事情は、移動を経験したことがない人びとには、時として理解され難い。ラヴィレはこの状況を指して「ギョチメンリックとは何たるかを知らない」と表現した。あるいはダイヤン・サファ（4 章 2 節）は、場所を問わず暮らすことができる「インターナショナル」なあり方を提示した。これは、唯一の「故郷」という前提に対してなされた、移民であること自体をアイデンティティのひとつとして認めるという異議申し立てだといえよう。

ギョチメンリックとは、移動だけでなく、その後の実生活や精神面での葛藤などを含めた包括的な経験である。このような「移動のなかに住まう」［伊豫谷 2014 : 5］とも言い換えることができる状態にある 2 世は、ホスト社会と、マイノリティとしての自身の来歴との相違のなかで、常にその立ち位置を問われてきた。このとき彼らは、かつて鴨澤が表現したような「故郷喪失者」［鴨澤 1983 : 250］としてではなく、それぞれのホスト社会の意向に沿うよう戦略をとりつつ、帰属意識においては「故郷」の内容を変化させることで、心の拠りどころを確保してきたといえるのではないか。タタール人であることを自覚し、極東への郷愁を保ちながら、トルコで培った生活を日々過ごす。これが、2010 年代に筆者が出会った人びとの姿であった。

---

[50] 例えば anne（母）→annelik（母性）、bir（数字の 1）→birlik（統一）、öğretmen（教師）→öğretmenlik（教職）など［竹内 2004 : 451］。

おわりに

本研究では、トルコに移住した極東生まれのタタール移民 2 世が帰属意識をもち得る場所、すなわち彼らの「故郷」をめぐって、先祖の出身地、各地の移民社会、生まれた場所、育った場所、移住先、移住先候補といった、複数の場所のあり方を見てきた。1 章では、国籍取得や制度的側面に重点をおきつつ、極東からトルコ、アメリカへの移住の全体像を把握した。戦前から移住の動きはあったものの、本格化したのは第二次世界大戦終結後、特に 1950 年にトルコの政権を獲得した民主党が、テュルク系諸民族に受け入れの門戸を開いた後のことだった。タタール移民は「自由移民」、あるいはトルコ国籍保有者としてトルコに渡り、その後アメリカに再移住するか、トルコに定住するかという二手に分かれた。

2 章では、タタール移民のトルコ移住に関する主要な語り口である「テュルク・ムスリムの国トルコ」というモデル・ストーリーについて、その内容と、実際の語りでみられるモデル・ストーリーとの距離感を分析した。テュルク系民族のムスリムが多数派を占め、なおかつソ連圏に取り込まれていない唯一の国トルコに対する親近感は、主に 1 世によって生み出された。移住当時のトルコが目指す方向やトルコ社会の風潮と、「テュルク・ムスリムの国トルコ」というモデル・ストーリーは、大きく相反するものではなく、またインタビュー時点でも万人に理解されやすい語り口として、機能するものだった。しかし、タタール移民のトルコ移住は、「テュルク・ムスリムの国トルコ」への移住と適応という単純な構造では理解できない。2 世にとって慣れ親しんだ生活は極東にあり、移住後の生活を評価する基準となって、時に適応を阻むことがあった。

3 章、4 章では、移住経験のなかでも移住理由とトルコ社会への適応に関わる個々人の語りを取り上げ、一連の場所がどのように解釈され、参照されているかを分析した。3 章では、朝鮮半島を幼少期に離れ、トルコ人でもタタール人でもある自己を肯定するラヒレ・アギ、20 代前半のとき朝鮮半島からトルコに移住し、トルコ語の豊かさや、言語、宗教の類似性は認めるものの、トルコ社会には批判的で、日本語で形成される生活世界に帰属意識を抱く OM、10 代前半のとき旧満洲からトルコに移り、旧満洲、トルコ、タタルスタンという 3 つの「祖国」をもちつつ、生きていく場所はトルコだと考えるラヴィレ・イディルレルを取り上げた。

4 章では、20 代前半で日本からトルコに渡り、日本で獲得した技術やトルコに関する情報を拠りどころに、トルコと日本のギャップを前向きに捉えたラヴィル・アギシ、20 代前半でトルコに渡ったのち、同地におけるタタール移民の減少から再移住を考えるようになり、30 代前半で渡米したものの、人生にとって有意義な経験をトルコで得ることができたと評価し、同時に「我々」をインターナショナルな存在として規定するダイヤン・サファ、幼少期にトルコに移住したため日本の記憶はないものの、親やほかのタタール移民を通じて、極東を経由したタタール移民ならではの価値観を内面化したナイレ・クデキに着目した。

5 章では、複数の語りを包括的に見直しながら、置かれた状況に呼応して「故郷」が生み出されていく様相をたどった。飯島は、「どのディアスポラにもいえることであるが、移民二世とそれ以降の世代にとって、故郷はふたつあ」り、「先祖の出身地としての故郷と自らの出身地としての故郷」というふたつの故郷に向ける「認識、距離感、愛着の度合いは、外的要因に影響を受けて大きく変化する」という［飯島 2016 : 608］。しかし、タタール移民の語りにあらわれる「故郷」は、「先祖の出身地」や「自らの出身地」に限定されず、「認識、距離感、愛着の度合い」は、「外的要因」にとどまらない様々な文脈の影響を受けていた。

「テュルク・ムスリムの国トルコ」は、極東生まれタタール移民 2 世にとっての唯一の「故郷」

ではない。トルコ移住のモデル・ストーリーから見えてくるのは、研究者や社会からの期待、1 世による「故郷」の創出、インタビュー時点でも理解されやすい語り口、逸脱としての移動と戻るべき場所の強制である。タタール移民が実際に有するのは、極東各地の移民社会、極東で生まれ育った場所、トルコ社会、ヴォルガ・ウラル地域という、ひとつの国や地域に限定されない複数の「故郷」であり、それぞれの場所に対する帰属意識の有無、強弱、内容もまた、変化を遂げてきた。改めて彼らの「故郷」に目を向ければ、①移動という経験を共有することで、タタールの名のもとに集団を形成した人びとは、②トルコという新たな「故郷」を創出し、③トルコ移住後は、直接あるいは間接的な極東の記憶や経験を精神的な拠りどころや評価基準としながら、④ソ連解体によって先祖の「故郷」を初めて訪問すると、帰属先の一部として再認識するようになったのである。

このようなタタール移民の「故郷」のあり方は、「ギョチメンリック」（移民であること）というトルコ語の言葉そのものに表されるだろう。それは、「故郷」は移動やホスト社会との接触によって創出、非構築、解体、改変されるものであるという大川の指摘にも符合し［大川 2016：534-548］、「移動のなかに住まう」［伊豫谷 2014：5］とも言い換えることができる、「故郷」のあり方である。ホスト社会と、マイノリティとしての自身の来歴との相違のなかで、常に立ち位置を問われてきた 2 世は、故郷喪失者としてではなく、それぞれのホスト社会の意向に沿うよう戦略をとりながら、帰属意識を抱く対象や内容を変化させることで、心の拠りどころとしての「故郷」を確保してきたのである。

20 世紀に世界各地へ移住したスコットランド移民を取り上げたハーパーは、あるインタビュー協力者が語ったスコットランド独立に対する考えを引用している。語り手は次のように述べ、狭量で近視眼的な性格を強めるスコットランドの政治を危惧する。

> 悲しいことに、人びとは外の世界の存在と、その世界に責任をもつということに対する認識を、ますます失っているように思う。それこそが、海外で働き、海外に暮らすということが、人びとに与えるものだと思う。向こうには、ほかの世界があるのだという発想こそ［Harper 2018：216］。

2019 年現在、移民との関わりにおいて、国民国家の幻想性が問われることなく、一国主義的な考えがより多くのひとに受け入れられていると言わざるを得ない。とあるスコットランド移民が語った「向こうには、ほかの世界がある」という感覚をもたない、あるいは失ってしまえば、移動する人びとの人間性は、「外国人労働者」や「社会の負担」などの言葉に奪われる一方だろう。戻るべき場所を移民に強制するのではなく、彼らにとっても「ふるさとは　遠きにありて　思ふもの」だと考えることは、許されないのだろうか。

本研究で取り上げた人びとが、移民や難民として代表性をもつと言うつもりはない。しかし、ヴォルガ・ウラル地域出身のテュルク・ムスリムという背景と、極東からトルコへの移住という経験を共有する人びとの、帰属先候補に示す同じであったり異なったりする解釈を通じて、日常生活のなかに複数の「故郷」を存在させながら生きる人びとがもつ、実体験の伴う国際性に、読者の目を向けることができたならば幸甚である。

謝辞

本研究は、筆者が早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程在学中に、同大学人間科学学術院店田廣文先生の指導のもとに行ったものである。副査として、森本豊富先生、原知章先生のお世話になった。トルコ、アメリカにおける調査の一部は、平和中島財団日本人留学生奨学生、日本学術振興会特別研究員 DC として実施した。トルコ滞在中には、ボアジチ大学アジア学研究所およびセルチュク・エセンベル先生が、客員研究員として筆者を受け入れて下さった。

学部生の頃から様々な機会を与えてくださった、長谷川奏先生、樋口美作先生、堀内則子さん、北村歳治先生、トルコでの日々を支えてくださった、エシン・エセンさん、メルトハン・デュンダル先生、小松久男先生、小松香織先生、三沢伸生先生、中山紀子先生（アルファベット順）をはじめ、多くの方のご助力を賜った。すべての方々のお名前を記すことはかなわないが、厚く御礼申し上げる。

8 年前、雨空の成田空港からトルコへと見送ってくれた両親、その両親を、トルコに出かけたきり帰ってこない姉の代わりに支えてくれた妹、そして、タタールの人びとを追いかけてあちこちいなくなる筆者に、「あなたは船で僕は港だ」と言って、常に支えてくれた夫がいなければ、やり遂げることはできなかった。

トルコから帰国したときには、これで海外生活ともお別れかと悲しかったが、思いがけずイギリス、アメリカで博士論文を書き上げることとなった。イスタンブルという視点に偏りがちな筆者にとって、異なる移民社会であるロンドン、「移民大国」の首都ワシントン D.C.に滞在できたことは、自身の研究を見直す素晴らしい機会となった。夜明け前の暁の空の下から、タタール移民の方々に万感の思いを込めて、本研究を捧げたい。

なお、人びとの語りにもとづき分析を行ってきたが、本研究から生じる責はすべて筆者に帰する。

2019 年 10 月 11 日

参考・引用文献

アブデュルレシド，イブラヒム，2013,『ジャポンヤ―イブラヒムの明治日本探訪記』小松香織・小松久男訳，岩波書店. →『ジャポンヤ―イスラム系ロシア人の見た明治日本』第三書館，1991.の増補改訂版.

Agi, Emrullah, 2009, *One Man's Life: An Unfinished Autobiography*, Kazan: "Magarif" Publishing.

Ahtam, K. Nerkis, 2014, *Ruşan*.（私家版）

赤坂恒明，2016,「日本で活躍したテュルク―在日トルコ・タタール人の戦後」小松久男編著『テュルクを知るための 61 章』明石書店，351-355.

Anderson, Benedict, 関根政美訳，1993,「<遠隔地ナショナリズム>の出現」『世界』586：179-190.

青山陽子，2010,「ハンセン病療養所における相互扶助と統治―患者組織形成期における集団への個人の適応の側面から」『日本オーラル・ヒストリー研究』6：99-118.

青山陽子，2011,「マスター・ナラティブとしての『被害』の語り―ハンセン病訴訟におけるストーリーの形成過程を通して」『現代社会学理論研究』5：171-184.

新井政美，2014,『トルコ近現代史―イスラム国家から国民国家へ』みすず書房.

新井政美，2016a,「トルコ人―『帝国』から『国民国家』へ」小松久男編著『テュルクを知るための 61 章』明石書店，150-153.

新井政美，2016b,「汎テュルク主義（汎トルコ主義）―『帝国』との関わりのなかで」小松久男編著『テュルクを知るための 61 章』明石書店，287-291.

蘭信三，2015,「オーラルヒストリーの展開と課題―歴史学と社会学の狭間から」大津透・桜井英治・藤井譲治・吉田裕・李成市編集委員『岩波講座日本歴史第 21 巻史料論（テーマ巻 2）』岩波書店，209-241.

『アサヒグラフ』，1938 年 5 月 11 日通常号 757 号：14-15,「日本を母として―東京の回教徒小学校」.

『アサヒグラフ』，1952 年 1 月 2 日通常号 1428 号：35-37,「新年宴会トルコ版」.

『アサヒグラフ』，1955 年 11 月 16 日通常号 1629 号：8-9,「さまよえるトルコ人」.

Bacon, William, 2010, *Ed & Ivet: The True Story of a World War II POW Romance,* Bennett & Hastings Publishing.

"Basic Studies about the Turkish & Tatar Muslims in the Modern Japan" Project, supported by Toyo University ed. 2011. *Tokyo Muslim School Album (1927-1937)*. Tokyo: Toyo University Asian Cultures Research Institute. →*Tokio' da Mekteb-I Islamiye' nin 1927-1937 On Yillik Hatirasi Ucun Tuzulgan Resimler Mecmuasi*/東京回教学校十周年記念写真帳. 1937. Tokyo: Yamgi Yapon Muhbiri Idaresi.の復刻版.

ベルトー，ダニエル，2003,『ライフストーリー――エスノ社会学的パースペクティブ』小林多寿子訳，ミネルヴァ書房.

Betts, Alexander, Paul Collier., 2018, *Refuge: Transforming a Broken Refugee System*, UK: Penguin Random House.

ボヤーリン，ジョナサン，ダニエル・ボヤーリン，2008,『ディアスポラの力―ユダヤ文化の今日性をめぐる試論』赤尾光春・早尾貴紀訳，平凡社.

張兵，2019,「書評　新保敦子著 『日本占領下の中国ムスリム―華北および蒙疆における民族政策と女子教育』」『アジア研究』65(3)：49-53.

張嵐，2015,「ライフストーリーにおける異文化と異言語」桜井厚・石川良子編『ライフストーリー研究に何ができるか―対話的構築主義の批判的継承』新曜社

中亜問題研究会，1943a,「特別調査資料　昭和十八年八月　神戸在住『タタール』事情調査（其一）」(『大日本回教協会寄託資料』整理済み資料 426 番，早稲田大学中央図書館イスラム文庫蔵）.

中亜問題研究会，1943b,「昭和十八年十月五日現在　在京『タタール』氏名、年令、続柄、職業其他調査ニ関スル件」(『大日本回教協会寄託資料』整理済み資料 426 番，早稲田大学中央図書館イスラム文庫蔵）.

中央アジア研究会, 1939,『中亜民族共和国事情―カザクスタン紀行（中央アジア叢書　第 2 輯）』中央アジア研究会.

コーエン，ロビン，2012,『新版 グローバル・ディアスポラ』駒井洋訳，明石書店.

Devlet, G. Beril, 2014, *Bir Ömre Altı Hayat Sığdıran Nadir Devlet'in Yaşam Öyküsü*, İstanbul: Çatı Kitapları.

Devlet, Nadir, 1970a, Başlarken, *Kazan*, 1, 3-5.

Devlet, Nadir, 1970b, Türkiye'de Kazan Türklerini Tanıtma Meselesi Ne Durumdadır?, *Kazan*, 2, 1-8.

Devlet, Nadir, 2014, Türkiye'de Kazan Tatarlarının Kurumsallaşma Çabaları, Devlet, G. Beril, *Bir Ömre Altı Hayat Sığdıran Nadir Devlet'in Yaşam Öyküsü*, İstanbul: Çatı Kitapları, 60-104.

Dündar, Ali. Merthan, 2004, Japonya Türk Tatar Diasporası, *Modern Türklük Araştırmaları Dergisi*, 1(1), 75-89.

Dündar, Ali. Merthan, 2008, *Japonya'da Türk İzleri: Bir Kültür Mirası Olarak Mançurya ve Japonya Türk-Tatar Camileri*, Ankara: Vadi Yayınları.

デュンダル，メルトハン，2012,「私は夢も日本語で見ていた―トルコ・タタール移民の活動」塩川伸明・小松久男・沼野充義編『ユーラシア世界 2 ディアスポラ論』東京大学出版会，205-228.

Dündar, Ali. Merthan, 2014. Tatar mı, Türk mü, Türk-Tatar mı?: İki Dünya Savaşı Arası Dönemde Doğu Asya'da Türk-Tatarların Kimlik Sorunu Üstüne, *Türkiye Sosyal Araştırmalar Dergisi*, 18(1), 167-174.

Esenbel, Selçuk, Inaba Chiharu.ed., 2003, *The Rising Sun and the Turkish Crescent: New Perspectives on the History of Japanese Turkish Relations*, Istanbul: Bogazici University Press.

Esenbel, Selçuk, 2004, Japan's Global Claim to Asia and the World of Islam: Transnational Nationalism and World Power, 1900–1945, *The American Historical Review*, 109(4). <http://www.historycooperative.org/journals/ahr/109.4/esenbel.html>より閲覧可能

フランク，アーサー，有馬斉訳，2014,「ナラティヴの真実と、複数の説明のジレンマ―社会物語学のオーラル・ヒストリーへの関わりについての所見」『日本オーラル・ヒストリー研究』10：3-9.

福田義昭, 2011,「神戸モスク建立―昭和戦前期の在神ムスリムによる日本初のモスク建立事業」『アジア文化研究所研究年報』45：32-51.
福田義昭，2012,「戦中期における国内ムスリム団体の統制と『回教公認問題』―在神戸ムスリム・コミュニティの視点から」『アジア文化研究所研究年報』47：77-58.
福田義昭，2016,「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象(1)東京・朝鮮篇」『アジア文化研究所研究年報』50：91-69.
福田義昭，2017a,「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象(2)神戸篇(前篇)」『アジア文化研究所研究年報』 51：129-108.
福田義昭，2017b,「昭和期の日本文学における在日ムスリムの表象(3)神戸篇(後篇)陳舜臣」『アジア文化研究所研究年報』52：1-23.
船尾章子，2008,「国際難民機構の出現と変遷 1921-1950―黎明期における多国間協力の試行過程」『神戸外大論叢』59(5)：77-101.
古矢旬, 1990,「『移民国家』アメリカの変貌 (一) ――一九六五年移民法から一九八六年移民法へ」『北大法学論集』40(5・6-下)：1015-1051.
ハラリ, N. ユヴァル, 2019 [2018],「移民―文化にも良し悪しがあるかもしれない」『21 lessons―21 世紀の人類のための 21 の思考』柴田裕之訳，河出書房新社，187-20.
原知章，2009,「『多文化共生』を内破する実践―東京都新宿区・大久保地区の『共住懇』の事例より」『文化人類学』74(1)：136-155.
Harper, Marjory, 2018, *Testimonies of Transition: Voices from the Scottish Diaspora*, Edinburgh: Luath Press Limited.
平田由美，2014,「“他者”の場所―『半チョッパリ』という移動経験」伊豫谷登士翁・平田由美編『「帰郷」の物語／「移動」の語り―戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』平凡社, 27-61.
人見佐知子，2013,「聞き取り・わたし・認識構造」『歴史学研究』912：62-72.
法政大学大原社会問題研究所編，2009,『人文・社会科学研究とオーラル・ヒストリー』御茶の水書房.
宝月理恵，2013,「戦前・戦時期日本の『衛生経験』を読み解く―オーラル・ヒストリーによる近代衛生史の可能性」『歴史学研究』912：50-61.
Hürriyet, 12 July. 1956. Petrol ve 20 de Güzel Kadın Getiren Ticaret Filomuzun en Büyük Gemisi Batman Dün Geldi.
İdiller, Ravile, 2000, *Harbin'den İstanbul'a ve Eskişehir'de Beş Yıl / Anılar*, İstanbul: Türk Dünyası Araştırmaları Vakfi.
飯島真里子，2011,「『戦略』としての故郷:フィリピン日系人の帰還と国籍取得」『日本文化人類学会研究大会発表要旨集』2011(0)：10-10.
飯島真里子，2016,「フィリピン日系ディアスポラの戦後の『帰還』経験と故郷認識」『文化人類学』80(4)：592-614.
池井優・坂本勉編，1999,『近代日本とトルコ世界』勁草書房.
石川良子，2014,「ライフストーリー研究に何かできるか―10 年間の足跡を辿りながら」『日本オーラル・ヒストリー研究』10：19-28.
伊豫谷登士翁，2007,「方法としての移民―移動から場をとらえる」伊豫谷登士翁編『移動から場

所を問う―現代移民研究の課題』有信堂，3-23.
伊豫谷登士翁，2014，「移動のなかに住まう」伊豫谷登士翁・平田由美編『「帰郷」の物語／「移動」の語り―戦後日本におけるポストコロニアルの想像力』平凡社，5-26.
鴨澤巌，1982，「在日タタール人についての記録 1」『法政大学文学部紀要』28：27-56.
鴨澤巌，1983，「在日タタール人についての記録 2」『法政大学文学部紀要』29：223-302.
川野幸男，2006，「移民後世代の適応問題―世代間格差の日米比較」『経済研究』19：35-47.
小井土彰宏，2003，「岐路に立つアメリカ合衆国の移民政策―増大する移民と規制レジームの多重的再編過程」駒井洋監修・小井土彰宏編著『移民政策の国際比較』明石書店：29-81.
小松久男，1996，「タタール商人と中央ユーラシア」『史学雑誌』 105(12)：120-121.
小松久男，2008，『イブラヒム，日本への旅―ロシア・オスマン帝国・日本』刀水書房.
小松久男，2016，「ロシア革命とテュルク―自治の夢とその後」小松久男編著『テュルクを知るための 61 章』明石書店，262-266.
小松久男編著，2016，『テュルクを知るための 61 章』明石書店.
小宮まゆみ，2009，『敵国人抑留―戦時下の外国民間人』吉川弘文館.
Koser, Khalid, 2016, *International Migration: A Very Short Introduction*, Second Edition, New York: Oxford University Press.
倉田有佳，1998，「二つの大戦間の亡命ロシア人社会―在京浜ロシア人学校と在京浜亡命ロシア人社会」『ロシア史研究』62：34-47.
Kurban, Sofya, 2012, *Göç*, Ankara: Phoenix.
Lee, Hee-Soo, 1988, Rusya Türklerinin Uzak Doğu'ya Göçleri ve Kore'de Türk Toplumu (1920-1950), *Türklük Araştırmaları Dergisi*, 4, 103-118.
松原正毅，2011，『カザフ遊牧民の移動―アルタイ山脈からトルコへ 1934-1953』平凡社.
松田素二，2013，「現代世界の解釈ツールとしての桜井式ライフストーリー法―滋賀県・湖西、湖東の調査から」山田富秋・好井裕明編『語りが拓く地平―ライフストーリーの新展開』せりか書房, 171-194.
松長昭，1999，「アヤズ・イスハキーと極東のタタール人コミュニティー」池井優・坂本勉編『近代日本とトルコ世界』勁草書房，219-263.
松長昭，2008，「東京回教団クルバンガリーの追放とイスラーム政策の展開」坂本勉編著『日中戦争とイスラーム―満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』慶応義塾大学出版会，179-232.
松長昭，2009，『在日タタール人―歴史に翻弄されたイスラーム教徒たち』東洋書店.
松尾知明，2013，「ニューカマーの子どもたちの今を考える―日本人性の視点から」『異文化間教育』37：63-77.
南川文里，2017，「移民と難民―難民危機時代の移民研究をさぐる」『移民研究年報』23：3-6.
Misawa, Nobuo ed., 2012, *Tatar Exiles and Japan: Koji OKUBO as the Mediator*, Tokyo: Toyo University Asian Cultures Research Institute.
Misawa, Nobuo ed., 2014, *Album of Tatar Exiles in Interwar Japan*, Tokyo: Toyo University Asian Cultures Research Institute.
三沢伸生，2014，「1950 年代における在日タタール人に関する史料―データベース化すべき私文書史料一例―」『アジア文化研究所研究年報』48：224-219.
三沢伸生，2016，「在日タタール人―転遷の歴史」小松久男編著『テュルクを知るための 61 章』

明石書店, 343-347.
森本豊富，1998,「『マージナル・マン』としての米国日系二世―戦前・戦中期における留日学生を中心に」『人間科学研究』11(1)：73-86.
森亜紀子，2017,「沖縄に暮らす南洋群島引揚者の証言集を発刊して」『日本オーラル・ヒストリー学会第 15 回大会』2017 年 9 月 2 日，近畿大学，発表レジュメ.
村知稔三，2006,「1920 年代初頭のロシアにおける飢饉と乳幼児の生存・養育環境」『青山学院女子短期大学紀要』60：177-199.
長縄宣博，2010,「エンパイア・ステイトで帝国について考える」『スラブ研究センターニュース 2010 年冬号』16-22.
長縄宣博，2016a,「タタール人―ロシア人の身近な他者」小松久男編著『テュルクを知るための 61 章』明石書店, 133-137.
長縄宣博，2016b,「テュルクかタタールか―民族のかたちをめぐる政治」小松久男編著『テュルクを知るための 61 章』明石書店，277-281.
仲田周子，2008,「沖縄系移民の語りからみる日系ペルー人強制収容経験の位置づけ―日系人研究の再定義をめざして」『日本オーラル・ヒストリー研究』4：107-121.
中山紀子，1999,『イスラームの性と俗―トルコ農村女性の民族誌』アカデミア出版会.
中山紀子，2010,「『男はみんなオオカミよ』がもたらす秩序 ―ムスリムたちの男女関係・トルコ」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所編『フィールドプラス：世界を感応する雑誌』3：7-7.
日本学術振興会科学研究費基盤研究，2006,「日本・イスラーム関係のデータベース構築」・早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室編『CD-ROM 大日本回教協会関係写真史料 ver.1』東京：日本学術振興会科学研究費基盤研究「日本・イスラーム関係のデータベース構築」・早稲田大学人間科学学術院アジア社会論研究室.
錦田愛子，2010,『ディアスポラのパレスチナ人―「故郷」とナショナル・アイデンティティ』有信堂高文社.
西山克典，1996,「クルバン・ガリー略伝―戦間期在留回教徒の問題によせて」『ロシア革命史研究資料』No.3.
西山克典，2006a,「クルバンガリー追尋―国際情勢に待機して(1)」『国際関係・比較文化研究』4(2)：325-350.
西山克典，2006b,「クルバンガリー追尋―国際情勢に待機して(2)」『国際関係・比較文化研究』5(1)：93-109.
野田仁，2016,「バシキール人―南ウラルの勇者」小松久男編著『テュルクを知るための 61 章』明石書店，158-162.
沼田彩誉子，2011,「日本におけるタタール人コミュニティ―1920～1950 年代の東京を中心に」，早稲田大学大学院人間科学研究科修士論文.
Numata, Sayoko, 2012, Fieldwork Note on Tatar Migrants from the Far East to the USA: For Reviews of Islam Policy in Prewar and Wartime Japan, *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 28 (2), 127-144.
沼田彩誉子，2014,「東京のタタール移民関連写真資料―1940 年代から 60 年代まで」『アジア文化研究所研究年報』48：175-182.

Numata, Sayoko, 2015, Uzak Doğu Kökenli Tatar Göçmenlerin Türkiye ve Amerika'ya Göçü: 'Büyük Japonya Müslüman Derneği Arşivi'nde Bulunan Tatar Göçmen İsim Listeleri Temelinde, Esenbel, S., Küçükyalçın, E. eds., *Türkiye'de Japonya Çalışmaları Konferansı II*, Istanbul: Boğaziçi Üniversitesi Yayınevi, 400-421.（「極東出身タタール移民のトルコとアメリカへの移住―『大日本回教協会寄託資料』所蔵のタタール移民名簿をもとに」『トルコにおける日本研究会議 2』）

沼田彩誉子，2015,「ペレメチとチャイとお豆腐屋さん」Esin Esen, Ikuko Suzuki ed., *Kotodama İstanbul-Hajimari 2015*, Istanbul: Arkeoloji ve Sanat Yayınları, 133-135.

Numata, Sayoko, 2018, An Interim Report on Fieldwork on Tatar Mıgrants in Turkey, The USA, and Japan, hazırlayan A. Merthan Dündar, *Abdürreşit İbrahim Ve Zamanı: Türkiye ve Japonya Arasında Orta Avrasya*, Ankara: Türk Tarih Kurumu, 87-102.

沼田彩誉子，2019,「極東生まれのタタール移民 2 世の移住経験―『テュルク・ムスリムの国』トルコへの適応過程における『経由地』極東の役割」『日本オーラル・ヒストリー研究』15：163-188.

Numata, Sayoko, Forthcoming, Tatar Diasporası'nın Japonya'daki Yaşamı, 'Tekrar Göç'ü ve Sonrası: Tokyo Kökenli Bir Tatar Göçmen Örnekleminde, *III. Uluslararası Tatarların Tarihi Mirası Konferansı*, 9-11 October 2013, Osmangazi Üniversitesi, Eskişehir.（「タタール・ディアスポラの日本における生活、再移住、その後―東京出身タタール移民の事例」『第 3 回国際タタール世界遺産会議』）

大門正克，2004,「聞こえてきた声、そして『聞きえなかった声』―ある農村女性の聞き取りから」『歴史評論』648：18-30.

大門正克，2014,「あらためて『聞く』ということ―ask と listen のあいだ」『日本オーラル・ヒストリー研究』10：47-52.

大門正克，2017,『語る歴史，聞く歴史―オーラル・ヒストリーの現場から』岩波書店.

大川真由子，2004,「移民でもなく、ネイティブでもなく―アフリカ系オマーン人のエスニック・アイデンティティ」『文化人類学』 69(1)：25-44.

大川真由子，2006,「現地報告 アフリカ系オマーン人の文化的適応―アラブとスワヒリのはざまで」『アジア経済』47(3)：59-73.

大川真由子，2016,「序 帰還から故郷を問う」『文化人類学』80(4)：534-548.

大久保幸次，1924a,「極東に動くトルコ民族」『日本及び日本人』60：7-14.

大久保幸次，1924b,「日本へ来たロシアの回々教徒避難民について（一）」『國際知識』4(2)：96-108.

大久保幸次，1924c,「日本へ来たロシアの回々教徒避難民について（二）」『國際知識』4(3)：108-119.

大久保幸次，1936,「満州および日本におけるトルコ族」大久保幸次・小林元『現代回教圏』四海書房， 298-317.

重親知左子，2003,「松坂屋回教圏展覧会の周辺」『大阪大学言語文化学』12：179-191.

親知左子，2005,「宗教団体法をめぐる回教公認問題の背景」『大阪大学言語文化学』14：131-144.

小野亮介，2017,「戦中期における在日・在満タタール人の国際移動―アズハル留学とトルコ転籍問題をめぐって」『地域文化研究』18：227-248.

オスマノヴァ，ラリサ，2005,「研究資料としての新聞『ミッリー・バイラク』」『東北アジア　アラカルト』15：127-138.
オスマノヴァ，ラリサ，2006,「戦前の東アジアにおけるテュルク・タタール移民の歴史的変遷に関する覚書」『北東アジア研究』10：45-66.
Özcan, Ömer, 1997, Uzakdoğu'da İdil-Urallıların Varlık Mücadelesi, *Toplumsal Tarih*, 8(48), 39-43.
ポダルコ，ピョートル，2010,『白系ロシア人とニッポン』成文社.
坂本勉編著，2008,『日中戦争とイスラーム―満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』慶応義塾大学出版会.
坂本勉，2014,『トルコ民族の世界史』慶應義塾大学出版会.
桜井厚，2002,『インタビューの社会学』せりか書房.
桜井厚，2005,『境界文化のライフストーリー』せりか書房.
桜井厚，2012,『ライフストーリー論』弘文堂.
桜井厚，2014,「オーラルヒストリーの悩ましさ」『日本オーラル・ヒストリー研究』10：41-46.
桜井厚・小林多寿子編著，2005,『ライフストーリー・インタビュー―質的研究入門』せりか書房.
櫻間瑛，2011,「現代ロシアにおける民族理解についての一考察―タタルスタン共和国における2010年全露国勢調査を事例に」『ロシア・東欧研究』40：34-49.
櫻間瑛・中村瑞希・菱山湧人，2017,『タタールスタンファンブック―ロシア最大のテュルク系ムスリム少数民族とその民族共和国』パブリブ.
佐々木てる，2004,「ネイションと国籍制度―戦後日本の国籍制度にみるナショナル・イメージ」『社会学ジャーナル』29：219-232.
佐藤けあき，2015,「忠誠と苦悩の語り―日系アメリカ人二世語学兵の従軍・進駐経験」『日本オーラル・ヒストリー研究』11：105-124.
佐藤敬，1952,「古都で聞く『買物ブギ』“故郷日本”を懐しむ人々＿トルコ紀行」『朝日新聞』1952年6月16日，夕刊2面.
澤井充生，2014,「日本の回教工作と清真寺の管理統制―蒙疆政権下の回民社会の事例から」『人文学報』483：69-107.
昔農英明，2017,「難民をどのように統合するのか？―ドイツの事例」『移民研究年報』23：21-29.
渋谷区立富谷小学校編，1990,『富谷六十年　創立六十周年記念誌』渋谷区立富谷小学校.
渋谷真樹，2013,「ルーツからルートへ―ニューカマーの子どもたちの今」『異文化間教育』37：1-14.
Shukla, Nikesh ed., 2017, *The Good Immigrant*, London: Unbound.
シルヴァーマン，デイヴィッド，2006,「発話とテクストを分析する」ノーマン・K.デンジン，イヴォンナ・S.リンカン編『質的研究資料の収集と解釈』北大路書房，211-225.
Somuncuoğlu, B. Tümen, 2009, Kazan Dergisi (1970-1980), *Türkiye Sosyal Araştırmalar Dergisi*, 13(1), 71-90.
菅美弥，2001,「『反共主義』から『人権差別廃止』へ―アメリカ合衆国移民帰化法改正審議過程に関する一考察：1952～1965年」『社会科学ジャーナル』46：61-84.
菅原睦，2016,「テュルク諸語の分類―系統樹モデルを越えて」小松久男編著『テュルクを知るた

めの 61 章』明石書店，82-86.
Svanberg, Ingvar, 1989, *Kazak Refugees in Turkey: A Study of Cultural Persistence and Social Change*, Uppsala: Almqvist & Wiksell International.
Tahir, Mahmut, 1970, Rusya Dışındaki Kazan Türkleri: Harbin'deki Türk-Tatarlar Dini ve Milli Cemiyeti, *Kazan*, 2, 37-40.
Tahir, Mahmut, 1971, Rusya Dışında Kazan Türkleri: İltica Devirleri, *Kazan*, 4, 7-9.
Tahir, Mahmut, Nadir Devlet, 1971, Türkiye'de Yaşayan Kazan'lıların Sosyal Vaziyetlerine Istatistik Bir Bakşı, *Kazan*, 6, 4-7.
竹内和夫，2004,『トルコ語辞典』大学書林.
店田廣文，2006,「戦中期日本における回教研究―『大日本回教協会寄託資料』の分析を中心に」『社会学年誌』47：117-131.
店田廣文，2007,「日本における在日ムスリム研究の現状と研究課題－1990 年以降の学術情報の検討」早稲田大学多民族・多世代社会研究所『多世代・多文化共生社会における社会・文化環境の創造研究報告書』23-35.
Tanada, Hirofumi, 2013, Islamic Research Institutes in Wartime Japan: Introductory Investigation of the 'Deposited Materials by the Dai-Nippon Kaikyo Kyokai (Greater Japan Muslim League)', *Annals of Japan Association for Middle East Studies*, 28(2), 85-106.
店田廣文，2015,『日本のモスク―滞日ムスリムの社会的活動』山川出版社.
店田廣文，2018,「日本人ムスリムとは誰のことか―日本におけるイスラーム教徒（ムスリム）人口の現在」『社会学年誌』59：109-128.
店田廣文，2018,「日本におけるイスラーム系宗教団体とコミュニティ」『社会分析』45：75-94.
田中昌訓，1939,「イスラム教とはどんな宗教か」『自警』21(1)：14-23
Thompson, Paul, Elaine Bauer, 2003, Evolving Jamaican Migrant Identities Contrasts between Britain Canada and the USA, *Community, Work and Family*, 6(1), 89-102.
Thompson, Paul, 2004, Pioneering the Life Story Method, *International Journal of Social Research Methodology*, 7(1), 81-84.
トンプソン，ポール，酒井順子訳，2004,「ポール・トンプソン氏に聞く オーラル・ヒストリーの可能性を開くために」『歴史評論』648：2-17.
『東京朝日新聞』，1923 年 9 月 27 日，「案外少ない罹災の在留外人　あはれは行商露人　続々と帰国準備の支那人」夕刊 1 面.
土屋由香，2010,「朝鮮戦争へのトルコ共和国軍派遣と USIS 映画―文化冷戦下における米国の国際メディア戦略」『愛媛大学法文学部論集総合政策学科編』28：109-126.
佃陽子，2015,「ハワイにおける現代の日本人移住者の移動性と『移民性』」『成城法学教養論集』25：41-85.
Türkoğlu, İsmail, 1997, *Sibiryalı meşhur seyyah Abdürreşid İbrahim*, Ankara: Türkiye Diyanet Vakfı.
浦賀船渠（株）編，1957,『浦賀船渠六十年史』浦賀船渠株式会社.
Usmanova, Larisa, 2007, *The Türk-Tatar Diaspora in Northeast Asia-Transformation of Consciousness: A Historical and Sociological Account between 1898 and the 1950s*, Tokyo:

Rakudasha.
内海愛子，2001，「敵国人の抑留―ジャワのオランダ人」『上智アジア学』19：1-31.
ワハブ，ラシム，2003，「在日トルコ人三世として暮らす」辻野京子『まちの記憶―代々木上原駅周辺』48-49.
渡辺賢一郎，2006，「戦前期の神戸におけるタタール人の集住と活動―移民・コミュニティ・ネットワーク」『東洋大学人間科学総合研究所紀要』5：183-206.
山田富秋・好井裕明編，2013，『語りが拓く地平-ライフストーリーの新展開』せりか書房.
山田富秋，2013，「インタビューにおける理解の達成」山田富秋・好井裕明編『語りが拓く地平』せりか書房，121-143.
山内昌之，2002，「タタール」大塚和夫・小杉泰・小松久男・東長靖・羽田正・山内昌之編『岩波イスラーム辞典』岩波書店，606.
山崎敬一・やまだようこ・山崎晶子・池田佳子・小林亜子編，2016，『日本人と日系人の物語―会話分析・ナラティヴ・語られた歴史』世織書房.
『読売新聞』，1951 年 7 月 4 日，「熱砂の国憶う　回教寺院の灯　東京都渋谷区」.
『読売新聞』，1966 年 7 月 21 日，「東京新地図 67“先住者”は回教徒たち（連載）」.
吉田達矢，2013a，「戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相―人口推移と就業状況を中心に」『名古屋学院大学論集（言語・文化篇）』24(2)：281-291.
吉田達矢，2013b，「戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相(2)―名古屋回教徒団とイデル・ウラル・トルコ・タタール文化協会名古屋支部の活動を中心に」『名古屋学院大学論集（人文・自然科学篇）』50(1)：15-34
吉田達矢，2014，「戦前期における在名古屋タタール人の交流関係に関する一考察」『アジア文化研究所研究年報』48：160-149.
ユセフ，オマー，2005，「僕を育てた富谷小学校」富谷小学校同窓会会誌編集委員会編『渋谷区立富谷小学校創立 75 周年記念誌　代々木の杜　富谷星霜』（渋谷区立富谷小学校同窓会会誌第 2 号），富谷小学校同窓会，30-31.

未刊行資料

日本語

『大日本回教協会寄託資料（イスラム文庫）』（早稲田大学中央図書館特別資料室蔵）

中亜問題研究会，1943a，「特別調査資料　昭和十八年八月　神戸在住『タタール』事情調査（其一）」整理済み資料 426 番.
中亜問題研究会，1943b，「昭和十八年十月五日現在　在京『タタール』氏名、年令、続柄、職業其他調査ニ関スル件」整理済み資料 426 番.
「東京イスラム教団員名簿（昭和十六年調査）」，1941，整理済み資料 107 番.

外務省外交史料館

「在留外国人名簿」『在本邦外国人ニ関スル統計調査雑件』（第四巻付表）.

トルコ語

首相府共和国文書館

70 göçmen grubunun vatandaşlığa alınması, Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, Fon Kodu: 30..18.1.2., Yer No: 133.71..4.

Japonya'daki Türk okullarında öğretmenlik vazifesi alan Sıddık Ungan'ın izin müddetinin uzatılması, Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, Fon Kodu: 30..18.1.2., Yer No: 158.38..19.

Japonya'daki Türk okullarında öğretmenlik yapmakta olan Sıddık Ungan'ın izin süresinin uzatılması, Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, Fon Kodu: 30..18.1.2., Yer No: 162.55..17.

Öğretmen Sıddık Ungan'ın Japonya'daki Türk Okullarında öğretmenlik görevi almasına izin verilmesi, Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, Fon Kodu: 30..18.1.2., Yer No: 137.106..11.

Sıddık Ungan'ın iki yıl daha Japonya'daki Türk Okullarında Öğretmenlikyapmasına izin verilmesi, Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, Fon Kodu: 30..18.1.2., Yer No: 147.60..5.

Uzak Doğu'dan serbest göçmen olarak gelmek isteyen soydaşlarımız hak., Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, 030-18-01-02. T.C., T.C. Dışişleri Bakanlığı 058215-10.

Uzak Doğudan yurdumuza serbest göçmen olarak gelmek isteyen soydaşlarımızın iskan istememek kaydıyla yurdumuza kabulleri, Başbakanlık Cumhuriyet Arşivi, Fon Kodu: 30..18.1.2., Yer No: 121.98..4.

インターネット

Adichie, N. Chimamanda, 2009, The danger of a single story, *TEDGlobal 2009*. 2019 年 10 月 10 日アクセス <https://www.ted.com/talks/chimamanda_ngozi_adichie_the_danger_of_a_single_story/transcript#t-875028>.

『大日本回教協会旧蔵写真資料データベース』2019 年 9 月 8 日アクセス <http://photo-kaikyokyokai.w-ias.jp/>.

「アサヒグラフ」『聞蔵Ⅱビジュアル』2019 年 9 月 8 日アクセス < http://database.asahi.com/library2/>.

Selasi, Taiye, 2014, Don't ask where I'm from, ask where I'm a local, *TEDGlobal 2014*. 2019 年 9 月 2 日アクセス <https://www.ted.com/talks/taiye_selasi_don_t_ask_where_i_m_from_ask_where_i_m_a_local>.

録音を伴うインタビューの協力者一覧

氏名	世代	性別	使用言語	極東における主な居住地	移住先1	移住先2
アブドゥッラー・ヌルランドゥ	2 世	男	トルコ語	旧満洲	トルコ	その他
エディップ・ニヴェル	2 世	男	トルコ語	旧満洲	トルコ	アメリカ
イブラヒム・フェイズッラーオウル	2 世	男	トルコ語	旧満洲	トルコ	アメリカ
イルダル・アギシ	2 世	男	トルコ語	旧満洲	トルコ	アメリカ
ネルキズ・アギシ	2.5 世	女	トルコ語	旧満洲	トルコ	アメリカ
ミュニレ・ビルギン	2 世	女	トルコ語	旧満洲	トルコ	残留
ナーディル・デヴレト	2 世	男	トルコ語	旧満洲	トルコ	残留
オルハン・アギシ	2 世	男	トルコ語	旧満洲	トルコ	アメリカ
ラヴィレ・イディルレル	2 世	女	トルコ語	旧満洲	トルコ	残留
ラヴザ・オルベイ	2 世	女	トルコ語	旧満洲	トルコ	残留
ルキエ・ウェファル	2 世	女	タタール語	旧満洲	トルコ	アメリカ
サイデ・ハジ	2.5 世	女	トルコ語	旧満洲	トルコ	アメリカ
サディエ・キリシュ	2 世	女	トルコ語	旧満洲	トルコ	残留
ラウフ・キリシュ	2 世	男	トルコ語	旧満洲	トルコ	残留
ネルキズ・アクチュラ	2.5 世	女	トルコ語	旧満洲	トルコ	残留
サイデ・アクシュ	2 世	女	トルコ語	旧満洲	トルコ	残留
ナジエ・アクシュ	2 世	女	トルコ語	旧満洲	トルコ	残留
ダイヤン・サファ	2 世	男	日本語	日本	トルコ	アメリカ
エディハム・キルキー	2 世	男	日本語	日本	トルコ	アメリカ
ファズル・アギシ	2 世	男	トルコ語	日本	トルコ	残留
仮名希望	2 世	男	日本語 /トルコ語	日本	トルコ	残留
ナイレ・クデキ	2.5 世	女	トルコ語	日本	トルコ	残留
ラビヤ・アクチュリン	2 世	女	日本語 /英語	日本	アメリカ	残留
ラヴィル・アギシ	2 世	男	日本語	日本	トルコ	残留
ラヴィル・アイギニン	2 世	男	トルコ語	日本	トルコ	残留
ルキヤ・サファ	2 世	女	日本語	日本	アメリカ	残留
サイド・アクチュラ	2 世	男	トルコ語	日本	トルコ	残留
セルヴェル・メルディ	2 世	女	日本語	日本	トルコ	残留
ズフェル・メルディ	2 世	男	トルコ語	日本	トルコ	残留

氏名	世代	性別	使用言語	極東における主な居住地	移住先1	移住先2
ヌリエ	2 世	女	トルコ語	日本	トルコ	残留
OM	2 世	男	日本語	朝鮮半島	トルコ	残留
ラヒレ・アギ	2.5 世	女	トルコ語	朝鮮半島	トルコ	残留
ソフィヤ・クルバン	2 世	女	トルコ語	その他	トルコ	残留
ブフルダン・アクシュ	3 世	女	トルコ語	n/a	n/a	n/a
エンデル・アルスラン	3 世	男	トルコ語	n/a	n/a	n/a
フアト・ティニシュ	3 世	男	トルコ語	n/a	n/a	n/a
ギュル・ギリシュメン	3 世	女	トルコ語	n/a	n/a	n/a
キュシャト・ヤズジュオウル	3 世	男	トルコ語	n/a	n/a	n/a
エルジャン・ビルギン	3 世	男	トルコ語	n/a	n/a	n/a
ハリル・エレンオウル	n/a	男	トルコ語	n/a	n/a	n/a
ラシド・ムッリン	n/a	男	タタール語	n/a	n/a	n/a